

【ネタ】 第三勢力はお疲れのようです

ろんろま

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

大魔王バーンが地上侵攻に乗り出した頃、魔界には第三の勢力と呼ばれるものがあった。

その男は大魔王バーン、冥竜王ヴェルザーに次ぐ力を持っていたが、ヴェルザーが石になりバーンが地上へ侵攻している今下手に動けずにいた。

彼が動けば魔界のバランスが崩れてしまう。

しかしこのままではバーン軍とヴェルザー軍に忙殺されかねない。

ある日疲れきった彼は思った。

「さうだ地上へ行こう。」

人、それを現実逃避という。

※本作は現実逃避ギャグ……に見せかけたほのぼののコメディです。基本的に。

※基本的に第三勢力（笑）の旅行譚のようなお話となっています。

※原作既読推奨。未読でも読めます。

※完結しました。

# 目次

第三勢力はお疲れのようです

魔界は大変荒れています | 1

出会うは妙な師弟です | 20

はじめてのおつかいです | 41

地上は不思議に溢れています | 61

いい加減お仕事を始めましょう | 79

やっぱり胃痛は続きます | 98

悩みの種は向こうからやってきます

119

馬鹿は死んでも治りません | 138

目指すは空の頂です | 158

積年の恨みは深いのです | 178

本音をぶつけさせてください | 198

## 魔界は大変荒れています

大魔王バーンが兼ねてより計画していた地上侵攻計画を発動した。

それによつて魔界は希望を見出し、血の気の多い魔族たちは一旦静まった……かに思えた。

結論から言うとそんなことはなかった。

魔族たちは大魔王の力の元、彼の領地では確かに静まっている。

しかしそれ以外のもの達は逆に希望に浮かれきつていつも以上に暴動が起こつていたのだ。

特に、新興勢力とも呼ばれる第三の覇者の領地で。

オーゾン大陸。

呪われた大地とも呼ばれる魔界の中で最も瘴気の濃い危険地帯だ。

その中心に建てられた城に彼らはいた。

「王様、オードの港でまた暴動が起きています」

「首都でまた例の魔族達が王に挑戦を求めています。被害は拡大中！」

「バーン軍と思われる者達が北の都に侵攻中！ 北の結界術士から応援の要請がきてい

ます」

「王様、南の荒野でまた冥竜王の勢力らしき者たちが暴れています」

「……………またか、またなのかつ!! 襲撃! 暴動! 八つ当たり!

毎日毎日なんつでド修羅場が起きてんだあああああ!」

次々と舞い込んでくる悪い報告に、玉座に座る魔族は劈くような悲鳴を上げた。

良く磨かれた紫水晶をふんだんに使った玉座にいるのは若々しい姿の青年だ。

怒涛の勢いで流れ込んでくる報告に、長い髪を掻き巻く勢いで振り乱す姿には全く余裕がないように見える。

しかし何を隠そうこの魔族、見た目こそ年若い青年であるがジオン大陸を統べる呪怨王である。

大陸全土で起こる問題に頭を抱える主の様子に臣下たちは無理もないと涙を流す。何しろここ一月の間ずっと、大陸のあらゆる場所で魔族たちの暴動が起きているのだ。

その最たる原因こそ大魔王バーンによる地上侵攻計画である。

始めの頃は呪怨王として拍手喝采したいぐらいの気持ちで送り出した。

何しろ光のない魔界に太陽を齎すという大魔王バーンの計画。それは魔界の住民全ての願いといっても過言ではないのだから呪怨王にとっても他人事ではない。

バーン軍は強大だ。

戦力は数えるのも馬鹿らしい数のモンスターと、戦闘系の魔族……それも指折りの猛者が数十人。側近に至っては一騎当千の兵揃い。

領民や奴隷などの非戦闘系魔族を含めると千どころか万を突破するであろう一大勢力である。

そして魔界を二分する勢力ということではバーン軍には血の気の多い者が多数存在している。

しかし皮肉にもそれ故に侵攻計画に置き去りにされ、不満が溜まった魔族が多く出ているのだ。

大魔王の領地ではその不満を発散することはできない兵士達は考えた。

魔界の神にも等しい大魔王の領地で騒ぎを起こすのは言語道断、しかしじつとしてい  
るのも性に合わない。

――戦いたい。

――だが地上はいけない。

――なら敵は他にどこにいる？

そこで目をつけられたのがこのジオン大陸である。

本来ならもう一つの勢力である冥竜王ヴェルザーの領地も似たような状況に陥るは

ずだった。

しかし冥竜王ヴェルザーは先日、竜の騎士との戦いで己の領地を失っており、本人もまた竜の騎士と戦闘中で手出しできないという状況である。

よって残るジオン大陸に全ての不満が向かったのだ。

更に混乱に乗じて残ったヴェルザーの勢力までちよつかいをかけてくる始末である。

そんな毎日が修羅場な現状に、呪怨王は我慢の限界に来ていた。

玉座に飾られている紫水晶の一つに罅が入る。

その瞬間、配下たちは湧き上がる壮絶な悪寒に身を震わせた。

「お、王様、落ち着きましよう。瘴気溢れてますって！」

「あああああまた紫水晶に罅が！ 親衛隊の皆様ご連絡を——」

「誰か王様を落ち着かせろ——」

どす黒いオーラを放つ王に慌ただしく駆け回る配下。そんな混乱に混乱を極めた王座の間で、静かに一歩踏み出す男が一人いた。

王の背後に影のように控えていた男だ。黒いフードを被り姿を包み隠したその魔族は、主であるはずの呪怨王を徐にブン殴った。

「どおん！と鈍い音が響く。」

誰もが一様に動きを止める中、その魔族は冷静に言葉を紡いだ。



『落ち着いてください。呪怨王たる方がそんな様でどうするのですか』

「……落ち着かせるにしても地面とキスさせることはないだろ」

「流石です親衛隊長殿！」

配下一同から拍手喝采が沸き起こる。

そんな全く無遠慮な配下たちにはじと目を向けるも、呪怨王は改めて落ち着いた様子で椅子に座り直した。

その手に数枚の紙を召喚し魔力で印を押すと、問題対応の中で特に慌てていた四人に渡す。

「北は結界を強化しろ。これ以上の侵入を許すな。南は荒地だ、第三隊隊長に小隊を預けて殲滅してこい。」

港の暴動はどうせいつもの食糧難だ、駐屯兵に第一貯蔵庫の解放を許可する。首都の馬鹿は俺が殴る。以上」

「はっ、今すぐに！」

紙を受け取った魔族達はその内容をすぐに確認すると、各々通信魔法を用いて問題の地域へ指令を飛ばす。

一方で王が直々に出ると宣言したにもかかわらず配下の顔に戸惑いはない。

なにしろ首都で戦闘しているのはこの大陸の数少ない強大な力を持つ魔族である。

下手な兵を出せば被害が増えるだけであり、そもそも暴動の理由は呪怨王に挑むためという馬鹿ばかりだからだ。

呪怨王は一言呪文を唱え分身体を創り上げると、分身体は窓から飛び立ち外に爆弾のような音を響かせた。

すると数分後。外の喧騒は収まり暴動を起こしていた魔族たちは撃沈されたようだった。

一氣に静まり返った玉座の間で、王と残った配下たちはため息をついた。

「やれやれ、毎日がこれじゃ休む暇がない」

「バーン様が在界していた時は平和でしたのになあ……」

「引きこもりたいです王様。外交とかもう嫌です。外の奴ら滅べ」

「落ち着け外交官。一月休んでないお前の気持ちは分かるが、王様が本気にしかねん」

「首都の問題児に外の敵……医務室が胃薬を切らすのも分かります」

騒動が落ち着くや否やお通夜のように暗い雰囲気は玉座を満ちた。

そんな中呪怨王はただ一人、苦笑を浮かべて言葉を紡いだ。

「確かに最近荒れてて辛いけど、お前達まで暗くなる必要はない。何もかも天界の馬鹿どもが悪いんだからな。

まあお前達は戦闘能力がない分心労が増えるのは仕方ないが……それでも守りが固

められているだけ御の字だ」

「ですが王、いかに呪われた大地とはいえ我らの国が襲われているのですよ。我々として魔族なのに、王に頼ることばかりで戦うことのできない自分達が情けなくて情けなくて……」

そう言って悔しげな表情を浮かべる配下に、王は困ったような視線を向けた。

「生きていられるだけいいと思え。それに俺からお前達を守る喜びを奪ってくれるなよ。」

そもそもバーンや側近、特に影の野郎が来たら俺以外手も足も出ないんだから大人しく守られておけ」

王の言葉に数人の魔族が俯く。

その中でも特に親衛隊長である魔族は頭上に暗雲を浮かべる程酷く落ち込んだ気配を醸し出していた。

彼らは呪われた大地に順応した肉体を持つ魔族だが所詮それだけ。

戦闘能力で言えば呪怨王はもとより、バーン軍の一般兵士にすら劣るのだ。

親衛隊長である魔族でさえ戦闘能力は一級どまり。超級の中でも飛びぬけている大魔王バーンとその側近との間に越えられない壁がある。

慰めるつもりが別の意味で落ち込んでしまった配下たちを見て、呪怨王は慌てて付け

足した。

「まあ落ち込むな！ この大地で生きられるというのはそれだけでも凄まじいことだから！ お前ら瘴気耐性だけは規格外だから！」

……とはいえ連日の襲撃に耐えるのもそろそろ限界だよな。外の連中が勝手に死んで行くのを待つのもいいが、時間がかかりすぎる」

その先を察したのか、ある魔族がばあつと顔を輝かせた。

王はその者——外交官に苦笑を向け、命令を下した。

「命令だ。暫く西の軍港を除いて結界を最強レベルまで引き上げる。国交なんぞくそ食らえ、とあちらに伝えろ。代わりに欲求不満は受け入れてやる。」

……西には悪いがな。西区画の非戦闘員は中央に引つ込め、親衛隊及び首都防衛官をのこし総力を結集させろ。他の勢力と遊んでやれ」

「かしこまりました！ 速攻終わらせて引きこもります！」

『……止むを得ませんね。領民の安全が最優先ですが、敵軍の不満のはけ口がなくなれば大魔王の怒りを買うことは必至ですし』

大魔王の怒りなど魔界の民にとってこの世にあって欲しくないことナンバーワンである。

なにしろ数千年を生きる伝説であるかの大魔王は底知れない力を秘めている。彼を

前にして生き残れるのは冥竜王ヴェルザーか、彼らの王しかないのだ。

所詮、強大な力の前にそれ以下の者たちは吹き飛ぶのが魔界の理。触らぬ神に祟りなし、と親衛隊長は呟いた。

その一方で配下の一人は心配そうな表情で王を見つめた。

「王よ、最強の結界を長時間張り続けるのは危険すぎませんか？　不満が高ずれば王自身が瘴気に負けてしまいますよ」

「問題ない。お前達の安全が最優先だ。瘴気に関しては封印具の強化と俺自身の耐久との勝負だがな」

「それでは賭け事ではありませんか、やはり賛成できかねます！　あやつらもすぐに復活するでしょうし、王に対し負担が大きすぎます！」

あやつら、と言われて王が真つ先に思いついたのは三馬鹿と呼ばれる魔族だ。確かに脇目も振らず呪怨王に突撃する様を考えれば、呪怨王が動けなくなることを歓迎するとは思えない。

しかし彼らを気にしては守るものも守れない。そう言いたげに困ったように眉根を寄せる呪怨王を見かねてか、親衛隊長が片手を挙げた。

『では王よ、今の内に瞬間移動呪文（ルーラ）で放り出してはどうでしょう。何せ奴らはこの大陸きつての戦闘狂。バーン軍という餌があれば諸手を振って戦いに赴くのでは

『？』

「それも手だな。だが……あいつらだとやりすぎるんだよ。この大陸を飛び出してバーンの領地で暴れたら目も当てられん」

連日。それこそ毎日に近い頻度で呪怨王に戦いを挑む魔族たちの姿を思い浮かべ、一同は納得する。

かの戦闘狂ならやりかねない。

三馬鹿と呼ばれる魔族たちは血に飢えた獣というのがジオンの一般認識である。

「まあ何にせよ決定は決定だ。封印具が作られた後暫くはお前達に全てを任せ、俺は瘴気の処理に努める。いいな」

力強い王の言葉に臣下たちは一様に頷いた。

それを頃合いと見たか、親衛隊長は一つ柏手を打った。

『では本日の謁見は以上とする。各自、王の命をゆめ忘れぬよう』

その言葉を皮切りに呪怨王と親衛隊長を残し、配下の魔族たちは各々の役割を果たすべく退出していった。

二人きりになった玉座で王は徐に頬杖をついた。

「やーっと終わったな……ああ、もう普通に喋っていいぞ、誰もいない」

『いえ、どこに耳があるかわかりませんから』

「おいこら。俺の感覚が信用できないか弟よ。お兄様は悲しいぜ」

『……兄貴だから信用できないんだって』

ぼそりと呟かれた言葉にぐつと息を詰まらせる。そのまま拗ねたように顔をそむけた。

そんな呪怨王の様子を見て、親衛隊長は深い、とても深いため息をつき兄であり王である彼のご機嫌取りを実行した。

『分かったよ、普通に喋る。全く俺らの関連がバレると面倒になるのは兄貴だろうに』

「俺としてはお前のことは広く知られるべきだと思ってるんだがなあ」

『褒めてるのか?』

「褒めてる。自慢の弟だ」

真っ直ぐな賞賛の言葉に親衛隊長は深く息を吐くと、仕方ないと言いたげに肩をすくめた。

『はいはい。で、どうするんだ? 幾ら結界を強化しても、瘴気は溜まる一方だろ? あ

まり強くなると処理追いつかなくて俺達すら瘴気にやられるぞ』

「そこは俺が踏ん張る! って言いたいところだがな。現状が続くならだと正直百年持てばいい方だ。

封印具も押さええつつけるだけで根本的解決にはならないし。

一番の解決策はやはりバーンが成功して戻ってくることだが、あの慎重な性格だ。地上攻略も十年は掛けるだろうし迅速な解決にならん」

『あの方もお遊びが酷い時あるしな……いや、偉大な方なんだが。なんであそこのお誘い蹴るかな馬鹿兄貴』

「はあ。ヴェルザーの領地が丸ごとなくなつたのが痛すぎるんだよなあ」

さらつと呟かれた弟の毒舌は無視し、呪怨王は冥竜王に思いを馳せた。

冥竜王がこの王の開発した超爆弾、黒の核晶を使用したのはつい先日のことだ。

黒の核晶とは、黒魔晶という魔力を無尽蔵に吸収する性質を持つ鉱物を彼の呪術で爆弾に変えたもので、小さな大陸なら跡形もなく吹き飛ばす威力をもつ。

そのあまりの威力を考えてバーンとヴェルザーに各々の抑止として渡したのだ。

（まさかヴェルザーが本当に使つて自分の大陸を吹っ飛ばすとは思ひもしなかつたけどな）

それでも生きているのは流石大魔王と互角の力を持つ竜といったところだろう。

そろそろダメージが酷く封印されそうという噂も流れているが、冥竜王だ。同じくダメージを負つた竜の騎士に負けることはないだろう。多分。

呪怨王として正直なところを言つてしまえば、何とか生き残つてほしいところである。——ヴェルザーが封印されてしまえば両軍がさらに自重を無くすので。



「これ以上話していても仕方が無いな。願わくばヴェルザーよ封印されるなよ……」  
『……冥竜王までいなくなったら俺らが死ぬぞ』

無論、胃痛的な意味である。

そしてその願いはたやすく打ち砕かれたのだった。

引きこもり宣言から数日後。

冥竜王ヴェルザーが天界にその魂を封印されたという報を受け、呪怨王と親衛隊長は灰と化していた。

王の私室で酒を飲んでいた二人であつたが、齎された悲報はあまりに残念なものであつた。

「あのうっかり竜……何天界に封印されてんだ………」

『ピンポイントで天界つてとこがミソだよな。バーン軍どころかヴェルザー軍が暴発したぞ』

曰く、竜の騎士に敗れた冥竜王は魂を天界に封じられ囚われた。

曰く、封印は強固なものらしく自力での脱出はほぼ不可能。

曰く、自棄になったヴェルザー軍が自棄の勢いのままジオン大陸に突入してくる。

通信魔法で次々と飛ばされてくるそんな緊急報告を読みながら、二人は思い切りため

息をついた。

魔界の住民の天界に対する遺恨は深い。深すぎる。

それも当然だ。そもそもこんな暗黒とマグマしかない不毛の大地に魔族を押し込んだのは神々と天界に住む精霊たちなので、魔界の住民で神を嫌っていないものなどいないのだ。

そんなところに魔界の王の一人であるヴェルザーが封印されてしまえば、当然ながら不満が爆発する。

「……とりあえず前の通り守り固めといってくれや。ヴェルザーんところは残り少ないから乗り切れば数年は大人しくなるだろ。」

バーン軍は適当にあしらつとけ。不幸なことだが瘴気が激増したから普通の魔族なら滞在三日持たないだろうし」

『かしこまりました。その……陛下もどうかお大事に』

西の軍を率いている隊長に鏡を通じ命令すると、通信魔法を終える。

一月ですつかり世話になった胃薬を服用し、王は眉間の皺を解した。

「もう嫌だ胃が痛い……」

『頑張れ兄貴。辛いなことに三馬鹿は静かじゃないか……』

「あいつら静かとか嫌な予感しかしないんだが弟よ。というか俺もう逃げたい。」

俺も一応数千年生きたけど、こんなに胃が痛いのは初めてだ……」

基本、魔族は寿命が長いせいとその歴史も非常に緩やかなものである。

一月以上も連続で事件が起こる方が珍しいのだ。

そんな連日の修羅場に実の兄がさめざめ泣く姿を弟は容赦無く殴り飛ばした。

『今兄貴まで出てつたら辛うじて保たれてる均衡がどうなるか分かってんだろ  
うな……』

「……うん、済まなかったから顎はやめような意識飛ばす」

フードで分かりづらいが、完全に目が据わっていた。親衛隊長たる彼も色々と限界のようだ。

どうどう、と興奮する獅子を宥めるがごとく説得をしていると、視界の隅で何か輝く。新しい通信魔法だ。

親衛隊長もそれに気付いたのか獣のような唸り声が鳴りを潜める。

その様子に一安心しつつ新たな報告に頭を抱えると、王は観念して鏡に目をやった。

「またか。今度はなんだ……」

報告を読んだ王の表情から感情が抜け落ちた。

それを見て同じように報告を覗き込んだ弟もまた黒いフードの奥で表情を凍らせた。

通信魔法を使った報告で鏡には魔界の文字でこう書かれていた。

『拝啓

親愛なる呪怨王殿。

我らが魔界を旅立ち早一月。今も魔界は血を求めた強者が戦っているのだろうか。

さて、風の噂で余に変わって魔界の安寧を齎していると聞き、貴殿に感謝の意を申し上げる。

我が軍は現在、地上攻略に向けて地上の魔王を総司令とした新生魔王軍を編成しているところだ。

地上の魔族にも中々気骨のあるものがおり、今後次第では貴殿に並ぶやも知れぬ。

かつて交わした賭け事も意味のないものになるやも知れんな。

では次は地上消滅を成し遂げ、魔界に太陽を齎した後に会おう。敬具

大魔王バーン』

「ふ……ふふ、俺らが必死こいている間に奴は何してんだ……」

『……どう考えても新しい玩具手にしてはしゃいでるんだろあの方は……』

無駄に威圧感のある大魔王の近況報告に顔を引きつらせながら王は無難に返信をした。

要約すると「そうか。頑張り」を超遠まわしにした文面である。

本音を言えば魔界の軍をどうにかして連れて行けと言いたいところだったが、かの

魔王の前にあの程度の軍勢は不要と返されるだろう。いらぬ騒ぎを起こす必要はない。

鏡に浮かんだ文字を消そうとして王はふと気付いた。

足元に小さく追伸がある。

「嫌がらせか」

だがこれをやったのはバーンではないだろうと王は思った。

そもそも嫌がらせを考えるほど大魔王は狭量ではない。

適当に流し目で文面を読むと、王は徐に鏡を蹴った。魔族として強力な力を持つ呪怨

王の脚力に耐え切れるはずもなく鏡は砕け散り、破片を辺りに散らした。

『あ、兄貴?!』

「あんのうっかり竜ー」

冥竜王に一言呪詛を吐いて王は鏡をさらに粉々に踏み砕いた。

尚、追伸にはこうあった。

『ウチの王様より救援依頼だよ！ 封印解くの手伝ってネ！』

具体的には天界を呪ってくれればいいから！

冥竜王さまの下僕、死神より』

ちなみに、差出人のところにハートマークが浮かんでいたりするが王は記憶から抹消した。

ついでに依頼の内容も抹消したいところだったが、流石にそれは踏みとどまった。

なぜかという、遠い遠い昔に王は冥竜王に命を救われたことがあったからだ。その恩がある以上、無下には出来ない。悪態は吐くが。

呪怨王は徐に弟の肩を掴んだ。

「弟。マジですまん。暫く影武者を頼む」

『は？』

弟が首を傾げるのも束の間、ぽん、と手を叩いたような音とともに王の姿が掻き消えた。

ご丁寧に椅子に残ったのは魔界の文字で「たびにでます。さがさないでください。――

――追伸、だいたい全部ヴェルザーのせい」と書かれた置き手紙だった。

親衛隊長はわなわなと震えながらそれを握り締めると、天を仰いだ。

『ふざけんな丸投げか糞兄貴――!!!』

弟の怒声を背後に、王はさっさと必要なものを取り揃え瞬間移動呪文で大陸の外へ出ていた。

勝手知ったる魔界である。行けないところはない。

しかしこのまま魔界に留まれば間違ひなく怒り狂った親衛隊長に連れ戻される。

かといって城でヴェルザーの依頼をこなすには強化した結界が邪魔だ。

血のように赤い目が魔界の暗黒の空を見つめた。

「そうだ。地上へ行こう」

呪怨王は考えるのをやめた。

疲れたのだ色々と。

思い立ったが吉日とばかりに、近場の地上に通じる空間の穴へ向かうのだった。

## 出会うは妙な師弟です

それは気の遠くなるほど昔のことだ。

どれほど昔かと言えば地上と魔界が分かれた後、魔界が一先ずの安定を得た頃のことだった。

魔界は魔王バーンと冥竜ヴェルザー、雷竜ポリクスによって統治され始め、魔族たちは神々を憎みながらも新たな生活に順応し始めた。

しかしその一方で魔族たちはある問題に出くわした。

それは、太陽のない闇の世界に落とされた弊害であったのだろう。

人間よりも少しだけ強い力を持つただけだった彼らは世代を経るごとにその姿は怪物に近づき始め、やがて獣人なるものが現れた。

更には元々人間と同じ赤色であった血液も青に変わり、人型を残す者でさえ肌の色が青く染まったのだ。

当初の魔族を知るものは年々減っていき、魔界には只管に呪いと怨念が渦巻いていた。

そんな神々への憎しみは年を経るごとに積み重なり、それは負の闘気である暗黒闘気



から怪物（モンスター）が生まれる程となってしまうていた。

そんな殺伐とした大地を、一人渡り歩く魔族の少年がいた。

「……どうして神様は魔族を見捨てたのだろうか？」

未だ人間に近い姿を残す少年はそう言っただけで目の前の瓦礫の山を不思議そうに見つめた。そこはかつて、魔の神との交信場所であった「祈りの塔」が建てられていた場所だ。

神と通じる場所であったことから魔族たちの怨念の溜まり場となっており、他の場所以上の瘴気と暗黒闘気が渦巻いていた。

とてもでないが普通の魔族は住めないその中で、その少年は何事もないように空を仰いだ。

かつては晴れ晴れしい青が広がっていた空は今や暗雲と雷鳴しかなく、気持ち沈むようだ。そんなことを思いつつ少年は大きな瞳で無感動にそれを眺めた。

どれほどの時間が過ぎたのだろう。

少年は空を見上げるのをやめると、祈りの塔の跡地へと近づいた。

「神様、聞こえますか。俺は何もしていません。何で魔族だからって魔界に押し込められたんですか？」

通じるわけがないのに、少年はかつてこの場所がそうしていたように神々へと語りかけた。

しかしどんなに声をかけても届かない。その現実には、少年はぎゅつと唇を噛み締め  
た。

【魔族にだって弱いやつはいるのに……人間ばかりずるいよもう……】  
精いっぱい怨嗟の声。しかし、その声に応える者は誰もいなかった。

それは過去の夢であった。

「……また、懐かしい夢を見たな」

洞窟特有のひやりとした空気に身を震わせ、呪怨王は目を開いた。懐かしい夢、彼の  
根源とも呼べる日の出来事が起きたあの日のことを何故思い出したのか。

きつと初めて魔界を飛び出した感傷だろう。そう結論付け、真つ赤な髪を風に遊ばせ  
起き上がる。

「さあ行くか」

洞窟を一步出ればそこは地上であった。知識では知っていたが実際に目にするのは  
初になる。

さてどんなものか、と王は冷めた眩きを残し……目の前に広がる光景に、ただただ目  
を奪われた。

——それは魔族の血よりもなお透き通った青空だった。

——それはマグマの一切流れない、生命溢れる緑の植物だった。

——それは何よりも明るく尊い、世界を照らす太陽だった。

生まれて初めて見る恵まれた大地に、呪怨王は思わず声をなくした。

あまりに魔界とは違いすぎるのだ。

魔界が神々に嫌われた大地なら地上はまさに神々に愛された大地だ、とは誰の言葉だったか。

暫し呆然としていた王ははつと思ひ出す。

地上に見とれている場合ではない。早く冥竜王を天界から取り戻さないといけない。

それにいつまでも魔界の入り口で立ち止まっていたら、親衛隊長や大魔王バーンに嗅ぎつけられるかもしれない。早くここから出なければ。

そんな思いを胸に、心なしか足早に洞窟を発った。

「おいおいその兄さんよ」

しばらく歩くくと街道に出た。旅人が歩きやすいようよく整えられた道に感心しながら歩いていると、声をかけられる。

目深にフードを被ったまま王が振り向くと、そこには数人の男がいた。

身なりは粗悪で動きに品がない。チンピラか、と呪怨王は判断する。

「俺に何か用だろうか？」

「用だろうか？ ああ、とても大切な用があるんだよ」

「そうそう。そのローブの紋様を見るに、お兄さん貴族だろうか？」

お供も連れずにこんなところ通ってちや危ないぜ」

にやにやと下卑た笑みを浮かべる男達に何かを察したのか、王は深く嘆息した。

(……どこにでもいるんだな、こういったチンピラは)

折角地上の風景を楽しんでいたのを邪魔され、王の眉間に皺が寄る。

ローブの下でそつと拳を握り、風景を邪魔しない始末を考える。

呪怨王の殺気に男達はまだ気づかない。

その無防備な体に向けて拳を振り下ろそうとした瞬間だった。

「ええ、まさにその通りですね！」

場にそぐわない明るい声が響いた。

一同の視線が一箇所に集まる。

そこにいたのは奇妙な2人組だった。

一人はにこにここと人好きのする笑顔を浮かべる青年だ。カールを巻いた青い髪が特徴的で、よく見れば端正な顔立ちをしている。

もう一人は明らかに不機嫌な表情を浮かべた少年だ。こちらも端正な顔立ちをしているが、先の青年と比べるとあまり似ていない。

髪色も銀と違うことから、兄弟ではないようだ。

「先生、また面倒ごとを……」

「ノンノン、これは人助けですよヒュンケル。」

道端で困っている人がいたらほっとけないじゃないですか」

(……ヒュンケル?)

それはかつて魔界で名を馳せた剣豪の名だった。

どうして人間が名乗っているのか気になった王は、殺気を抑え何やら話し始める二人をよく観察して見た。

するとどうだろうか。

脆弱な人間にしては二人ともよく鍛えられており、一見自然体に見えて隙がない。

流石に少年の方は発展途上と言った筋肉のつき方、身のこなしだが、それでも今後が楽しみな戦士の卵だった。

その視線に気づいたのだろう。王と青年の視線が交差した。

「どうしましたか?」

「いや、別に」

「いやいやじいっと見られてしまつては気になるではありませんか！　遠慮せずにごぞぞー！」

「いや特に用とかないんだがマジで」

「……ふむ。それは残念です。気が向いたらぜひ、いつでも質問どうぞ」

「お前ら、俺たちを忘れてないか」

絡んできた男たちの首領格が呆然と呟いた。

あ、と素で呪怨王は呟いた。正直にいうと既に忘れていたのだった。

しかし青年の方はすっかり覚えていたようだ。首領格の男に向き直ると人好きのする笑顔をそのままに声をかけた。

「忘れるだなんてとんでもない！　ただちよーつと、この方との話が混んでいただけですよー！」

「忘れてるんじゃないか！」

首領格の男の鋭いツツコミが冴えわたる。

それでも飄々と笑う青年の様子を見て連れの少年は頭痛を抑えるかのように米神を抑えていた。

まるで漫才のように動く男たちに感心していると、不意に肩を掴まれた。

鬱陶しげに振り向くと下卑た男の表情がそこにあった。強行手段に出るつもりなの

は明らかだ。

流石の呪怨王も鬱陶しくなり、火炎呪文（メラ）でも唱えようかとした瞬間。青年が動いた。

「おや。無理強いは良くありませんよ？」

「ああ？ 指図するんじゃない……」

男の仲間が青年を突き飛ばそうと腕を伸ばす。

しかしその腕は敢え無く青年に掴み取られる。ぎよつとした男の鼻先に、青年は残った右腕を突き出した。

「ひっ……!?!」

「はい、どうぞでー！」

するとどうだろうか。

どこからともなく赤い花束が飛び出し、男の鼻腔をくすぐった。辺りに甘ったるい香りが立ち込める。

まるで手品のような突然の出来事に、呪怨王を含め男たちは一様に目を丸くする。例外はただ一人頭を押さえていた少年だけだ。

「……。ふ、ふざけやがって！」

数瞬の間を置いて、花束を渡された男が青年に殴りかかった。

その拳を軽々と避けると、青年は不思議そうに首を傾げた。

「おやく、気に入りませんか？ 興奮を鎮静する効果がある香りのする花なんですよ、これ」

「先生、いつの間にそんなのをつたんですか……」

「とうかオイ、来てるぞ」

「あ、大丈夫ですよ。三、二、一、ハイ！」

青年がそう言つて手を叩いた瞬間。男たちは勢いを失つて一斉に倒れた。

軀が聞こえることから眠っているようだった。

突然の出来事に目を白黒させている呪怨王に、青年はふふつと笑いかけた。

「この花は嗅ぎ慣れてない人間を気持ちのいい眠りに誘つてしまうのです。

でも、いい香りでしょう？」

「……そうだな」

ほんのりと香る魔界にない甘い香りは、不機嫌だった呪怨王の心をふしぎと落ち着かせた。

眉間を解し、一つ深呼吸すると王は「で、何者だお前ら」と尋ねた。

「私はアバン・デ・ジニユアール三世といいます。こちらは弟子のヒュンケル」

「……ふんっ」



「アバンにヒュンケル、ねえ……あー俺はじゆ。ではなくブラッド。

見ての通り、忍びの旅をしている」

「ブラッド、ですね。こんなところで立ち話もなんですし、あちらで座って話しません？」

「そうだな。俺もお前達に興味が湧いた」

終始にこやかなアバンと対照的に、ヒュンケルは不機嫌そうであった。

しかし不思議と険悪な雰囲気はない。アバンが穏やかな瞳でヒュンケルを見ているからだろう。

アバンの名に若干の聞き覚えがあったような気がしたが、ブラッドは深く気にせず二人の後について行った。

「……うまい!!」

正午。

太陽がちやうど頂点に昇ったその頃、街道を少し外れた木の下で、ブラッドはアバン達と共に昼食をとっていた。

アバン曰く次の街までまだ遠いらしく、折角ということでアバンがご馳走してくれた

のだ。

アバンは料理上手であった。仮にも一勢力の頂点であるブラッドの舌を満足させるほどの料理を出してきたのだ。

如何に地上とはいえ、よもや屋外で城に居た頃と遜色ない食事を取れるとは思っていなかったブラッドにとって、これはいい誤算だった。

「お前、ウチの料理長にならないか？ 弟も喜びそうだ」

「それは光栄ですが、私達はまだまだ修行の途中です。世のため人のため、もつと腕を磨きたいのです」

「そうか、それは残念だ」

ひよいひよいとサンドウィッチを平らげて行くブラッド。

それに触発されたのか、ヒュンケルも食べるスピードを上げて行った。

それに気づいたアバンは苦笑を浮かべコップに水を用意する。

「むっ！ ……ぐほっ」

「ほらほらヒュンケル落ち着いて。水でもどーぞ」

先ほど水を入れたコップをヒュンケルに渡してアバンはその背を撫でた。

ただの弟子と師匠にしては距離が近く、兄弟にしては似ていない二人だ。

不思議に思い、ブラッドは尋ねた。

「お前たちはどういう関係なんだ？ ただの師弟ではないだろう」

その言葉に二人の動きがびたりと止まる。次の瞬間、ヒュンケルはぼつと立ち上がると水筒を持って飛び出していった。

あまりの早業に尋ねたブラッドは呆けた表情を浮かべる。

「あー、なんだ。聞いちやいけないことだったか」

「……そう、ですね。あの子の繊細な部分に関わるので、私からは何も言えません」

「そうか。配慮が足りなかった、悪いな」

「いえいえ、お気にせず。初対面の貴方に、ましてや魔族にそんなことを言われるとは思わなかった私の思慮不足です」

アバンの言葉にブラッドはそつと目を細めた。

冷めてしまったスープを飲み切ると、静かに呷いだ眼差しをアバンに向ける。

「ごちそうさん。なんだ最初からばれていたんだな」

「お粗末様です。それでも他の人よりは魔族について詳しいので。まあ貴方は『奴』と違つて特に害はなさそうですよが！」

「奴つて誰だ。つかそりやとんだ節穴の目だぞ、アバン」

「おやおや、フードを被つたぐらいで耳を誤魔化せると思つていた方には言われたくありませんねー」

「……む」

ブラッドはフードの奥で感心したように目を細めた。

人間で魔族について知る者は中々いない。それは魔族のほとんどが魔界にいることもそうだが、人間嫌が多い魔族と人間が出会えばたちまちの内に殺されてしまうからだ。

そんな中で一目で自分を魔族と看破したアバンはただ者ではない。

そう考えアバンを見つめるブラッドであったが、三角頭巾を被りスープを温めるその姿を見てがくりと肩を落とした。

「ん、温めはこんなもんですかね」

「……はあ。変な人間だな、お前。毒気が抜けるわ。……抜けたついでだ、あのちびっこ連れ戻してくるよ」

「へっ？ いえいえ、そこまでしていただくわけには……」

「地雷を踏んでしまった詫びだ。何もしない」

そう言つてブラッドはまっすぐアバンを見つめた。

その視線を受け取りアバンは暫し沈黙し……やがて納得したように頷いた。

「では、お願いしますね。ヒュンケルはすぐ近くの川にいますので」

探し人はすぐに見つかった。

そこは五分もかからない距離を歩いた先にあつた川岸だ。砂利だらけのそこにヒュンケルは膝を抱えて蹲っていた。

何かを堪えるように震えるその姿にブラッドはため息をつく。

「よおちびっ」。さつきは悪かつたな」

「っ!？」

完全に気を緩めていたところに声をかけられ、小さな肩が竦み上がる。

隙を見せてしまったことを恥ずかしく思いながらも、ヒュンケルは気丈にも立ち上がってブラッドを睨みつけた。

「お前に謝られる覚えなんてない!」

「うわクソガキの気配……: どうどう、落ち着け」

「ガキ扱いするな、この不審者!」

流れ着いていた手ごろな木の枝を取り、ヒュンケルはブラッドに飛びかかった。

まるで剣を扱うかのように両手で振り回すその様は危なっかしく、さしものブラッドも冷や汗半分でそれを避ける。

「オイ暴れるな。怪我をするのはそっちだぞ」

「うるさい……何が謝罪だ、魔族の言うことなんて信用できるか！」  
「げ、お前にも魔族だとばれていたのか。」

……別に信用してもらわなくとも構わん。お前の師が心配していたから早く戻つてやれ。俺が伝えに来たのはそれだけだ」

「……師、だど？」

師。

その一言を聞いた瞬間、ヒュンケルから表情が消えた。

今までの暴れようから一転、能面のように感情を消したヒュンケルに気付き、ブラツドは怪訝そうに眉根を寄せた。

「おい、どうした？」

「……ふざけるなあああああつ!!!」

一瞬の間を置き、殺気が爆発した。

木の枝を震えるほどに握りしめ、先ほどまでとは違う踏み込みをもってヒュンケルはブラツドに襲い掛かった。

瞳孔を開ききつたその鬼気迫る様子に、ブラツドは思わず目を丸くした。

しかしすぐに頭を切り替えて襲撃者を睥睨する。

首を切ろうと横薙ぎに払われた木の枝を手刀で弾くと、小さな身体が一瞬硬直する。

その隙を逃さず首筋に一刀。ヒュンケルは咄嗟に身体を捻ろうとしたが間に合わず、まともに手刀を食らい気絶してしまった。

河原に倒れる小さな身体を見つめ、ブラッドは罰が悪そうに頬を搔いた。

「解せぬ」

一応誠意をもって謝罪をしに来たのにどうしてこうなった。そう思った瞬間、なにやらどろりとした液体が手を濡らすことに気付く。

ぶつり、とブラッドの頬が裂けていた。

浅い傷のようだが、切れ味のいいナイフを使ったかのように美しい傷口であった。己を傷つけた凶器の正体をブラッドはすぐに看破する。

「闘気、だと？ こんな餓鬼が……」

闘気とは、一流の戦士が扱うことのできる生命エネルギーだ。

確かにヒュンケルの一撃はブラッドに届かなかった。

しかし僅かに。

本当に僅かに込められた闘気が刃となって、ブラッドの頬を切り裂いたのだ。

「……つと、いかんいかん。瘡気が漏れてしまう。血はかかつてないよな？」

一瞬呆然とするもブラッドはハツとして回復呪文（ホイミ）で傷を治した。

そのままヒュンケルに自身の血が着いていないことを確認すると、安堵の表情を浮か

べる。

「……正直地上舐めてたわ。認めよう、ヒュンケル。お前は魔界の剣豪を名乗るに相応しい逸材だ」

将来が楽しみだ、と呟き、はたと気づく。迎えに行つたはずの弟子が魔族に気絶させられて帰ってくる。

これをアバンがどう思うか明白だ。

……アバンにどう謝ろうか。

真剣に悩むブラッドだった。

「どうしてこうなつたんですか？」

「……お前の話題を出したら襲われた。本当にお前たちはどういふ関係なんだ」

「本当に旅の師弟なんですからね。ま、二人とも怪我がないようで何よりです」

結局のところ、ブラッドはすべてを正直に話した。

予想は付いていたのだろう。アバンはあっさり納得するとヒュンケルを寝袋の上に優しく横たえた。

それを胡乱気に見ていたブラッドに気付いたのだろう。アバンは良い笑顔でウイン



クを飛ばした。

男なのに妙に決まっている。

そんなアバンの様子に呆れながらブラッドは言った。

「本当に変な人間だな。人間は皆お前のような変人ばかりなのか？」

「あ、酷いですねえ。私はちよーっと人より茶目っ気が多いくらいで普通の人間ですよ、変り者の魔族さん」

「お前にだけは言われたくない台詞だな」

「でも事実でしょう？ 地上を侵略する気のない魔族さん」

アバンの言葉にブラッドは呻いた。正しくその通りだったからだ。

今のブラッドに地上を害する気など一切ない。

元々、自分の呪術から領民を守るためだけに地上へ来たのだ。地上に対して何の思い入れもない。

天界を呪いヴェルザーを解放する、という物騒な目的はあるものの、美しい大地に対して何かする気はなかった。

「……お前やりにくいな、本当に。人間でなければ部下に欲しかったよ」

「それよりはさっきの料理長の方が魅力的ですね。で、貴方はこれからどうするんです？」

「そうだな」

影武者をしている弟には悪いが、少しばかり地上を回りたい、とブラッドは思った。いずれ大魔王に壊されるこの美しい世界を、もつと見て回りたいかったのだ。

冥竜王の封印はそのついでにやればいい。怒られるだろうが、面倒ごとを押し付けられたのだ。それぐらいいは許されるだろう。

暖かな陽射しに手をかざし、目を細めながら、ブラッドはそう思った。

「のんびり歩いて、見て回るさ」

「……そうですか」

ブラッドの答えに嬉しそうに、アバンは微笑んだ。

「そうと決まれば一緒に行きましょう！」

「はっ」

唐突なアバンの言葉に、ブラッドは目を点にした。

理解不能、と目で主張するもアバンはまるで気にせず鼻歌を歌っている。

暫しの沈黙が下りる。

ブラッドにとつて数分か十数分か……たつぷりの間を開けて漸く思考の追いついた頭は言葉を紡いだ。

「いや、何でだ!？」

「おやおやく、分かりませんか？ 貴方が今、地上を侵略する気がなくとも気が変わるかもしれません。」

一応私は勇者と呼ばれた身。貴方を監視するついでに、世の中を見て回り、困っている人々を助ける！ これぞ一石三鳥じゃありません？」

「……お前、とんだお人好しだな」

つまりアバンはこう言ったのだ。

地上を見るなら案内する、と。

勿論言葉通りの意味も含まれているのだろうが、目に宿るのは親切心を感じさせる優しい光だけ。

魔界ではとても考えられないお人好しだ。

「では仕方ないな。おとなしく監視されておこう。地上のことなんか何も分からないしな」

「しっかりと監視させて貰いますよ。そのついでに、魔界のことも尋問させて貰います」

お互いの言葉に苦笑しつつ、アバンは手袋を取った右手を差し出した。

それを見てブラッドは少し困ったように手袋のまま手を伸ばした。

「悪いな、人間が俺に触れたら危険だし、何より立場というものがある。これで勘弁してくれ」

「おや……残念ですが、それなら仕方ありませんね」

真横から見れば握手したような二人だが、その手は重なっていない。

握手の形に歪めた手を、近くに置いてあるだけだ。

魔族の青年の不器用な挨拶に、アバンは苦笑を浮かべた。

「……そういえばお前、勇者だったのか!? どーりで聞き覚えあるはずだ!」

「今更ですか!?!」

# はじめてのおつかいです

陽の光が真上に来る少し前のことだ。

地上の勇者・アバンとその弟子・ヒュンケルと旅をすることになった魔界の呪怨王・ブラッドは太陽の輝きを受け白く浮かび上がるそれを見つけた。

「おお、あれが人間の町か！」

山脈と深い森に囲われるように作られた白い建物。

その中でも一際目を引くのは中央に佇む白亜の城であろう。

それこそがこのラインリバー大陸一の王国、ロモスの王城であった。

「アバン、ヒュンケル！ あれは城か!？」

「……」

「ええ、ロモス王国の王城です。この国の王はとても温和な人物で、町もそれを表すように平和で豊かなところですよ」

「ほう。ただでさえ豊かな地上で尚豊かとは羨ましい……!」

アバンの解説にブラッドは感嘆の声をあげた。勢いよく振り乱される赤い髪がヒュンケルに襲い掛かっているが本人は気づいていないようだ。

というのもブラッドが現在、怪しさの塊であるフードを脱いでいた為である。

フードが必要でなくなったのは単にアバンが変身魔法（モシヤス）を応用して魔族の証である耳を隠してくれたからだ。

変身魔法だが、通常このような使い方をする者は少ない。また、実際にできる者も少ない。

全身ではなく身体の一部だけ変化させるというアバンの器用さに、ブラッドは感心するばかりだった。

「もうすぐロモス王国の城下町です。今日は宿でゆっくり寝られますよ」

「ほう、宿屋。それも楽しみだが是非とも町を見て回りたいな！」

「……俺はさっさと宿に行きたいです。人間の町なんか興味ありませんし」

興味を隠さないブラッドと、仏頂面を隠そうともしないヒュンケル。

実に対照的な両者にアバンは苦笑を浮かべる。

いかにも不機嫌です、と全身で主張している弟子の目線に合わせるように腰を落とすと、アバンは優しく声をかけた。

「ヒュンケル。貴方も町は初めてでしょう？ 息抜きに思い切り遊びませんか？」

「遊びなんか興味ありません」

「遊び。人間の遊びとはなんだ？ 賭博か？」

「ブラッドはちよーつと落ち着いてくださいね。あと、賭博はありません」

「なん……だと……」

アバンの言葉にブラッドは目を見開いた。心底から衝撃を受けたとでも言いたげな表情に、アバンは疑問符を浮かべる。

しかし次の瞬間、ブラッドはアバンの肩を掴み、前後に揺さぶった。

「賭博が存在しないというのか!? 地上……恐ろしい場所だ……」

「いや賭博の概念自体はありますから! 表だってやる人は少ないものなんです。強いて言うなら武芸大会の時とか、ぐらいですかね」

激しく揺さぶられながらも律儀に答えるアバン。その言葉に納得したようにブラッドは手を離れた。

「何だ驚かせるな。うんうん、賭け事はやるよな。俺は一度も勝ったためしがないが!」  
「それもどうなんだ」

ヒュンケルの冷静なツッコミが放たれる。

少年のじと目にブラッドは罰が悪そうに頬を搔くと、咳払いをした。

「とにかく、町だ町だ! 人間の娯楽がどれほどのものか知らんが楽しませてもらうぞ!」

「そうですねえ……平和的なものだと手品や大道芸、時期によりますが劇もあります。」

娯楽も様々ですよ」

「テジナ？　ダイドウゲイ？　ゲキ？　よく分からないが面白そうだな」

「あ、手品は先日見せたものですよ。ほら、チンピラに花を出した」

「あれがテジナなのか」

ブラッドは不思議そうに目を丸くした。てつきり戦いにおける小手先の技とばかり思っていたのだ。

アバンはブラッドに肩を放すよういうと、白い手袋を身につける。言われた通り肩を放したブラッドは興味津々とした様子でその手元を覗き込んだ。

一方でヒュンケルは興味ないと言った風に顔を背ける。

しかし、時折動く視線がアバンの手元に興味を持ってるのは明らかだ。

「ではここにありますはタネも仕掛けもない白い手袋です。今からこれを花束に変えて見ましょう！」

「そんなこと出来るわけないでしょう」

呆れたように言うヒュンケルだが、アバンはにっこり笑うと彼の頭を撫でた。

「どうでしょう、ヒュンケル。これは普通の手袋でしょうか？」

「……そうですね」

頭の上に乗った手を取ると、ヒュンケルは用心深く触れた。



脱がせたり、自分でつけて見たり、もう片方の手を見せるなど徹底的に調べると、にやりと笑いアバンに返す。

その様子を眺めながら、ブラッドは何が起ころのかと年甲斐もなく期待していた。「ではお客様がご確認されたとおり、この手袋は極々普通の手袋です。

しかしあら不思議！ こうしてこすって空に放り投げてみると！」

「あっ！」

ブラッドとヒュンケル、二人の声が重なる。

空に飛び上がった白い手袋からふわりと甘い匂いが広がる。

手袋はそのまま空中で回転すると、小さな白い花束に変化したのだ。

「おおおおおおおっ!?!」

「う、嘘だ……さっきまで普通の手袋だったのに」

「ふっふっふ。どうでしょうお二方。これが手品というものです」

整った顔が得意げになっこり笑った。

アバンはそのまま落ちてきた花束を受け止めると、本物だと証明するように二人に差し出した。

二人、特にヒュンケルは半ば血走った眼つきで花束を上から覗いたり、中に手を突っ込んだり粗探しをしている。

ブラッドはそれを横目で眺めながら感心したように何度も頷いていた。

「……インチキだ！ どうせ魔法で入れ替えたんでしょう」

「ふっふっふ、残念ながらタネも仕掛けもありません。なかなかどうして、面白いでしょう？」

「ふっ。これだけでは足らん。俺を魅せたければもつと大掛かりな芸を見せるがいい」

「さつきまで興奮してた癖に……いたっ」

じと目で呟くヒュンケルを拳骨で黙らせると、ブラッドはにやりと口元をつりあげた。

では、とアバンはにこにここと笑みを浮かべたまま言った。

「こうしましょう。これより大がかりな手品というと、流石の私も準備が必要です。

そこで！ 二人にはその間におつかいをしてもらいます」

「おつかいって何ですか？」

「そうですね。頼みごと、にニユアンスは近いでしょう。今からお金を渡すので、二人にはあるものを買ってきてもらいたいです」

アバンはそういうと、懐から絵の描かれた紙を取り出した。

ヒュンケルとブラッドはそれを覗き込み……すぐさま顔を顰めた。

「待てアバン。これは落書きじゃないのか」

「ブラッドに同感です。ミミズがのたくってるようにしか見えません」

そう。

羊皮紙に描かれていたのはまさしく何匹ものミミズが絡み合っているような絵だった。

色は付いていない。

あえて特徴をあげるなら、ミミズの頭らしき部分が全て上を向いている点だろう。

「そんなことはありませんよ！ これはとある物品を正確に描いた絵なんですよー？」

「本当ですか？」

眉間に皺を寄せるヒュンケル。アバンの言い分を明らかに信じていないようだった。

そんなヒュンケルとは対照的に、ブラッドはふむふむとしきりに頷いている。

……本当にこいつ大丈夫なのだろうか、とヒュンケルはふと思った。

そんな冷たい視線に気づかないまま、ブラッドはポン、と手を叩いた。

「謎かけというわけか！」

「いや違うだろう絶対」

「えーと……まあそういうことです！ ブラッド、買い物の方は分かりますよね？」

「当然だ。魔界で買い物などしたことないが交渉なら俺に任せろ」

「……とてつもなく不安です先生。なあお前、街に来てから性格変わってないか？」  
呆れた表情を浮かべるヒュンケル。そんな彼に対し、ブラッドは実にいい笑顔で言い切った。

「寧ろこれが本来の俺だ！」

「お前、本当に魔族なんだよな？」

不安げなヒュンケルの問いも尤もである。

ブラッドはふつと口元に笑みを浮かべると、太陽へと顔を向けて目を覆った。

「……近頃は呪いの処理と戦闘狂を叩きのめすだけでなく柄にもなく魔界のバランス気にしたりしてんのに周囲が喧嘩売るわで気の休まる時期がなかったからな。

遊んだって罰は当たらないだろう……？」

呪怨王は相当疲れているようだった。

なお現在は彼の親衛隊長である弟がその重責を担っているのだがそれは思考の彼方に放り捨てた模様。

一応地上に来た目的である冥竜王ヴェルザーの解放は忘れていないが、アバンの目がある以上今すぐにどうこうできる問題でもない。

別に問題を先送りしているわけではない。断じて。

遙か遠くを見つめ、意識ここに非ず。そんなブラッドの様子に、ヒュンケルは先ほど

までの不安の表情を掻き消し、憐みの表情を浮かべた。

「……なんていうかお前本当に何してる奴なんだ？」

「機密事項だ」

「ではこれがお金です。10ゴールドもあれば目的のものは買えるので、余ったら好きなものを買っていいですよ」

話が纏まったのを見て、アバンは30ゴールドの入った袋と絵を二人に渡した。

ブラッドとヒュンケルは再度ラクガキにしか見えないその絵を見て顔を顰めるのだった。

城下町に入ると、二人はアバンと早々に別行動となった。

何でも手品の準備のほか今日この宿もついでに取るらしく、諸々の用意を済ませるようだった。

「では、はじめてのおつかいです。頑張ってくださいね！」

そう言い残しあつという間に姿を消すアバン。

残されたヒュンケルとブラッドは余りの行動の速さに思わず顔を見合わせた。

「……あいつやっぱ変人だよなあ」

「……それだけは否定できない」

とはいえここで立っただけでも仕方ない。その思いを胸に、二人はロモスの城下町をあてどなく歩き始めた。

……のだが。

「石造りの建物が多いな。デザインは中々洗練されているようだ。こういうものを風情があると人間は言うのだったか？」

「……」

「おいヒュンケル！ あれを見ろ、先ほどアバンが出した花にそっくりだ！」

「……………」

「おお、あれは酒場か。人間はどんな酒を造っているのか興味があるな。見に行かないか？」

「……………いい加減にしろ！」

ブラッドが何でもかんでも興味を示すので、それについていくヒュンケルの方が消耗していた。

もちろんヒュンケルとて初めてのロモスである。

それなりに興味はあるし、アバンの前では素直に言えないが見て回りたい気持ちだつて多少はある。

あるのだが……それ以上にブラッドが自由すぎた。

外見年齢では青年と少年である二人だったが、どちらが保護者かと言われればそれは一目瞭然であった。

焼き芋の屋台に興味を示すブラッドを引つ張り出す。ただマントを引くだけの行爲だが何度も繰り返しているヒュンケルにとつてそれは耐え難い苦行であった。

「さつさとアバンの言っていたものを見つけるぞ！」

「お前真面目だなあ。本当にうちの弟ソックリだわ。10ゴールド残しておけば好きなものを買つてもいいといわれているのだし、少しは気楽にいかないか？ 疲れるぞ」

「大きなお世話だ。大体好きなものと言われても……」

ヒュンケルの脳裏に父の優しい笑顔が浮かぶ。

幸せだった時間を思い出し目尻が僅かに滲むが、ヒュンケルはそれを振り払いブラッドに向き直つた。

「とにかく！ 俺にはほしいものなんてない。だからお前が好きに使えばいい」

「おいおい、それじゃあ俺が悪い大人みたいだろうが」

ブラッドは手袋を付けたまま罰が悪そうに頭を掻いた。

そして、何かを思いついたようににやりと笑つた。

「そうだ、いいものを買つてやる。ちよつと来い」

「はあ？」

ブラッドはそういうと徐に露店街の方へヒュンケルを引っ張り出した。露店、と一口に言っても様々だ。

武器屋くずれや防具屋くずれのほか、恰幅のいい商人が薬草を始めとする生活用品を売っている。

かと思えばどこにでもありそうな石の欠けらを痩せ細った男が売っているものもあつた。

初めて見るものばかりの光景にヒュンケルは目移りしながら露店を眺めていると、ブラッドは露店の隅へ向かった。

そこはなぜか周囲から孤立している、石ばかりの露店だった。

「おい親父。中々いいモノ揃えてるじゃないか」

「おお、アンタこれが分かるのか？」

「ブラッド。ただの石にしか見えないぞ」

そう言つてヒュンケルは指で石に触れようとしますが、露店の主はそれを鋭く遮つた。

「喝っ！　うちの商品の良さが分からない者に触れる資格はない！」

「そうだぞやめとけ。この石どれも呪われてるから」

「はあ？」

あつけからんと言ひ切つたブラッドに、ヒュンケルは胡乱げな視線を向けた。その言



葉が真実なら露店で売っていいものでないくらいは分かる。

しかし露天に並んでいるのはどこにでも転がっていきそうな石の塊ばかり。とても信じられなかった。

「そういえばお前、魔法力からつきしだったな。ガキにはえぐいかもだが見てみるか？」  
「……馬鹿にするな！ 呪いなんか怖いわけないだろ！」

威勢良く啖呵を切るヒュンケル。そんな彼に苦笑を浮かべると、ブラッドはパチン、と指を鳴らした。

するとどうだろうか。

ヒュンケルの目には唯の石ころにしか見えなかった露店の商品が、禍々しいオーラを放ち始める。

墨をぶち撒けたような黒いオーラがゆらりと揺れる。そのままヒュンケルに向かって黒が伸びていくのが見えた。

「はい終わり」

ぱん、とブラッドが拍手を打つと、禍々しいオーラは忽ち消え去り露店は通常の空間へと戻った。

空気が変わるのを肌で感じ取り、ヒュンケルは思わず尻餅をついた。そこで息苦しさに気づき、自分が呼吸を忘れていたことに初めて気づいた。

「おーい、ヒュンケル？　びびった？　びびっちゃった？」

「……」

「無言で右ストレーぐっ?!」

とりあえず腹が立ったので元凶の腹を斜め四十五度からぶん殴り、ヒュンケルは一息ついた。

完全に油断していたブラッドはぶるぶると震えながらも「元氣そうだなクソガキ……」と呟いた。

そんな二人のやり取りを見て店主は呆れたように呟いた。

「……お客さん、凄腕の癖に冷やかしかい？」

「違う！　ちゃんと客だ！　店主、この紫水晶をくれ」

「へえ、お目が高い。2000Gで結構でさあ。現金もしくは相応の対価どうぞ」

「おい、2000Gなんか払えないぞ!」

「慌てなさんな。ほら、対価だ」

「へっへっへっ……毎度あり」

店主とブラッドの会話についていけず、ヒュンケルは呆然と二人のやり取りを見送った。

店主はこれまたヒュンケルにはただの石にしか見えない手のひらサイズの塊を渡し、

ブラッドは懐から袋を取り出し、それと交換する。

目の前で行われた真つ黒な取り引きに暫し呆然とするヒュンケル。

そのままブラッドに引かれ露店を後にすると、程なくしてハツと正気に戻るや否や、鬼のような形相でブラッドに詰め寄った。

「何をやってるんだお前は！ 幾らなんでも怪しすぎるぞ！」

「アバンだつて好きなもの買っていいって言つてたろ？ あいつの金じゃないし問題ない問題ない！」

「問題しかない……そういえば、あの真つ黒なのつて……」

「呪いとか怨念とかそんなドス黒い奴で間違いないな」

「……その買った奴もドス黒いのか？」

「まあな。おい何故距離を取る。無害だつてお前には。何故更に距離取るやめろ病原菌じゃあるまいし流石の俺も傷つく!!」

結局、ヒュンケルはブラッドから三步離れたところで妥協した。

汚物のような扱いに流石のブラッドも不機嫌を隠さず眉間に皺を寄せるも、先程購入した紫水晶？をヒュンケルの前に掲げて見せた。

「よく見てろよ。アバンの真似事じゃないがな、これはこうしてやれば……」  
手袋を取り払つて握りしめる。するとその中から紫色の光が溢れた。

光はすぐに消え去る。それを見届けると、ブラッドはゆっくりと握りしめた手を開いた。

そこにはヒュンケルの目の色と似通った、紫色の美しい石が存在していた。

「解呪完了ってな」

「……！」

「どうだ、恐れ入ったか！ このじゅ……でなくブラッドに取ってこの程度見戯に等しいんだからな、本当だぞ」

「……」

「……おい何故そんな残念な者を見るような目をする」

「いや、残念な奴だなと思って」

無言の拳骨がヒュンケルの頭に飛んだ。

じくじくと痛むたんこぶを涙目で抑えるヒュンケルの様子を横目で見て溜飲を下げたのか、ブラッドはガサゴソと懐から文様の描かれた小袋を取り出す。

そしてその中に紫水晶を入れると、それをヒュンケルの手に握らせた。

「やるよ」

「はっ！」

反射的にヒュンケルは手の中にある袋を睨みつけた。

全くもつて必要ない、と全身からオーラを放ち主張するヒュンケルに対し、ブラッドは深く溜息をついた。

「こら、人の好意は受け取りやがれ」

「意味が分からない。というか、宝石なんて軟弱なもの貰っても全然嬉しくない。呪われてたし」

「だから解呪したというに……いいから貰つとけ。怒りやすい年頃にはびつたりの石だからな」

ひらひらと手を振り、ブラッドは露店街の外へと歩き出した。その姿をじと目で見つ、ヒュンケルは手の中にある袋を握りしめた。

思い出すのは透き通るような紫だ。

いくら気に入らない奴からの贈り物とはいえ、捨てるのはなんだか勿体無い気がした。

ヒュンケルは小袋を腰につけた革袋に突っ込むと、焼き鳥屋の店主と話しているブラッドの背を目掛けて走り出した。

「結局この絵は何なんだろうな？」

「知るか」

再度渡された絵を見ながら、二人は焼き芋を頬張っていた。一つ5G、二つで10Gの焼き立てだ。

焼き鳥屋から引き？がされたブラッドであったが、それから五分も経たない距離を歩いていたところ、二人の腹の虫が騒いだのだ。

時刻は既に正午を過ぎ、太陽は頂点からやや傾いている。

時間にして二時間ほど歩き回っていた二人の腹は既に限界だったのだ。

「……熱い。もそもそする」

「猫舌め。ちようどいい焼け具合だろう！ まあ俺もこんな芋初めて食べたが実に美味だ。

聞けば焼いた芋に軽く塩を振っただけとは……実に恐れ入った。地上羨まし過ぎるぞ」

「魔界つてどんな魔境なんだ……」

感涙するブラッドにボソリと呟くヒュンケル。

しかしブラッドは芋に夢中で聞こえていかなかったようだ。

ふと「秋の名物はやっぱりこれ！実りの焼き口モス芋」と書かれた紙袋が目に入る。

ヒュンケルは己の手の中にある紫色の皮に包まれたそれを見て、もう一口噛り付いた。

「……。やっぱり熱いし甘い。これだったらアバンの料理の方がマシだな」

「呼びました？」

「つぐう!？」

唐突に現れたカール頭に、油断していたヒュンケルは思い切り噎せた。

既に芋を食べ切っていたブラッドは気づいていたのか、どこからともなく現れたアバ  
ンに片手を挙げる。

「お、準備できたのか？」

「オフコース！ お楽しみは宿屋でお見せしますよ」

「げっほごほ……！」

「あららら、ちよつとおどかし過ぎちゃいましたか？ ほらヒュンケル、水どうぞ。ゆっ  
くりね」

「ぐ……先生！ いつもいつも、変な登場しないで下さい！」

そう言つてヒュンケルが水筒を突き返すも、アバンはにこにここと満面の笑みを浮かべ  
て受け取つた。

不思議に思つたブラッドはアバンに尋ねた。

「なんだその笑顔は。こちらはまだ目的の品を探していないぞ」

「おやおやおご冗談を。ちゃーんと、見つけてるじゃないですか！」

そう言つてロモス名物と書かれた紙袋を指差すアバン。

全く予想外の答えに、ブラッドとヒュンケルは顔を見合わせた。

かくしてはじめてのおつかいは終了した。

これは余談であるが、宿で披露されたアバンの手品は大層評判良く受け入れられたようであつた。

無論、その中で最も野次を飛ばしたのは、赤い髪の魔族の青年だということは言うまでもないだろう。



## 地上は不思議に溢れています

ロモス王国を北上し、ギルドメイン大陸に向かう途中のことだ。ポルトスの町へ向かう街道の横に、ブラッドはそれを発見した。

「アバン。あの青いのはなんだ？ 青玉か、それともブルーメタルか？」

太陽の光に照らされる海を指差し、ブラッドは首を傾げた。

きらきらと波打ち、時折生き物が見え隠れするそれは、まるで鉱物には見えない。しかし魔界で青と言えば真つ先に挙げられる二つの鉱物しか脳裏に思い浮かばず、ブラッドは言い様もない違和感に襲われていた。

生まれて初めて見る「海」の正体に頭を捻る彼を見かねて、アバンは苦笑しながら答えた。

「あれは海です。太陽と同じく、大地に恵を与える生命の源です」

「海だと？ ……これが!？」

馬鹿なことを言うな、と言いかけてブラッドは言葉を飲み込んだ。そう言えばここは地上であつたのだと思ひ返す。

ブラッドの中で脳裏に浮かぶのは魔界の海だ。

魔界の海は燃えたぎるマグマそのものである。こと魔界において水は貴重品だ。

ジオン大陸には5か所の小さな湖があるが、それはマグマに照らされる赤色の水だ。このように地平線まで続く水の青は想像すらしたことがなかった。

時折魚の跳ねる海を見つめ、その美しさにブラッドは感嘆の溜息をつく。

「……全く、地上には美しいものが多くて羨ましい限りだ！」

そう叫んで、ブラッドはふと思った。

これだけの水があればどれだけの魔族が救われるだろうか。自領にいる魔族だけではなく他の大陸にいる魔族の飢えすら凌げるだろうか。

しかしそれは叶わぬことだとブラッドは頭を振った。

海だけあっても魔界は救われないのだ。

どうせ大魔王バーンの地上消滅計画が成功すれば地上の大地は吹き飛び、太陽も海も魔族のものになる。

大魔王なら必ずやり遂げる。

かの大魔王の実力を、数千年の執念を知るブラッドにはその確信があった。

騒がしい魔族の青年の口元に浮かぶ笑みに、ヒュンケルは不機嫌そうに鼻を鳴らした。

「お気楽め。ブルーメタルなんか海と似ても似つかないだろ。それに、海なんてすぐ見

慣れるぞ」

「おやあ？ ホルキア大陸からラインリバー大陸にきた時、ヒュンケルも似たような発想をしていましたよね？」

「先生！」

けらけらと笑う師の姿に、たまらずヒュンケルは睨み付けた。

「ここ一週間ですっかり見慣れた師弟漫才を背後に、どこまでも続く青い海を見つめブラッドは呟いた。

「ああ、本当に美しいなあ。魔界のあいっ等にもみせてやりたいなあ」

遠い魔界に思いを馳せる。脳裏に浮かぶのは親衛隊長をはじめとした臣下達の姿だ。

目を細めて海を眩しそうに見つめるブラッドにアバンは微笑んだ。

「魔界は大地深くにあると文献にありました。よければ、詳しく教えてもらってもいいですか？」

気遣うようなアバンの穏やかな声に、ブラッドはゆっくりと頷いた。

「……そうだなあ。俺ばかりが質問していても不公平だ。聞きたいことがあれば、答えられる分だけ答えよう」

それでは、とアバンは魔界の概要を尋ねた。

どのような大地なのか、魔族はどう暮らしているのか。

他愛もない世間話をするようにブラッドは答える。

魔界はいかに不毛の大地かと聞かれれば、地上とは比べ物にならないほど枯れ果てた大地であり、住居も畑も僅かな湖周辺に多いこと。

光源は魔力で作られた偽物の照明と燃え滾るマグマしかないこと。

魔界の海と言えばマグマを指すこと。

毎日の糧は僅かに育つ作物とモンスター血肉、稀に地上から流れ込んでくる食物を食べて細やかに暮らしていることなどを話した。

仮にも王であるブラッドは他の魔族に比べれば裕福に過ごしているが、それでも地上の王には遠く及ばないだろうと予測している。

それでも、それが魔界の実情で限界であった。

太陽が頂点に昇る少し前となった。

ブラッドの話を歩きながらメモしていたアバンは小さく息を吐いた。  
「……壮絶、その一言に尽きますね」

黙したまま話を聞いていたヒュンケルも静かに頷いていた。

光の差さない地底で過ごす、というのはかつての彼にとつて馴染みのあることであったが、魔界のそれは更に異常が過ぎた。

常時マグマの濁流や死の瘴気に怯える毎日など、ヒュンケルが過ごした穏やかで幸せ

だった頃から考えると信じられない。

それはアバンも同様だった。

地上の勇者としてあらゆる場所を旅した彼であっても、魔界の生活は過酷であると感じた。

そんな神妙に表情を曇らす二人を見てブラッドはむっと眉根を釣り上げた。

「同情など必要ない。同情こそ魔族が最も忌む感情だ。ましてや自分より弱い人間に同情されるなど、普通の魔族なら憤死ものだ。即刻お前達を惨殺しにかかるぞ」

「……それをしないってことはやっぱお前普通の、一般的な魔族じゃないんだな」  
「当たり前だろう。でなければ人間と旅などするものか！」

ヒュンケルのじと目に胸を張って答えるブラッド。

そのあまりに堂々とした姿を見てアバンはくすつと笑みを漏らした。

「そうですね、何も知らない我々がすることではありませんでした。ブラッド、すみませ  
ん」

「俺は構わん。だが他の魔族には向けるなよ。まあ人間と旅する魔族など俺ぐらいだろ  
うが！」

「ブラッドは旅をとことん楽しんでますものね。魔族も人それぞれ、ということですか。」

とはいえ世界征服しか頭になかった、どこかの魔王とは大違いです」

「噂の地上の魔王か。三百と余年しか生きていない若造と比べないでほしいのだが」

地上に出現した魔王は魔界でも噂の的であった。とはいえ馬鹿なことをした魔族がいたものだ、程度のものであったが。

その魔王が地上に進出を始めたころには既に大魔王バーン、冥竜王ヴェルザーが勢力を二分し、それぞれが地上侵攻計画を立てていたのだ。

全く無名の魔族の地上侵攻など、魔界では余興扱いでしかなかった。

ふとブラッドは思い出した。

(……そういえば大魔王(バーン)が新しい玩具を手に入れてそれが地上の魔王だったわけ。

あれ? ではそいつ、アバンが倒した奴か?)

思わずアバンを見つめるブラッド。もし大魔王の拾い物が目の前の勇者が滅した存在なら彼らの因縁は根深いことになりそうだ。

もしかしたらアバンは近い未来に大魔王バーンとですら戦うかもしれない。

否、アバンが地上の勇者なら大魔王バーンと間違はなく戦うことになるだろう。……  
そして間違いなく、命を落とすに違いない。

そこまで考えてブラッドは思考を取りやめた。

面白いとはいえ人間を心配する必要はないし、分かり切った結末を考えるのはそもそも性に合わないのだ。

ブラッドの視線に気付いたのか、アバンは不思議そうに首を傾げた。

「おっと、顔に何かついてました？」

「眼鏡がついてるな。ではなく、お前早死にしそうだよな、と思つて」

「！」

「おやおや、そう見えます？」

「見える。……そうだな、アバンはどちらかという与自己犠牲で他者に遺志を託して死にそうだ……つてヒュンケル、すげー形相してるけどどうしたよ。十に満たないガキのする顔じゃないけど」

奥歯を噛みしめ、ぎりぎりと眉間に皺を寄せ殺気を放つ少年の形相に一步引くブラッド。

そんなブラッドをギン、と睨み付け、ヒュンケルは不意にアバンを睨んだ。

弟子のそんな視線を受け目を瞬かせるアバンであつたが、ふ、と幼子を安心させるように笑みを形作つた。

「……心配いりません。私は早死になんてしませんよ」

「……別に心配なんてしてないです！」

「これは失礼。てつきり心配してくれたのかと思つて、先生嬉しくなっちゃいました」  
「だから心配なんてしてないです！」

一見、実に仲の良い師弟のやり取りにブラッドは肩を竦めた。

ブラッドには知る由もない複雑な経歴を持つ二人だが、少なくともヒュンケルは本気でアバンを嫌っている。

しかしぐにぐにと頬を捏ねられたり、仕返しにアバンの頬を引つ張つたりするあの様子を見れば、心の底から嫌い切つてる訳ではないだろうな、とブラッドは思う。

きつといつの日か何だかんだ言つてヒュンケルが絆されるだろう。そう確信していた。

その過程は少し気になるが、それを理由に地上に長居する気は流石のブラッドにもなかった。

だがそれを少し惜しいとは思ふ。

「……地上へきて一週間経つ。いい加減俺も動かにやらんしな」

「ブラッド？」

「おい変人魔族、どうした？」

「よしクソガキはそこに直れ。……と、言いたいところだが、その前に昼だ。アバン、いつも通り任せた」



空高く輝く太陽を指差し、ブラッドは感傷を誤魔化すように頭を掻いた。

昼食はロモスで焼いたアバン特製の胡桃パンと、折角だからと海に向かったアバンが獲った新鮮な魚のスープであった。

ブラッドは初めての海の幸を興味津々に楽しみながら、ヒュンケルは態度にこそ出さないがさり気なくおかわりをするなどし、アバンはその様子に頬を緩めるのだった。

昼食を終え少し経つと、三人は他愛もない話をしながら再び街道を歩く。

その途中でブラッドは太陽の位置によって輝きを変える海に何度目も目を輝かせ、アバンはそれを楽しそうに聞き、ヒュンケルはそんな二人を仏頂面を保ちながらも横目で追っていた。

ポルトスの町に到着したのは夕暮れ時であった。

ポルトスの町はロモス北西の小さな町だ。当然城下町であるロモスほどの活気はない。

しかし人々が今を懸命に生きているという意味では、ロモスと全く変わらない熱気がそこにあつた。

町に入るとふう、と汗を拭う動作をし、アバンはにつこりと笑った。

「ベリーナイスタイミングで着きましたね！ 旅の疲れもありますし、今日はベッドでゆっくり休んでしまいましょう」

まるで疲れを見せない表情で言うアバンに、ヒュンケルは胡乱気な眼差しを向けた。「よく言いますよ、ちつとも疲れてないくせに」

「おや！ それでもありませんよ。見てくださいこのカール、いつもよりちよつと垂れてるでしょう？」

「分かりませんよそんなの！」

アバンの指差す左のカールを見るも、ヒュンケルには全く違いが分からなかった。

そもそも野宿の時ですら崩れない謎のカールなのだ。稀に水浴びをする時に崩すことはあつても、一瞬目を離せば普段通りの二重カールになっている程アバンはカールに情熱を懸けている。

今も全く同じだ。分かるはずがない。

そのままカールの違いを力説しそうであつたアバンに、ブラッドは苦々しい表情を浮かべて肩を叩いた。

「お前の身嗜みにかける情熱はともかく。宿を取らないといけないんじゃないか？」

「むむ、それもそうですね。宿屋は町の東側ですので、ちやつちやつと行つちやいましてう」

アバンの案内で宿はすんなりと見つかった。

ロモスの石造りの建物と違い、木造のこじんまりとした民宿だ。

中に入れば食堂と併設したカウンタ―に、人の良さそうな黒髪の男性が座っている。どうやら宿の主人のようであった。

「いらつしやいませ、三名様だね？ 12Gだよ」

「はい、こちらに。厨房は使えますか？」

「料理でもするのかい？ 忙しくないときにカミさんに言つてくれりやいいよ」

店主の言葉に頭を下げると、アバンは手慣れた動作で台帳に名前を記す。

三人部屋は二階ということで木製の階段を上り、宛がわれた部屋の鍵を開けた。

元は四人部屋なのだろう。四つのベッドが四隅に置かれており、中央には小さなテーブルがある。

ベッドはどれも洗濯が行き届いた清潔なシートに、よく日干しをした布団が載せられていた。

変わりませんね、とアバンは笑う。

「値段の割にはいい宿でしょう？ 昔のパーティーでもよく利用したもんです」

「昔のパーティー……地上の魔王を倒した奴らか。そういえばパーティーメンバーはどうしたんだ？」

ブラッドの知る限り、それらしき人物をアバンの周辺で見たことはない。

その問いに答えたのはアバンでなくヒュンケルであった。

「……魔王ハドラーを倒した後だったか、ひと月前はパプニカにいたよ。でもその一週間後くらいに、魔法使いのジジイの瞬間移動呪文（ルーラ）でそれぞれの家に帰ったつてよ」

「付け足すなら私のパーティーメンバーの二人は子持ちでしてね。娘が心配だから傷を癒したらすぐ帰るつて言つてきつきとおいてかれちやつた訳ですよね、私とヒュンケルは」

「あれは先生が断つたんでしようっ！ 大体先生はいつも……」

当時の心境を思い出したのか、怒り心頭でアバンに抗議するヒュンケル。

弟子を必死に宥めるアバンの姿を見ながら、ブラッドは更に問いを続けた。

「勇者に魔法使いか。他にどんな奴らがいたんだ？」

「そうですね。さつき言つた夫婦の戦士のロカ、僧侶のレイラ。一度だけの助っ人でしたが武術の神とまで言われる拳聖プロキーナ。そして魔法使いもとい、大魔道士マトリフの五人が私のパーティーでした」

「拳聖、大魔道士……人間にしちゃあたいそうな肩書が揃つたもんだ。その五人に地上の魔王はやられたつて訳ね」

「ハドラーは情けない魔王だからな」

いつにも増して不機嫌そうにヒュンケルは呟いた。

そんな弟子の様子に苦笑を浮かべ、折角だからとアバンは荷物から地図を取り出すと、テーブルの上に広げた。

「さて、地理の勉強です」

にこりと笑って二人を招くと、アバンは地図の左端……南西の大陸を示した。

「これが今、我々のいるラインリバー大陸です。その中心近く……ここが先日のロモス王国ですね」

「ほう、世界地図か」

「……ラインリバーから東の大陸がホルキア、でしたね」

地図をなぞりラインリバー大陸から南東の小さな大陸を示すヒュンケル。

正解です、とアバンは微笑みを浮かべた。

「私とヒュンケルはホルキア大陸から海を渡りこのラインリバー大陸にやってきました。上陸地点は大体魔の森の南でこのあたり。」

そしてブラッドに出会ったのが大陸の東側……山脈と魔の森の隣接地点ですね」

アバンはそう言ってロモス王国を示す王冠マークよりやや南東にある森を指差した。

そのまま指を北上させると、地図に描かれた山と森の境目を叩く。

「あ、因みに魔の森の中心にあるネイル村にロカとレイラが住んでいます。

娘さんはベリーベリーキュート、とロカが自慢してたことですし、ヒュンケル、会いに行きます?」

「断固拒否します。そんなことよりもっと修行がしたいです。先生、基礎修行だとか言つて森とか山とか歩かせるだけじゃないですか。

俺は早く剣を覚えたいんです」

実に嫌そうに顔を歪ませるヒュンケルであった。

そんな弟子の様子にアバンはチツチツチ、と指を振つた。

「ノンノン。基礎こそ上達への近道、ですよ! 今は身体をつくつてる真つ最中です。

ここをナメると後で痛い目見るのは自分ですよ」

「まあ道理だな。幼少期に無茶をして戦士として大成できなかった、とか魔界でも良くあることだし」

「ぐっ……!」

大人二人に冷静に諭され、ヒュンケルは悔しそうに唇を噛み締めた。

そのまま行き場のない感情を発散させるように、流れるようにブラッドの腹を殴り始める。

ブラッドは口元に笑みを浮かべながら額に青筋を浮かべた。

「このクソガキめ。何故俺を殴る?」

「お前ならどれだけ殴っても問題ないだろ」

無言の鉄拳がヒュンケルの頭に炸裂した。

これまた一週間で見慣れた光景に、アバンは苦笑を浮かべた。

そして睨み合いからの口喧嘩に入りそうな雰囲気醸し出されたその瞬間。どこからともなく腹の虫が鳴り響く。

「……お腹空きましたし、先にご飯にしましょうか」

あえて虫の名は言わずに、アバンは苦笑を浮かべた。

頬を赤く染めたまま仏頂面を浮かべているヒュンケルを伴い先に食堂へ向かう旨をブラッドに伝える。

罰が悪そうに頭を掻いていたブラッドはそれに快く頷いた。

「すぐに向かう。地上の食事は美味いからな、俺の分も頼むぞ」

「はいはい。早く来ないと私たちで食べちゃいますからねー」

「……お前の分なんかないんだからな」

にこにこ笑顔の師匠と悪態を吐く弟子を見送り、ブラッドはふう、と一息ついた。

この旅を続ける中で、初めて一人になれたからだ。

ブラッドは荷物から小指の爪ほどの大きさの紫水晶の欠けらと六芒星魔法陣を描い

た紙を取り出すと、紙の中心に紫水晶の欠けらを置いた。

ブラッドの血で書いたその魔法陣の上に乱暴に座り込むと、瞑想を始める。

六芒星は魔族の魔力を高める魔法陣だ。その上で魔法を使うことで、より増幅した魔法力で探査ができるのだ。

(何だかんだで放置していた地上にきた真の目的、冥竜王ヴェルザーの依頼を完遂するに相応しい大地を探さにやな)

テーブルの上に置かれたままの世界地図が浮き上がる。それはブラッドの目の前に飛んでくると、びたりと動きを止めた。

ブラッドは大陸名と地図に描かれた特徴を読み上げる。

「最北は不毛の大陸こと死の大地。その下が極寒の大地マルノーラ大陸。中央にあるのが地上最大の大きさ、ギルドメイン大陸。南西はラインリバー。南東はホルキア。後は小さな島々か」

随分と大陸が多いものだ、と呟くと、ブラッドは目的に合う大地を探すべく意識を集めた。

(——マルノーラは×。ギルドメインは△。ラインリバーは×。ホルキアは△。小島は殆ど×……特にデルムリン島は論外、穢れがなさすぎる)

地上は随分と穢れが少ないな、とブラッドは思った。



穢れとは瘴気だけでなく、人々の吐き出す負の感情全てを指す。

日常生活のちよつとした不満も含むのだ。穢れがない地域は流石に存在しなかったが、それでも瘴気溢れる魔界に比べれば白もいいところだ。特にロモス南端にあるデルムリン島など、穢れなき純白と言つてもいい。

ブラッドにとつて天界を思い出す非常に不愉快な地域であつた。

(まあいい。本命は死の大地だ)

世界の最北にあるという草一本も生えぬという不毛の大地、死の大地。いかにも、といった名前のそこはさぞかし呪術を行うのに相応しいだろうと思ひ、意識を集中する。

その瞬間、ぞわり、と背後に悪寒が走つた。

覚えのある魔力を探知したのだ。思わず声を吹き出しかけたブラッドの背中に冷や汗が流れた。

(大魔王の魔力だ?!)

ブラッドが狙つていた死の大地に、絶賛地上侵攻計画を進行中である大魔王バーンの魔力があつたのだ。

大魔王がそこにいるのは間違いない。であれば、その居城であるバーンパレスもまた近くにあるに違いない…というか死の大地に偽装していると考えられる。

ブラッドは大魔王バーンが苦手である。彼の魔力が燃え滾る熱を連想するのもある

が、比較的彼と年齢の近いため大魔王があの手この手で魔界を制覇しているのを見て  
るからだ。

大魔王ほどえげつない奴は魔族にいない。それがブラッドが大魔王バーンを苦手と  
する最大の理由だ。

そんな魔力の持ち主は現在は落ち着いているようだった。

どうやら探知魔法には気づかれていないようだ。

しかし何の拍子に気づかれるか分からない。

ブラッドは見なかった振りをして死の大地から意識を逸らすと、比較的穢れの多いギ  
ルドメイン大陸とホルキア大陸を中心に次点を探る。

(……及第点なのはホルキアか。だがギルドメインに変な反応があるな。それを確かめ  
てからにするか)

探査魔法を打ち切ると、紙を畳み宝石をしまう。

魔力切れで地面に落ちた地図をテーブルに戻すと、ブラッドは食堂へと向かうのだっ  
た。

旅の終わりは静かに、しかし確実に近づいていた。

## いい加減お仕事を始めましょう

そこは、岩と山しかない不毛の大地であった。

どこまでも枯れ果てた山脈が続く、見渡す限りの灰色の大地。しかし岩肌の硬質な大地が広がる中、場違いなほど優美な白が一つ存在した。

高く聳える山脈を一望できるその場所にあったのは、まるで荘厳な城のテラスのようだった。

そんな空に最も近いその場所では、二人の男が盤面を見つめていた。

枯れ木のような細い指が黒の城兵をもつてして白の僧正を捉える。

盤上から除かれる僧正の駒を見つめて、僧正を捕えた男はゆるりと目を細めた。

「どうやら珍しい客が出歩いていいるな」

左右から伸びる、天を向く角。

腰ほどまで伸ばされた銀髪は良く手入れが行き届いているのか、枝毛一つ見えない。

身に付ける装備はどれを取っても至高の逸品。

そしてそれを纏う身体は神々が丹精込めて創り上げた騎士にも劣らない、見事な覇気を放っている。

惜しむらくは年老いていることか。

しかし叡智を湛えた3つの瞳は揺るがない。そんな身体を持つ男には、年による衰えを全く感じさせない威風があつた。

手番が回り、騎士を動かす道化風の男が尋ねた。

「ウフフ、珍しいですね大魔王様。貴方様が他者を客と呼ぶなど、何百年ぶりでしょう？」

「ふふ、茶化すでない死神。余として価値を認めれば客と呼ぶ。珍しいのはそなたの主と同様、余にとって価値を認められる存在が滅多に存在しなかつただけのことよ」

大魔王。

「そう呼ばれた男は上品に蓄えられた髭をするりと撫でると、無造作に兵士を動かした。」

それは敵陣に乗り込んできた騎士を誘い込む陣形だ。

道化風の男はそれに気づいたのか自陣の王を守っていた白の城兵を動かすも、一手遅かった。

兵士に隠れた女王の駒が、もう一体の白の城兵を捉え一気に王に迫る。

あちら、と気の抜けた声が道化風の男の仮面の奥から響いた。

王手（チェック）だ。

男の見る限り、王はどう足掻こうが女王に倒されるだろう。

「もう、戯れにも程がありますよバーン様。冥竜王様の代わりにチェスの相手なんて、魔界一の指し手には叶いませんって」

「戯れだ、とくと許せ。天界などに封印されるそなたの主が悪いのだ」

おかげでチェスを打つ相手がいなくなってしまった。そう言つて大魔王——名をバーンという——は白の王を指で弾いた。

キルバーンと呼ばれた道化風の男は、笑みを象つた仮面はそのままに肩を竦めた。

「やれやれ、バーン様も全くもつて容赦ない。冥竜王様もあれで万策尽きるまで動いたのですよ?」

「……その結果が自領の消滅では元も子もなかりうに。まあ相手が悪かったのだ。

天界の援護（バックアップ）を十分に受けた竜の騎士相手では、余とて梃子摺ることになろう。尤も負けることは有り得ぬがな……」

「……………」

大魔王はそういうと、背後に控えた男を見た。

それは全身を包み隠すような真っ白な法衣を身につけた男だ。顔すらもフードにすっぽりと覆われており、一見して掴みどころがない姿をしている。

服に関して最も目の引くのは、様々な魔石を連ねた上に中央に三つの宝珠の埋め込ま

れた首飾りだろう。

しかしその男の最も目の引く部分はそれではない。

法衣から垣間見える底の見えない闇こそ、その男の特徴を最も主張しているのであった。

そんな深い谷底を覗き込んだような暗黒を顔にする男は、まるでよくできた執事のようになにの側に控えていた。

「ウフフ、今のボクはバーン様の部下ですから冥竜王様のお話はそれまでに……。」

それで結局、お客人とはあの方でよろしいのですか？」

「その通りだ。お前達もよく知っていよう。余とヴェルザーに次ぐ実力の持ち主……。」

バーンの3つの瞳が大地を見下ろす。どこか故郷、魔界を思い出す不毛の大地に思いを馳せ、大魔王はゆっくりと口元を釣り上げた。

『『歩く大災害』が地上に訪れた、か。余の邪魔になることは決してしないだろうが……不安要素は解消しておくに限る』」

それは夕食を終えた直後のことだった。

宿の女将の料理を満喫し部屋に戻るその瞬間、ブラッドは馴染み深い魔力の波動を感じ

じ取った。

それは魔界にいるはずの親衛隊長のものだ。

思わずびくりと身を震わせるブラッド。だからと頬に額に冷や汗が滴り落ちる。

あまりに青ざめた顔色を見せるブラッドに、心配そうな表情を浮かべたアバンが尋ねた。

「……どうかしましたか？」

「……弟の魔力の気配がする。通信呪文が来ているな」

「弟なんていたのか」

珍しく純粋な驚きを浮かべるヒュンケル。

しかしそんな彼の姿を見ても、ブラッドは扉の前で顔色を青ざめたまま動かない。否、動けずにいた。

（怒ってる。この魔力の波動は確実に怒っている……！）

もしも魔力の波動が目に見えるものであれば、それはどす黒い暗雲の形をしていただろう。

それほどまでに部屋の中から感じられる魔力は怒りの感情に満ち溢れていた。

動けないブラッドを見かねてか、アバンはヒュンケルに何やら耳打ちする。

そしてヒュンケルがそれに頷くと徐に扉を開放した。

その瞬間。蛇に睨まれた蛙のようにブラッドは竦みあがった。

「おいやめろ！ 扉が開いたら魔力に籠った怒りの感情がダイレクトにくるだろう!!」  
「普段から俺をクソガキ呼ばわりするんだ、お・と・な、なんだろう？ 現実を見る」

これ以上ないほどこい笑みを浮かべ、ヒュンケルが部屋に走る。  
それを止める間もなくアバンはブラッドの背を押した。

「ここで立ち止まってるのも他の客の迷惑です。さ、入りましょう」

全くの正論に何も言えず、ブラッドは意を決して部屋の中に踏み入った。

……なぜだろうか。地上の、人間の世界のごく普通の宿屋のはずであるが、この部屋  
のただけジオン大陸にいる時と全く同じ瘴気が溢れているような錯覚をブラッドは受  
けた。

入り口で無言で立ち止まっていたブラッドの目の前に、見覚えのある袋が差し出され  
た。

視線を下げると得意げなヒュンケルの表情が目に入った。

「ほら、荷物」

したり顔を浮かべるヒュンケル。その手から荷物を受け取り、ごくりと唾を飲み込  
む。

数分の沈黙の後、ブラッドは腹を括ったようであった。



無言で荷物袋から手鏡を取り出すと、取っ手に付けられた水晶を弾くように触れる。それに反応したのか、水晶はきらりと輝いた。

『アーテステス。聞こえてますか？ クソ兄貴。聞こえていたら返事を下さい』

およそ一週間ぶりに聞く親衛隊長の声が水晶から響いた。魔法で合成されているはずの声には、地響きのような重厚な威圧感が滲み出ていた。

ブラッドはそつと鏡から目を逸らし、無言のままアバンを見つめた。助けろ、と唇だけで伝える。

そんなブラッドに対しアバンは沈痛な面持ちでゆっくりと首を横に振った。

——諦めてください。

そんな声なき声が聞こえ、ブラッドは全てを諦めたような虚ろな表情を浮かべると鏡に向き直った。

「……………ああ、聞こえているぞ弟よ。何も問題はない」

『良かった、沈黙が長いようなので心配しましたよ。我が兄であり王である貴方が弟であり腹心中の腹心でありいくら冥竜王の依頼があったとはいえずべてを丸投げにするほど信頼高い私の通信を無視するなど、そんなありえないことするわけですね』

ノンブレス・ノンストップで吐き出される毒に、ブラッドはそつと鏡から目を逸らす。

先ほどまでの行動を鑑みれば何も言えるはずがなかった。

その様子が目に浮かんだのか、水晶の先から非常に深いため息が聞こえた。もしも鏡が互いの様子を映していたのなら米神を抑える親衛隊長の姿が見えたことだろう。

重い沈黙が下りる。

数瞬か、数分か。先に口を開いたのは親衛隊長であった。

『あの後大変だったんですよ！ 貴方が割った鏡の修復とか、積み重なる戦闘報告とか、王都の運営とか、本気で引きこもった外交官の説得とか！ 特に外交官どうしろと！』

実家に帰った後泥のように眠ったきり目覚めてこないって奴の同僚が泣きついてきたんですけど!?!』

「本当に引きこもったのかあいつ!」

……外交官については休ませてやってくれとしかいいようがない。奴も辛かったんだ……。

その他については反省している。丸投げしてすまなかった」

怒涛の報告事項にブラッドは親衛隊長の一週間の苦勞を悟った。

親衛隊長は外交官のように一月不眠不休で王都と他の大陸を往復して働いていた訳ではないが、本来の仕事と影武者両方をこなすのは至難であったのだろう。

いかに強靱な魔族の身体といえど限度があるのだ。

一方で外交官についてブラッドから勞いの言葉を聞いた親衛隊長は暫し沈黙した。

しかし呪怨王が飛び出す寸前のおかしな様子を思い出したのか、数秒の沈黙の後『一月の休暇の許可を出します』と報告した。

少しだけ落ち着いたのだろう。平坦な声になった親衛隊長の様子に安堵の息を吐くと、ブラッドは魔界の近況を尋ねた。

『魔界の近況ですか？ ジオン以外ですと平和なものですよ。』

三日前に活火山の噴火はありましたが、外の弱小魔族が飲まれただけでこちらに何の問題もありません』

「平和なのかそれ」

ヒュンケルの静かな突っ込みにブラッドはごく普通に頷いた。

至って平常の魔界である。

「何の問題もないな。弱者が淘汰され強者が生き残る、いつも通りの魔界だ。そもそもマグマに飲まれた程度で死ぬ魔族はいない」

「修羅だ。修羅の国だ。マグマに飲まれたら普通死ぬだろう!？」

「強酸と超高熱程度魔力や闘気で何とかして当然だろう?」

至極当然とばかりに言い切るブラッドに、ヒュンケルは頭を抱えた。

彼は知らない。将来自分も似たような状況に陥ることを。

そして重傷を負ったものの普通に生還してしまうことを。今の彼は知らなかった。

話に聞いた魔界の余りの修羅場ぶりにアバンは引きつった笑みを浮かべた。

「マグマと不毛の大地ですものねえ……自衛出来て当然ということですか」

「地上が恵まれているんだ。」

……他に何か変わりはあったか？」

『大有りですとも。一部親衛隊員に不在がばれたのもそうですが……三馬鹿がジオンから脱走しました。ご愁傷様ですクソ兄貴』

「――」

最後の報告を聞き、まるで石化したようにブラッドの動きが止まった。

報告された事柄を反芻し、頭痛を堪えるように眉間を解す。報告された大問題にブラッドは深いため息を吐いた。

(……親衛隊にばれたのはこの際いいか。三馬鹿の脱走とか、嫌な予感しかしない)

三馬鹿魔族はどう考えても呪怨王を探し回って魔界を暴走しているだろう。

結果がある今、西区画以外のどこから脱走したのか尋問含め、早急に捕獲しなければならぬ。

親衛隊にばれたのも頭が痛いことだった。

説教を短くするためにもこれは早急に冥竜王の依頼を終わらせて魔界に帰らなければならぬ、とブラッドは決断した。

……そして諸々の責務を押しつけてしまった親衛隊長に休みを与えなければならぬ。  
い。

魔法で合成されているはずの親衛隊長の声には、隠し切れない疲労感が滲んでいたのだ。

「今日から一週間以内に三馬鹿連れて帰る。それまで残りの親衛隊への口止めを頼む」

『どう考えても手遅れな気がしますが、了解しました』

「頼んだ親衛隊長。お前が頼りだ」

『はいはい……そういえばクソ兄貴、何か声がしますが誰か一緒にいるんですか？』

「ああ、地上の勇者とその弟子で中々面白い連中と……」

そこまで口を滑らせ、ブラッドははつと口を塞いだ。一瞬の後激しい後悔が襲いかかる。

思わずアバンやヒュンケルに視線を向けるも、二人はぶんぶんと首を横に振っていた。その顔には「巻き込むな」という言葉が強く浮き上がっている。

一方で水晶の向こうは沈黙していた。

猛烈に嫌な予感を感じ、ブラッドは極限まで声を抑えて呟いた。「怒っているか？」と。

その直後、猛烈な怒りの魔力が水晶から放たれた。

『馬鹿じゃねーのっ?! 怒ってないわけないだろ、なんつって人間なんかと、しかも勇者と一緒にいるんだよ意味分かんねーよ!』

「いやもうそれは尤もなんだが! 落ち着け敬語とれてる! 一応まだ公的だよな!」  
『馬鹿じゃないですか怒らないわけがないでしょう以下略!』

……前言撤回します。親衛隊全員に不在を通達するので、戻ったら覚悟しておいてくださいクソ兄貴』

それきり通信呪文が途切れたのか、声は聞こえなくなつた。

弟がこわい。

そう呟いてブラッドはテーブルに頭を突つ伏した。

通信呪文の媒体であつた水晶は既に輝きを失い沈黙している。

しかしそれが取り付けられている手鏡には怨念すら漂う血文字が浮かんでいた。

『一週間以内に帰らなければ百年外出禁止』

魔界の文字で書かれたそれを読み取り、アバンは困つたような表情を浮かべた。

「弟さんもこう言ってますし、ブラッドってば魔界のお偉いさんでしょう? 帰つた方がいいのではないですか?」

「何故分かった!？」

「いや当然でしょう。報告がどーたらもそうですけど、あれだけ態度に出ていればねえ」  
そう言つてブラッドに出会つた時のことやロモス王国でのやり取りを挙げるアバン。

論理的な説明に全く反論できず、ブラッドは深いため息を吐いた。

「一応俺はお前から言う魔王以上の立場なんだがなあ……親衛隊長からの扱いがぞんざいすぎて泣けてくる」

「今のお前、正直言つてハドラーより情けない魔王だぞブラッド。」

家出ならさつさと帰つたらどうだ？」

茶化すように鼻で笑うヒュンケル。

ブラッドは視線を上げると眉根を寄せて彼を睨みつけた。「帰れるものならすぐに帰る」と呟く声に力はない。

「そも家出じゃない。あー外交官の気持ちがあんなに分かる……仕事したくねえなマジで……」

そのまま再び机に伏せるブラッド。

大雑把で破天荒な魔族の青年の初めて見る姿に、ヒュンケルはぎよつと目を見開いた。

ふとロモスで尋ねかけたことを思い出す。

今なら答えてくれるだろうか、という僅かな期待を込めてヒュンケルはブラッドに尋ねた。

「お前結局何しに地上に来たんだ？」

「んー……一言で言えば昔なじみの尻拭いだ。あのうっかり竜、態度も凶体もでかいせにうっかり者なせいでドジを踏んでな。その救援依頼さえなければ俺は地上に来るつもりはなかったんだ」

ブラッドの脳裏に初めて地上に来た時の感動が蘇る。

魔界とは全く違う暖かな日差し。植物たちの緑の息吹。海の、硬質でない美しい輝き。

どれも魔界に居たままでは見ることが叶わないものだ。

親衛隊長に怒られはしたが、地上に来たことは後悔していない。

一週間という短い間であったが、魔界と全く違う豊かな大地を踏みしめたのは本当に楽しかったのだ。

……人間（アバン）達との旅を含め、本当に久しぶりに味わう新鮮な出来事だったのだ。

突っ伏したままであったブラッドはテーブルから顔を上げた。

個人（ブラッド）としての旅はもう終わり。



呪怨王は呪怨王として動く時間が来たのだ。未練はあろうともそれは変わらない。

そんな複雑な感情を乗せた赤い目が、アバンをまつすぐ見つめた。

「地上観光はここまでだ。これから俺は、俺の役割を果たしに行く」

「……やはり、そうなりますか」

アバンは残念そうに眉根を下げた。

薄々感づいていたのだろう。理知的な光を宿す目が一度伏せられる。

次の瞬間。その目に宿る光は変わっていた。

理知的な光は覚悟を湛えた戦士の眼に、均整のとれた身体からは内なる闘志が溢れ出る。

『勇者』としての力を少し出したアバンを、ブラッドは静かに見つめた。

「私がかつて、勇者と呼ばれ魔王と戦い平和を掴みました。」

魔界の王よ。貴方の果たす役割は、その平和を脅かすものではありませんか？」

発せられた声は常の穏やかなものだ。

しかしその問いの裏に隠された戦士としての覚悟を感じ取り、ブラッドはそつと目を伏せた。

その問いに返す答えは決まっている。

「答えは是。俺が動けば地上の一部は瘴気に侵され、不毛の大地と化すだろう」

「……そうですか」

アバンは残念そうに顔を歪めた。

それが決定打であった。

平凡な宿屋の空気が安穩とした日常から戦場に切り替わる。

それを齎したアバンの姿には勇者としての鋭い覚悟の闘志が宿っていた。

戦士としての教育を施されているヒュンケルは直ぐに理解した。これが勇者アバンとしての師の姿だと。

愚直なまでに真つ直ぐで清澄な闘気を放つ勇者の姿なのだ。

テールを挟んで静かに目と目を合わせたままの勇者と魔王の姿に一步も動けないまま、ヒュンケルは必死の思いで息をのんだ。

どれほどの沈黙が続いたのだろうか。

先に口を開いたのはアバンであった。

「正直なところ、私は貴方と戦いたくありません。その役割を果たさず、魔界に帰ることはできませんか？」

「なっ」

アバンの言葉に目を見開いたのはヒュンケルであった。

何か言葉を紡ごうとしているのか、唇が震えている。しかし言葉は出ない。

だが怒りとも安堵とも言える複雑な感情が幼い眼差しに浮かんでいた。

ヒュンケルは動揺に震えたままアバンとブラッドは交互に見詰めた。

「……そんな表情するなよヒュンケル。いつものクソガキ面はどうした」

「だって。そんな、先生、だって！」

「あははは、支離滅裂だぞ。何がお前を刺激したのかはわからんが……まあ、最後にそういう表情を見ただけよしとするか」

「最後って！ お前、本当にいなくなるのか!?!」

ヒュンケルの叫びにブラッドは答えなかった。

ただ一週間の間良く行ったように、皮の手袋を身に着けた手でぐりぐりとヒュンケルの銀髪をなでつけた。

それだけの動作が彼の真意をヒュンケルに伝えていた。

常であれば即刻その手を振り払っただろう。しかしヒュンケルは今日だけはそれを受け入れた。

ふとヒュンケルの脳裏にロモス王国での出来事が過ぎる。

ブラッドに振り回され、色々な店を回ったこと。

怪しい露店で綺麗な紫水晶をもらったこと。

一緒にロモス名物のロモス芋を食べたこと。

振り回されて迷惑だったそれらの出来事が、ヒュンケルには何故か遠い過去のよう  
思えた。

それがどこことなくアバンと出会う前の温かい思い出と重なってしまった。……だか  
ら涙などが溢れるのだ、とヒュンケルは思った。

大きな手が小さな頭から離れる。

ブラッドは涙を流すその姿に何とも言えない表情を浮かべると、ヒュンケルはバツと  
顔を背けた。

それを見届け……ブラッドは一連のやり取りを静かに、穏やかに見つめていた勇者に  
向き直る。

「そろそろ勇者の問いに答えさせてもらおう」

部屋の緊張感が高まった。

アバンはあくまで自然体のまま、ヒュンケルは感情に震えながらブラッドを見た。  
真摯な感情を伝えるアバンと、複雑な感情を訴えるヒュンケル。

そんな対照的な二人をじっと見つめる。

数秒の沈黙の後、ブラッドは言葉を紡いだ。

「依頼を放り投げることはできない。あんなうっかり童でも俺の恩人だ。

恩には恩を返す。それが俺の流儀だ」

それは、  
決別の言葉であつた。

# やっぱり胃痛は続きます

「あと一応言つとくが、その程度の力量で俺に脅しをかけるとか無謀もいいところだぞアバン」

そもここで戦う気などないだろう？ そう言つてブラッドは肩を竦めてみせた。

アバンが勇者としてのの力を見せたにもかかわらず、その姿はどこまでも余裕を見せたままだ。お前はここで戦闘などしないだろう？という無言の信頼が確かにそこにあった。

一方でブラッドの言葉にアバンは驚いたように目を瞬かせた。

困つたように頭に手を当てる姿は、まるで悪戯がばれた子どものように見える。

闘気を収めたアバンは肩を竦めた。

「……これは参りました、私の闘気では踏み止まらせることすらできませんか」

「当たり前だろう？ お前は人間にしては強いが、この俺はもつと強い。それだけの話だ」

常と全く同じ楽観的な色を帯びた言葉に、だからこそアバンはブラッドと己の差を理解した。

初めに言っておこう。

勇者アバンの力量は決して低くない。寧ろ相手が並みの魔族なら凌駕するほど高い。それこそ地上において魔王と冠される存在に対抗できるほどのものだ。

そして魔族は力を重視する傾向があることを、魔王ハドラーと戦い一度は部下に誘われたアバンは十分に知っていた。

だからこそアバンは自身の力を見せつけることで、ブラッドが魔界に帰るよう説得するつもりであつたのだ。

(少し見誤っていたようです、彼の実力を)

内心冷や汗を流しながらアバンはそう呟いた。アバンとて歴戦の戦士だ。相手の力量を読む程度訳もない。

ブラッドが並みの魔族、それこそ魔王ハドラーと同等以上の実力を持つことは感じ取っていた。

だが今なら理解できる。この相手はその程度ではないと。

その証拠に、ブラッドは本気で今のアバンに何の脅威も感じていない。ここでアバンが本気で戦う気がないことを看破していても尚余る、自身の力量への絶対的な自負がある。

だが止めなければならない。アバンとて掴みとつた平和を守るためなら命を投げ出

す覚悟がある。

だが、とアバンは横目で愛弟子を見つめた。

託された彼を育てる為には、どうしても命を投げ出すわけにはいかなかった。

そんな苦悩する彼の様子を読み取り、ブラッドは得意げな笑みを浮かべた。

「一つ勘違いしているぞアバン・デ・ジニユール三世。俺は恩には恩で返すと言っただろう」

「……言いましたね。でもその為に地上を脅かすのでしよう？」

「だからそこが勘違いなんだ阿呆勇者。俺はお前にも恩を感じているんだぞ」

その言葉にアバンは思わず目を瞬かせた。顔を背けていたヒュンケルも同様だ。

何を言っているのか理解していない勇者とその弟子の様子に、ブラッドは呆れたように眉間に皺を寄せた。

「地上観光だよ阿呆。まさか本気で理解していないのか？」

「……ホワーツツ？ マジですか」

「マジと書いて本気だ。それがあるから地上を侵すやり方はやめてやる」

ブラッドは本気だった。

周りに影響を出さない呪術は手間がかかるができないことではない。万一影響が出ても天界に全てを押し付けなければならないのだ。



呪怨王の名は伊達ではないのだ。

確かに地上にきた当初なら美しい自然などお構いなしに呪術を発動させただろうが、今はアバンとヒュンケルと共に旅をした良い思い出がある。

……更に言うなら、影響を出して大魔王に見つかるのが嫌だったのもあったりするがそれは置いておこう。

誰だつて無駄な胃痛は欲しくないのだ。

曲がりなりにも一週間共に旅をしたアバンは、ブラッドの言葉が本気であることは直ぐに理解できた。

「……。そうですね、貴方はそういう人でしたね。ほんとーに、変わり者ですねブラッドつてば」

「お前にだけは言われたくない。……ほら、話は纏まったんだから解除頼む」

そう言ってブラッドは人間のようになくなっていく耳を指差した。

それを見てアバンは少しだけ目を細めると、一つ指を鳴らす。掛けたままであった変身呪文（モシヤス）を解除したのだ。

途端に現れたブラッドの魔族本来の大きな耳を見つめて、アバンは寂しそうに呟いた。

「うーん、やっぱり勿体無い気がしますね」

「そうか？ 俺はやはり魔族の姿の方が落ち着く。今の姿は気に入っているんだ」

「おや、知りませんでした。ブラッドってばナルシストだったんですか？」

「違うわ阿呆勇者」

軽口を叩き合っている間にブラッドは荷物を纏め終えたようだった。

と言つても元々出していたのは通信用の手鏡ひとつ。装備は常に纏ったままであったから片づけも何も無い。

旅準備を万全に整えたその姿を確認し、ブラッドは一つ頷いた。

「別れを告げた手前、ここに居るのはおかしいからな。俺はもう行く」

「そうですか。これからどこへ？」

「さて、どこだろうな。気になるのはギルドメイン大陸とホルキア大陸だが、何しろ時間がない」

これは本当のことであった。

親衛隊長に申告したのは一週間。これまでの旅と同程度の時間で二つの大陸を回り、三馬鹿魔族を回収するのは流石の呪怨王でも骨が折れる。

本来なら今こうしてアバンと話す時間すらも惜しいのだが、ブラッドは不思議とそうは思わなかった。

どうやら自分が思った以上に勇者アバンを気に入っていたようだ。

瞬間移動呪文（ルーラ）を使うため窓を開け、ブラッドはもう一度勇者とその弟子を見た。

「お前達との旅は楽しかった。礼を言う」

柔らかな笑みと共に贈られた言葉にアバンとヒュンケルは目を見開いた。慌てて窓を見るも既に瞬間移動呪文を使った後で、光の軌跡しかそこにはなかった。

途端に広くなってしまった部屋を見渡してアバンは眼鏡の位置を直した。

「……礼を言うのはこちらでしように。ありがとう、ブラッド」

そんな師の姿をヒュンケルはじつと見つめていた。

いつにも増して眉間に皺が寄った顔には複雑な感情を浮かべている。

この弟子と出会ってから初めて見せるその表情に、アバンは柔らかな笑みを浮かべて視線を合わせた。

「ヒュンケル。言いたいことがあったら言ってもいいんですよ？」

「……」

師の言葉に一瞬喉を震わせ、ヒュンケルは絞り出すような声で呟いた。

「おかしいんです、先生。俺は何で涙なんか流れたんだろう？ まだ目が熱くてたまらないんです」

そう言って真っ赤に腫れた目を乱雑に拭うヒュンケル。

そんな彼にアバンはそつとハンカチを差し出した。

「ヒュンケル。それはきつと、寂しさからの涙です」

「寂しさ……？」

「ブラッドという魔族と旅をすることで、貴方はどこことなく、地底魔城にいた懐かしさを覚えていたのでしょうか。」

「思えば私から見ても貴方はブラッドに積極的に話しかけていた。それは自分でも気づいていませんか？」

アバンの言葉に思い当たる節があったヒュンケルは渋々頷いた。

「……確かに、話しやすかったです。あとストレス発散できました」

「すぐ手が出るのはよくありませんよ。まあそれはさておき。」

「……その感情は誰でも持ち得るものです。涙も恥ずべきことではありません。」

別れにそれはつきものです」

そう言つてアバンはにっこりと笑顔を浮かべた。

「そういう時は、思いつきり泣いて恨み言を叩きつけちゃいましょう！

出会いと別れは表裏一体。そしてこの別れはブラッドが決めたものです。ヒュンケルには何の責任もありません」

その言葉は何故かヒュンケルの胸に素直に落ちた。

だから泣いて良いのですよ、と言われた気がしたのだ。

沈黙したまま師弟の視線が交差する。アバンはハンカチを差し出したまま笑みを浮かべ続けていた。

ヒュンケルはその笑顔が嫌いだ。

……嫌いだ、今日だけは素直に見つめることにした。

差し出されたハンカチを受け取ると、ヒュンケルは乱雑に目元を拭いた。

「お人よしめ。魔族に礼を言う人間など奴くらいだろうな」

夜の海を見つめ、ブラッドは小さく呟いた。アバンの言葉はしっかりとブラッドの耳に届いていたのだ。

ポルトスの町に来る手前、丁度昼食を食べた海岸にブラッドはいた。

赤い目がじつと海を見つめる。

太陽の強い輝きとは反対に月明かりが柔らかく照らす海は、全てを受け入れるような深い色を見せていた。

海は広いな、と呟く声は小さかった。

今はただ海の度量の広さが心底羨ましく、また、妬ましかった。

「……」

先のアバンとのやり取りを思い返す。

地上観光の礼としてやり方を変える。その言葉に偽りは無い。

だがやり方を変えようと思ったのはそれだけが理由ではなかった。

呪怨王と恐れられた彼に、力量差を理解しながらも闘志を向けてきたのはアバンが初めてではない。

だが魔族の扱う恨みや憎しみなど負の感情が溢れ出る暗黒闘気とは全く違う、澄み切った真っ直ぐな意思。光の闘気とでも言うべきものを向けられたのは初めてのことだった。

だから思ったのだ。

この男を殺すのはあまりに惜しい。と。

「……生きろよアバン、ヒュンケル」

呪怨王としてそれを願うのはどうかと思うが、気に入ってしまったのだから仕方ないとブラッドは思う。

尤も大魔王の計画がある以上、二人が生き残れる可能性などほぼ皆無に等しい。

だがもし生き残れたならば、もう一度旅をしたいな、とブラッドは思った。

ふと海の爽やかな空気に瘴気が交じる。

それは覚えのあるものであった。

「おい、居るんだろう影（ミスト）」

確信をもつて自身の背後に声をかけると、明確に空気が張りつめた。

虚空に暗黒の渦が出現する。

その中から現れたのは白い衣の男——ミストバーンだ。

素顔を見せない暗黒から二つの眼が威嚇するように輝いた。

「……………」

「相変わらず無口だなお前。だが……分かりやすい眼光で何より」

自然体のまま軽口を叩くブラッドであったが内心はそうでもなかった。

大魔王の魔力を発見した時点でこちらも見つかる予感はしていたが、あまりにも場所の特定が早すぎたのだ。

あと数分、アバン達の元から立ち去るのが遅れていたらポルトスの町は戦場になっていただろう。間に合ったことに小さく安堵の息を漏らす。

そんなブラッドの内心を知ってか知らずか、ミストバーンは静かに浜辺に佇んでいた。

数百年前見た時から全く変わらないその在り様にブラッドは目を細めた。

「変わらないな。ここに来たのは大魔王の意思か」

言葉を喋ることはなかったが、ブラッドの言葉に答えるようにミストバーンから黒い闘気が溢れだす。魔族の使う闘気……暗黒闘気だ。

ブラッドが何をしてもすぐに対応できるようにしたのだろう。

しかし警戒心を露わにするミストバーンとは反対に、ブラッドは全く動きを見せなかった。

「なあミスト。この地上は美しいな」

「……？」

「不思議そうだな。俺がこんなことを言うのはおかしいか？」

ブラッドの言葉にミストバーンは静かに頷いた。

そんな彼から視線を外し、ブラッドは空高く昇る月に手を伸ばす。

「俺は知らなかった。月の照らす海は美しいことを。太陽の眩しさと温かさを。大地の実りを、自然の息吹を。数千年もあつて地上に興味がなかったのを、今思えば勿体ないとすら思う」

「……！」

「勘違いするなよ、別に大魔王の邪魔をしようというわけではない。ただ惜しんでいるだけだ、これが失われる未来を」

その言葉は酷く落ち着いたものであった。



だがそれはミストバーンにとって看過できないものであった。

地上が失われる未来。それは偉大なる主である大魔王バーンの悲願であり、決して邪魔されてはならぬものだ。

だが今呪怨王はそれを「惜しい」と言った。

それは大魔王の計画を邪魔する可能性があるのではないか——？

そう考えたミストバーンの殺気が高まる。それと同時に白い衣の袖口から鋭利な爪が露わになった。

明確に向けられる疑念と敵意に、ブラッドは小さくため息を吐いた。

「……邪魔はしないと云っただろう。忠犬も行き過ぎると主を困らせるぞ」

「!!」

「まあ落ち着け。波の音でも聞いて心を鎮めるといい」

そう云って視線を外すブラッドの姿に、ミストバーンは抗議を込めて静かな怒りを乗せた爪を構えた。

だがそれが分かっているにも関わらずブラッドはまるで興味がないように目を閉じて耳を澄ませている。

潮騒の音が静まり返った海岸に響き渡る。

数分か数秒か。

呪怨王は無防備なその姿をさらし続けた。すぐ傍に敵意があるにも関わらず、無警戒を貫くその姿にミストバーンは訝しむ。

……何故そのような姿を晒しつづける？ 自分は警戒に値しないとしても？

そう思えば先の怒りも相まって鋼鉄の爪が刃のように伸びあがる。小波が二人の足元を濡らした次の瞬間。

ミストバーンは超高速で爪牙を振るつた。

「相も変わらぬ短気だな影（ミスト）。千年以上前だったか？ 俺がバーンの配下を蹴つた時も無礼と言って同じことをしたな。懐かしい」

「……」

突然の襲撃にしかし、ブラッドは全く表情を変えなかった。

ミストバーンの鋭い一撃は確かにブラッドの首筋を切り裂いている。だが切り落とすまでにはいつていない。

月明かりが反射する爪牙は確かにブラッドの首の半ばまで食い込んでいたが、切り落とせなかったのはなぜか。

その答えはブラッドの血にあった。

「オラ早く抜け。喋りづらくて仕方ないっての」

噴水のように溢れ出す真っ黒な血液によって、ミストバーンの鋭い爪牙は一気に腐食

していたのだ。

一瞬前まで月明かりに輝いていたそれは見る影もなく真っ黒に染まっており、今にも崩れ落ちそうである。

首の半ばまで食い込んだはずのそれを、ブラッドはつまらなさそうに見つめて呟いた。

「ご自慢の爪が真っ黒だな。自業自得だが」

「……失念していた。魔族の姿をしていようと、相も変わらず暗黒闘気を超える瘴気の血液だな」

「お、喋った。うっかり者め」

「ー」

ミストバーンは慌てて爪を引き抜くと、止む無く腐食部分ごと手を切り離す。再生能力のある魔族としては当然の判断であった。

衣の奥に隠された眼差しがギリリと怒りに輝く。

意図せずして言葉を漏らしてしまったことも加え、ミストバーンの白い衣は怒りに震えていた。

ブラッドは回復呪文（ペホマ）を使ってさっさと首の傷を治すと、鬱陶しげな眼差しをミストバーンに向けた。

「全く嘆かわしいことだ。俺は積極的に争う気などないというに、どいつもこいつも喧嘩を売りやがって。胃が痛い」

『……そう言つてやるな。そやつは余の命令を忠実に守つただけのことだ』

低く、落ち着いた声が海岸に響き渡つた。

その声の主をブラッドは知つていた。否、魔界でその正体を知らないものはいなかつた。

銀の髪が月明かりに浮かび上がる。

月の光を背に、大魔王バーンの映像が映し出されていた。

「……久しいな大魔王。相変わらずけつたいな術で寿命を保っているようだ」

『久しいな呪怨王。ふふ、ヴェルザーや貴様のような不死身性は流石の余にもないものでな。老いのない生が羨ましい限りだ』

「それはどうも。で？ 右腕を寄越してまで何の用だ？」

呪怨王の問いに大魔王はにやりと口元を歪めた。

『何、数千年もの間沈黙を保つていた貴殿が今になつて地上に来た理由が知りたくてな。しかもハドラーを倒した勇者と共にいたとか……どのような風の吹き回しだ？』

「偶然の出会いに決まつてるだろ。俺自身はあの時から変わらさず計画の邪魔をする気はないよ」

『……変わらぬな。賭け事の時もそのようなことを言っただけだ。まだ続けるか』  
数百年前のことだ。

大魔王と冥竜王、そして呪怨王は一つの賭け事をした。

互いに各々の戦略を進め、成功したものに従うという賭けを。

当時魔界を二分していた大魔王と冥竜王は敵対しており、呪怨王はまだ別の名で呼ばれていたジオン大陸に反戦派の魔族を集め始めたばかりのことだった。今思い返しても不思議だ、とブラッドは思う。

あの時大魔王は地上を消滅させることで太陽を手にする、冥竜王は地上ごと全てを手に入れる、と宣言した。

そして呪怨王は――。

「地上になど興味はない。俺は俺の民を守るから好きにしろ。……違えたつもりはないが、今思い返せば笑止ものだな」

罰が悪そうにブラッドは頭を押さえた。ここ一週間の出来事を振り返れば何も言えない。

しかしそんな呪怨王に対して大魔王は愉しげに声をかけた。

『いいや？ 貴様は何も変わっておらぬよ』

「ふん、よく言う。今の俺は少なくとも地上を消すのは惜しいと思っただけだよ」

『だが惜しんでいるだけで余の邪魔をする気はない』

その言葉に呪怨王は赤い目を伏せ沈黙した。

だが何よりも雄弁に語るその姿に、大魔王は堪らず笑い声を上げた。

『クツクツクツク……慣れぬことはせぬ方が良いで。今の貴様は姿もそうだが精神性も若い。否、幼いというべきか？』

その状態では老成した余と言葉遊びをする余裕もないだろう』

「……誰のせいでそうなったと。千年前、お前に受けたダメージのせいで身体を作り直す羽目になった怨みは忘れてないぞ」

『ふ。余とてあの時ばかりは命の危機を感じたわ。つくづく我が傘下に入らなかつたのが惜しいことだ』

千年前の出来事を思い出したのだろう。大魔王は整えられた顎髭を撫でると、砂浜から動く気配のない呪怨王に尋ねた。

『……それはそれとして、呪怨王ともあろう者が海で一晩明かす気か？ 破天荒なことだ』

「育ちの良いお前と違って俺には珍しくもないことだ。俺の流儀は知っているだろう？」

『呪には呪を。恩には恩を。成る程、故に勇者も見逃す、か』

「俺にとつてはその価値があった。それだけだ」

その言葉に大魔王はゆっくりと目を細めた。

愉しげだった眼差しが理解できないようなものを見る眼差しに変化する。

顎に手を当て、大魔王は微かに首を傾げた。

『……相も変わらず狂った存在よな。余には理解できぬ。

反戦派の魔族を纏め上げて領地を作り、守り人の真似事を楽しむ一方で、黒の核晶のようになすべてを無に帰す超兵器を生み出したあの時と変わらぬ、

貴様は矛盾している』

「そんなことは分かっている。俺は初めからオカシイのさ」

自嘲したように呪怨王は首を縦に振った。

「それに勇者にも変わり者と呼ばれたよ。俺からすればお前が言うな、と言ってやったけど」

『ふ、はっはっは！　そうか、勇者にすら言われたか。人間の勇者も豪胆よな。まあ貴様の正体を知らぬから言えることであろうが……』

「……。もう良いだろう、勇者のことは。

……ああそうだ、気になってるだろうから言っておくが、今回は後一週間で魔界に帰るから安心しろ。ここで暴れる気もない」

くつくつく、と喉を鳴らして笑う大魔王に呪怨王は不機嫌そうに眉を顰めた。

そんな大魔王に対する無礼な態度に俄かに従者が殺気立つも、主の視線を感じ取りすぐに平静に戻った。

無言の時が続く。

ゆつくりと口を開いたのは大魔王であった。

『ふふ、ここでは、か。成程。一週間……我らにとつて瞬き。否、刹那に等しい時間で貴殿が帰還するというのなら余ももう詮索はすまい。』

万一の時の為にミストバーンを送り込んだが……杞憂であったようだ』

しかし、と大魔王は言葉が続けた。

『知つての通り余は慎重な性格でな……貴殿が帰還するその瞬間を見届けねば安心できぬ。』

故に、帰還する際は死の大地へ来るが良い。貴殿が『暴発』しないよう、万全の準備をもつて帰還ゲートを用意しておこう』

「俺は危険物扱いか！ 否定はしないがな！」

『できない、の間違いであろう？ 呪怨王』

違いない。笑う大魔王にそう返し、ブラッドはため息をついた。

黒の核晶を作ったとき以前から彼は魔界の住民からはそのような扱いであったのだ。



自領でこそ幾分かマシではあるがそれは例外ではない。

しかし故に呪怨王は大魔王・冥竜王と対等なのだ。

大魔王はその年の刻まれた顔に愉しげな表情を浮かべると、背後に控える腹心に目を向けた。

『……呪怨王の意思は確認できた。ミストバートンよ、そなたも戻るが良い』

「はっ」

『ではな、呪怨王。一週間後にまた会おう』

「俺は行くと一言も言っていないぞ大魔王」

『何、律儀な貴様のことだ。招待を受けて来ぬという選択肢はないだろう？』

そう言ったのを最後に大魔王の声は途絶えた。

白い衣が翻る。海に浮かんだ大魔王の姿が消えるのを見届けると、忠実な配下は直ぐに瞬間移動呪文（ルーラ）を行い、海岸にはブラッド一人になってしまった。

大魔王主従の無駄な威圧感のある空気が完全に消えたことを確認すると、ブラッドはため息とともに砂浜に腰を下ろした。

「……胃が痛い」

これだから大魔王と話すのは好きでないのだ。

今頃死の大地でゆるりと過ごしているであろう大魔王に少し毒吐き、ブラッドは空に

目を向けた。

どれほどの時間海を見続けていたのだろう。

いつの間にか月は海に沈み、太陽が顔を覗かせようとしていた。随分と長居したよう  
だ。

ブラッドは一度だけポルトスの町を振り返った。

「またな、勇者達」

朝焼けの光が海岸を照らす。

そこにはもう、赤い髪の魔族の姿はどこにもなかった。

## 悩みの種は向こうからやってきます

とある日のことだ。

祈りの塔の跡地で一人きりで過ごしていた少年は、初めて出会うそれに目を丸くした。

大きな罅に立派な翼。落ち着いた黒色の鱗が鉄壁の防御を誇るそれは、種族を竜（ドラゴン）という。

深淵を見通すような濃い黄色の瞳を見つめて、少年は竜に尋ねた。

【貴方は誰ですか？】

【それはこちらの台詞だ小僧。ここはこの俺、冥竜ヴェルザーの領域だ。どこから入った？】

少年は驚いた。冥竜ヴェルザーといえ、魔界で噂の知恵ある竜だ。

魔界の統治をしている筈の彼が何故このような所にいるのだろう。不思議に思った少年はヴェルザーに尋ねた。

【貴方こそ何故このような所にいるのですか、冥竜ヴェルザー様】

【質問に質問を返すな。……まあいい。俺様は寛大だからな。なぜ俺がここにいますかと

言えば、ここには俺の張った結界があるのだ。危険物を出さないための結界がなきよとん、と首を傾げるその仕草に冥竜ヴェルザーはため息を吐いた。

少年の頭ほどもある大きな爪先でちよん、と小さな頭を小突くと、祈りの塔の残骸を指差す。

【いいか。ここにはかつて、神々共が魔界の監視をする為に建てた塔があつた】

【それはボクにも分かつています。祈りの塔ですね】

【そうだ。だが俺達竜とお前達魔族をこんなところに押し込めた連中の目など、百害あつて一利なし。すぐさま俺とポリクスが瓦礫にしてやったわ】

それはともかく、と冥竜は咳払いし続けた。

【小僧。死にたくなくば早く出ていけ。この俺は小僧の相手をするほど暇ではないのだ】

【……？ 何かあるのですか？】

そう言つて不思議そうに首を傾げる少年に、いよいよヴェルザーは呆れたようであつた。

話を遮るな、とその頭を小突くと、ヴェルザーは不意に顔を上げた。何かに気付いたように、少年の背後に息吹（ブレス）が放たれる。

あまりに突然のことに少年はその熱さに悲鳴を上げてしまう。

しかしヴェルザーは少年のその様子など気にも止めずに少年の背後……瓦礫の陰に隠れた黒い靄を焼き尽くす。

水系呪文（ヒヤド）で身体を冷ました少年はようやくそれに気付いたようであった。

【何ですか、あれは？】

【この辺りには黒魔晶という特殊な鉱物がある。本来は魔法力を無尽蔵に吸収するだけの無害なものだが、この周辺の黒魔晶はこの尋常でない怨念を吸ったためか、怪物のようになり襲い掛かってくるのだ】

だから出ていけというに、と黒い靄を焼き尽くしたヴェルザーは一つ息を吐く。同時に遠くの山からこちらを伺う同じものを見つけて魔法力を飛ばした。

べちゃ、と何かが潰れたような音と共に黒い靄の姿が消え去った。

【アレに襲われたらどうなるのですか？】

【小僧、自殺願望者か？ アレに襲われたら最後、黒く腐食してどろどろに溶かされて消え去るぞ】

見ている、とヴェルザーは祈りの塔の欠けらを一つ手にした。

何の変哲もない白い石の欠けらだ。大体少年の背丈と同じ程度か。ヴェルザー程の巨体を持つのに相応の大きさだ。

それを無造作に再び湧き出た黒い靄に投げつけると、白は一瞬で黒に染まってしま

う。

石であったはずのそれは黒い靄と同化するようにどろどろと形を崩し、地面に染み込んでいった。無機物でこれだ。恐らく生物も同様の末路を辿るだろう。

流石に慄いた少年は思わず冥竜の側まで駆け寄った。

「……分かったか、あのような危険物を外に出すわけにいかぬからな。それで俺はここに結界を張り、アレを見張っている」

「物凄くよく分かりました。でも、貴方様は襲われないのですか？」

「ふん。この冥竜ヴェルザーを襲い、食らいつくすことができるものなどこの世に存在せぬわ！」

「はあ……」

態度も図体も大きなヴェルザーのその自信に少年は呆れのような、尊敬のような複雑な声を漏らした。

それからというものはヴェルザーと共にいることが多くなつた。

帰れと言われても帰らない。しかし不思議と殺す気も起きない。そんな少年との奇妙な生活に、ヴェルザーは深いため息をついた。

やがて折れない少年に諦めたのか、ヴェルザーは自衛の手段として暗黒闘気の扱い方や、魔法力のよりよい扱い方を教え始めた。二人の主観では、何年・何十年もそこに居

た気さえする。

やがて少年は青年となり——……

そこでブラッドは目を覚ました。

現在時刻は正午よりも少し手前、太陽はまだ東寄りに輝いている。

アバン達と別れたブラッドは飛翔呪文（トベルーラ）と瞬間移動呪文（ルーラ）を駆使してギルドメイン大陸に上陸し、人目のつかない木陰で仮眠を取っていたのだ。

「……。最近は昔の夢をよく見るな」

小さく欠伸をしながら身体を伸ばすと、背を預けていた木の枝に触れた。

ブラッドと同じ鮮やかな赤色の葉を茂らせるその木をちらりと見つめ、ブラッドは荷物を手に立ち上がる。

「不思議だな。ロモス周辺は緑の葉が多かったが、こちらでは赤の葉が茂っているのか」  
ブラッドは知らないことであつたが、ギルドメイン大陸はラインリバー大陸より北にあるため現在は秋真つ盛りだ。

色とりどりの葉が揺れる山道を飛翔呪文（トベルーラ）で通過しながら、ブラッドは昨夜探知した奇妙な反応を思い浮かべた。

現在彼が飛行しているのはギルドメイン大陸の中央の地域だ。ペンガーナと呼ばれ

る王国の賑わいをチラリと見つめながら南東に向かって飛翔していく。

向かうはアルキード王国だ。アルキード王国は横長に伸びたギルドメイン大陸の中でも、ロモス王国のあるラインリバー大陸やパプニカ王国のあるホルキア大陸方面に突き出た部分を治める大国だ。

一時間もしない内に目的地に辿りついたのか、ブラッドは飛翔呪文を切る。

ブラッドは知らないことであつたが、そこはアルキード王国にある奇跡の泉と呼ばれる場所であつた。

周囲が深い森に囲まれたそこはどこか神秘的な印象を受ける。森の切れ目から見える泉の、澄み切つたその水面を見つめてブラッドは呟いた。

「どうやらここで間違いはないようだ」

深い森に囲われた泉の周辺には何の気配もない。一見すればただの美しい泉だ。

だがよく周囲を観察してみれば木々の幹は黒ずんだ斑点が浮かんでいる。

まるで重傷の人が這いずつた跡のように押しつぶされ、血で固められた草花の様子を見れば、何かが確かにここにあつたのだと納得できる有様であつた。

そこから少し離れた泉に続く道に、土に隠れるほど薄まった血痕を発見しブラッドは目を細めた。

「……結構前の血だな。だが奇妙な血だ。人間のようであり、魔族に近く、しかし竜のよ



うな気もする」

しやがみこんでその土に触れてみれば、猶更奇妙な感覚がブラッドを襲った。知っているような知らないような、そんな喉の奥に小骨が引つかかったような僅かな違和感が残るのだ。

しかも呪文で探査をしてみればこの付近一帯はそんな奇妙な感覚にあふれている。よくよく探査を続けてみれば点々と続くその感覚は全て、泉で途切れていた。

ブラッドは睨み付けるようにその水面を見つめ、そつと手を伸ばした。皮の手袋ごと水に指先を浸ける。

「つっ！」

その瞬間、まるで雷に打たれたような衝撃がブラッドの全身に駆け巡った。

慌てて水から手を放し手袋を脱ぐと、ごつごつとした指先が焦げたように真っ黒に染まっていた。

舌打ちを一つし指先を切り捨て再生すると、ブラッドは手袋をはめ直してため息を吐いた。

自身の身に何が起こったかはすぐに分かった。これは拒絶反応だ。

(この泉、神々の手が加えられているな)

神の持つ聖なる力によって守護されてる故に、邪悪な存在を受け付けけない。そんな性

質をこの湖は持つていた。

——これはいい。

ブラッドはにやりと口元を歪めた。

神の力を持つ媒介があれば、猶更天界に呪いを届けやすい。何せ神の力に守護されているということは、天界からここまで力を届ける道筋があるということなのだ。

それを逆に利用すれば天界に直接呪力を送り込んで、捕えられているヴェルザーを奪い返すことも容易だろう。

当初計画していた人間たちの負の感情を利用して地道に天界に穴を開けるよりも非常に効率的だ。

拒絶反応で指先が傷つけられたことも帳消しにしてブラッドは一気に上機嫌になった。

(二度天界に向かう穴を開ければ魔界からでも『呪える』。そうすればこれまで降り積もった魔族たちの天界への恨み辛みを神々に直訴できるし、俺の負担も軽くなる。

……怪我の功名って奴だな！ ナイスだヴェルザー！ うっかりも役に立つんだな！)

冥竜王のうっかりがなければ地上に来ることもなく、こんな都合のいい媒介を見つけることもなかっただろう。

ブラッドは今頃天界で石になつてゐる最後の知恵ある竜に向けて非常にいい笑顔で親指を立てた。冥竜王の怒りに満ちた表情が青空に浮かんだ気がする。

そんな幻覚を無視してブラッドは冥竜王を魔界に戻したら祝杯を挙げに行こうと決意した。呪怨王は地上は好いても神に恨みを晴らす機会は逃さない。胃痛の最大の原因は神なのだから当然だ。

さて、どのように場を整えようか。そう考えたのと同時に、ブラッドは遠くから足音が聞こえるのを感じた。

「ー」

とん、と軽い音を立ててブラッドは木の上に飛び乗った。魔法力も闘気も使わない純粹な脚力は魔族ならではの業だ。

咄嗟に木の上に身を隠すこと数分後。森の奥から、手を取り合つた二人の男女が現れる。

太い木の枝の上からブラッドは観察するようにその二人を見つめた。  
女性の方は普通の人間のようなようだ。

黒い髪に明るい茶色の瞳をした整つた顔立ちをしており、どこかアバンに似た穏やかな雰囲気纏つてゐる。余裕があれば中々いい女だ、と茶化していただろう。

だがブラッドの目を引いたのは男の方だった。

その男は違和感の塊であった。

姿かたちは人間の成人男性と変わりはない。黒い髪に精悍な顔立ちの若い騎士、と言った出で立ちだ。

しかしその内側に秘められた力は、人間のそれとは明らかに一線を画していた。

その男の正体を確信してブラッドは目を細めた。

(……驚いた。ヴェルザーの敵がこんなところで見つかるとはな)

違和感があるのは当然だった。その男は竜であり、魔族であり、人である。神々によって創られた奇跡の存在——竜の騎士だったのだから。

竜の騎士とは、竜の絶大な身体能力と魔族の強大な魔力、そして人間の心を持つといわれる魔界の疫病神だ。

天界・地上・魔界を調停する破壊兵器であり、呪怨王(じぶん)でさえもなるべくは相対したくない相手である。

先の戦いでは冥竜王ヴェルザーを天界に封印したある意味仇敵ともいえる存在の登場に、ブラッドの心は波立った。

しかし表には出さない。

竜の騎士は、彼らを観察するブラッドに気付かないまま泉の周辺を見渡すと、罰が悪

そうに額に手を当てた。

「……やはり気のせいだったか？ すまないソアラ、時間を取らせてしまって……」

「大丈夫、私は気にしていないわ。奇跡の泉に何かあったら困るのは balan だもの。貴方のお役目を優先して？」

「そう言ってくれると助かる。……君は本当に優しいな」

そう言つて竜の騎士は女性に柔らかに微笑んだ。

ソアラと呼ばれた女性もその笑みに答えるように輝くような笑みを浮かべた。

ブラッドはその表情を見て驚きを浮かべた。すっかりソアラに惚れ込んでいる竜の騎士の姿は兵器の姿とは思えなほど穏やかなものだったのだ。

そんな呪怨王の眼下で、見つめあったままだった二人は小さく笑い声をあげた。

「でもここに來れてよかったわ。ここはいつも綺麗な花が咲いているもの」

ソアラはそう言つて泉の縁に咲いている白い花を指差すと、泉の縁を回るように歩き始めた。竜の騎士もそれに続くが、その表情は先ほどまでと一転、彼女が泉に落ちてしまわないか心配そうだ。

だが泉を縁取るように咲く色とりどりの花を見て回る二人は、どこまでも幸福そうな雰囲気を纏っていた。

(は？)

思わず漏れそうになる声を堪え、ブラッドは竜の騎士を二度見した。

もう一度述べるが、竜の騎士とは天界・地上・魔界を調停する破壊兵器だ。

ブラッドの永い生の中でもそれが戦い以外の生涯を送った記憶はない。

だというのに目の前にいる男は、まるで――。

(人間……みたいな表情、というか……)

不意にブラッドの脳裏に、ロモス王国やポルトスの町にいた人間達の姿が思い浮かんだ。ほんの些細な出来事に一喜一憂する人々。何でもない生活を送り、心底幸せだと全身が主張しているその姿が竜の騎士と重なる。

そう。今の竜の騎士の姿はまるで、人間そのものだった。

(……)

ブラッドは呆然としたまま二人を見つめた。

結局竜の騎士は隠れているブラッドに気付かないままその場を去ろうとソアラに手を差し出した。

「私は気を張りすぎていたのかもしれない。そろそろ戻ろう。……さあ、姫。御手を」

「まあバランつたら。ちゃんと名前で呼んでください」

「む、すまないソアラ」

やってしまった、といたげな竜の騎士の表情を見て、ソアラはくすくすと笑みを浮

かべた。

ごつごつとした武骨な手と白魚のような白い手が重なり合う。

竜の騎士にエスコートされ、初々しい雰囲気を持つ男女は森の奥へと消えていった。

二人の気配が周辺から完全に消え失せたのを確認して、ブラッドは地面に降り立つた。

竜の騎士の笑みが脳裏から離れない。

なんだアレは。

なんだアレは。

自身の中で渦巻く竜の騎士への複雑な感情を抑え込み、ブラッドは唇を噛み締めた。

アバンとの約束がなければそれこそ本気で、地上のことなど知ったことなく竜の騎士を殺しにかかっていただろう。

それ程の激情が彼の中で今渦巻いていた。

「……………」

あの女性に向けた柔らかな微笑みは本当に何なのだ。

心底幸せだ、彼女が愛しい、と全力で主張しているその姿は、どこまでも兵器らしくない。それ故にブラッドの機嫌を損ねた。

この感情はともよく知っている。そうこれは。

「めちやくちや腹が立つつて奴だな」

ブラッドの影に黒い霧が湧き立つ。

まるで湯気のようにゆらゆらと揺れる霧は、美しい地上の雰囲気似合わぬ異質なものであった。

漏れ出た霧は触れる場所を一気に黒く染め、ブラッドの周囲をじわじわと暗黒に染め上げていく。そして黒い汚泥が毒を浴びせたように緑を枯らしていく様子は尋常ではない。

それに気づきブラッドははつと指を鳴らした。

それをきっかけとし、黒い霧は勢いを失いブラッドの影に戻っていった。

しかし既に霧に襲われ不毛の土地となっていた場所の色は戻らない。

まるでその部分だけ時間が一気に過ぎ去ったように、草の一つも生えぬ黒い大地がブラッドの周囲に展開されていた。ブラッドはやってしまった、と頭を押さえた。

罰が悪そうに頭を搔くと、一つ拍手を打つ。



するとどうだろうか。墨を塗り固めたような漆黒であった大地が、元の茶色に戻っていく。

流星に枯れた草木は戻らないが、それでも周囲は元の穏やかな森の気配に戻った。

「……あーやつちまった。痲癩起こすとかガキか俺は」

己の失態にブラッドは頭を抑えた。

そんなに神々の兵器が人間のような幸せに浸っていることが気に入らないのだろうか。それは違う、と自問自答する。

ではなぜか？

だがその答えは出ない。

答えの出ない苛立ちに、ついにブラッドは匙を投げた。

「分からん！ 考察は後回しだ！」

「それはりあじゆう爆発しろ、と叫べば解決ですよ王様！」

馴染みのある声が森に響いた。

その瞬間、ブラッドは猛烈な嫌な予感を感じしやがみこんだ。その直後、先ほどまで顔のあった位置に火炎呪文（メラゾーマ）らしき火炎弾が通過した。

更に危険を感じし転がるように横に退避。

その行動は正解だった。何故なら、外れたはずの火炎呪文が真空呪文（バギ）によつ

て向きを変えられ、不毛の大地と化していた場所に火柱を突き上げたのだ。

もしも移動していなければ今頃ブラッドはその火に包まれていただろう。

外套にかかった土埃を払い、ブラッドは深いため息を吐いた。

ブラッドは攻撃した犯人を知っている。寧ろ知らない筈がなかった。

「……………そうだよな。今の痲癩で漏れた瘴氣、奴らなら速攻で嗅ぎ付けるよな」

そこにいたのは三人の魔族であった。

一人は火炎呪文を放っただろう、右手に炎を灯す大柄な男。一人は先ほど上がった火柱を氷系呪文（ヒヤド）で鎮火する小柄な男。そして最後の一人は獅子のような立派な鬘を持つ男であった。

予想とたがわぬその姿に、外れてほしかったとブラッドは肩を落とした。

「三馬鹿。親衛隊長から聞いていたが本当に脱走していたんだな……」

ジオン大陸では三馬鹿魔族と評判の三人衆。

その名をボルフレイム、ティグルド、レアロードという。

一週間ぶりだというのにひどく懐かしい顔ぶれだ。そして見たくもあり、見たくもない顔ぶれに、一気に疲れが襲ってきた。

そんなブラッドに真っ先に反応したのはボルフレイムだ。

「王様が酷いんですよ！ 数日かけて傷を癒したのに、意気揚々と王城に乗り込んだ時

に居たのは親衛隊長殿だけ！」

「消火完了。折角だから親衛隊長殿に挑んだけど、やっぱり王様じゃないと物足りない」  
「聞けば地上に行つたというではないですか。ですので西区画を突つ切つて我々も地上に来たのです」

『王様と戦いたいから！』

声を揃えて言う三人の姿に、ブラッドは沈黙した。沈黙せざるを得なかつたのだ。

そのまま得意げな表情を浮かべる三人のうち、ボルフレイムとレアロードの頭を掴み近くの大木に投げつけた。消火活動をしたティグルドは一応の免除だ。

派手な音を立てて大人の胴ほどもある幹がへし折れる。

幾ら頑丈な魔族と言えど流石に打ち所が悪かつたのか。二人はぐるぐると目を回して気絶していた。

ブラッドはそんな二人を冷めた目で睨み付け、ティグルドに視線を向けた。

「ティグルド。説明しろ」

「はい王様。でも、何か来そうなので後ではダメですか？」

「チツ。流石に気づかれたか」

そしてこれだけ騒ぎを起こせば当然竜の騎士も気づく。

猛然と駆け抜けてくるその気配を感知し、ブラッドは三人の首根つこを引つ掴んだ。

「瞬間移動呪文（ルーラ）！」

光の軌跡が泉から飛び立つ。

その直後に入れ替わるように現れたのは竜の騎士・バランだ。

「今何か魔法力の気配が……！　なんだ、この様は?！」

バランは草木が枯れ、焼け焦げた地面と折れた大木を見つめて驚愕の表情を浮かべた。

怪物（モンスター）の仕業ではない、とバランは判断する。

何しろ現在は魔王が倒され平和になった地上で暴れる怪物はほとんどいなくなった。少なくともバランが知る限りこのアルキード周辺で怪物の目撃情報は全くなかったのだ。

「一体何が起きているというのだ……」

破壊の痕跡を見つめ、バランは警戒するように愛刀の柄を撫でた。

長年の戦闘経験によって培われたその観察眼で検分するかのように痕跡をなぞる。

黒く焦げた地面にはどうやら火炎系呪文を氷系呪文で鎮火したような跡があるのを発見し、さらに周囲の木々に残る切り傷から真空呪文の使い手がいることを推察する。

しかし、枯れた草木だけがどうにも解せない。

一刻もしないほど前にソアラと愛でた花々は見る影もなく枯れ果て、所々では風化し

てさえいる。

——恐るべき脅威がこの国に迫っているかもしれない。

balan はそう判断すると、アルキード国王に警戒を促すべく踵を返した。

## 馬鹿は死んでも治りません

ぱちん。まるで静電気でも起きたかのような翼に走る痛み。

それを感じ、ふるりと瞼を震わせ彼女は目覚めた。

目覚めるのは何年振りか……そう考える彼女であったが、以前目覚めた時からあまり時は経っていないように思える。

白い雲に包まれた寢床から顔を上げると、彼女は小さく息を吐いた。

『……邪悪なる何者かが聖なる泉に触れたようですね』

警告を痛みとして訴え続ける翼を震わせる彼女は白い竜である。

名を聖母竜マザードラゴン。世界が創られたころから存在する、竜の騎士の母だ。

そして彼女は泉の守護者でもあった。

邪なる者が我が子を助ける泉の力を濫用しないように眠りながらも守っていたのだ  
が……どうもそうはいかないらしい。

自身が眠りにについている時が最も平和であると知っている彼女は悲しげに睫毛を震  
わせた。

しかし嘆いていても仕方がない。

彼女は思考を切り替えると役目を果たすべく宙に地上を映し出す。

綺麗な円を描く鏡のようなそれには、赤い髪の男と三人の魔族が話し合っている姿が映っている。

だがその姿を見て彼女は困惑を瞳に浮かべた。地上に魔族は本来出てこれない筈なのだ。

『考えられるのは魔界から地上に繋げる力を持つ魔族の出現でしょうか。……神々に進言する必要があるそうですね』

彼女に読み取れる範囲では三人の魔族の力はそれほど強くない。神々によって封じられた魔界を抜け出るには少々力不足のはずだ。

とあれば送り込めるほどの力を持つ何者かがいると考えるのが自然だろう。

それこそ噂に聞く大魔王や今は天界に捕えている冥竜王のような――。

『――いけない、すぐ考えこんでしまうのは私の悪い癖ですね』

一瞬目を離れた隙に魔族たちの姿はなかった。入れかわるように我が子の気配が泉に近づくのを感じた彼女は、どこかに撤退したのだろうと予測する。

三人の神によって創られた地上最強の我が子だ。一般的な魔族ならそれに恐れをなしても仕方ない。

これに懲りて魔界に帰ってくればいいのだが。

しかし、だ。彼女はどうにも初めに感じた気配が気になっていた。

竜の騎士の長い歴史の中で邪悪な気配を感じたことは数多ある。だがあれ程異質な気配を感じたことは初めてであった。

先の冥竜王ヴェルザーとも質が違う邪悪さだ。例えるならヴェルザーのそれは混じり気のない漆黒だとすれば、今感じたのは様々な色を混ぜ合わせて出来た雑多な黒といえる。

嫌な予感がする。

我が子なら大丈夫だと思いが、万が一があるかもしれない。

そう考え彼女は翼を震わせると、ゆっくりと立ち上がり翼を広げた。

瞬間移動呪文（ルーラ）でブラッドが咄嗟に飛んだのはラインリバー大陸のとある洞窟を出た森の中だった。

そこはブラッドが最初に地上を見た場所だ。

瞬間移動呪文は目的地に一瞬で飛ぶ呪文だが、目的地を正確にイメージできなければ印象深い場所へ飛んでしまうのだ。

魔界と地上の境目でもあるそこは仄かな瘴気が漂っている。実に一週間ぶりの魔界



の空気に、懐かしげに目を細めた。

しかし今はそれどころではない。

ブラッドは気絶している二人を木の枝でつついているティグルドに向かって説明を要求した。

「では説明しろティグルド」

「……その前に一戦は、ダメです?」

「説明しろ。これ命令な」

命令とあれば仕方ない。そう言いたげな表情でティグルドは頷いた。

三人が傷を癒し再挑戦に来たのはブラッドが魔界を飛び出した直後のことだという。

考えてみれば当然のことだ。魔族は高い回復力を誇っており、並みの魔族ですら時間をかければ四肢の欠損を治せるほどの能力を持つ。

問題児とはいえ強力な力を持つ三人が数日かけて復活しない訳がなかった。

あと一時間室内に居ればまた襲撃されていたことを知ったブラッドは思わず顔を引き攣らせた。

そんな主の表情には構わずティグルドは続ける。

「あととさつき言った通り。いつもみたいに王様はこないし、捕まっただとはいえ折角お城に行ったのに王様がいなかったから逃げた。」

親衛隊長はともかくあとの雑魚に捕まりっぱなしのはちよつと不満でしたし」

「お前等の判断基準はいつたいなんなんだ……突っ込みどころが多すぎるぞ……」

「まずは戦えるかどうか。それから強いかどうか。少なくとも俺はそこから個人を見るのです」

そう言つて無邪気な子供のような真つ直ぐな目を向けるティグルド。全くぶれない戦闘意欲に流石のブラッドも空を仰いだ。

どう考えても手遅れであつた。

「知っていた。知っていたが病氣過ぎる……」

「俺たちから見たら戦えない魔族を守り続ける王様の方が酷い病氣。王様らしいけれど」

ティグルドの無表情が僅かに崩れ、口角が上がる。

見た目は小柄な少年に見えなくもない青い魔族に、別れたばかりの少年の面影が重なりブラッドはげんなりとした表情を浮かべた。

既に相当疲れているようだ。

「……大体分かつた。何か言い残したことはあるか」

「はい王様。親衛隊長との戦いはそれは楽しかつたです。まるで王様と戦つてみたいでした」

「そうじゃない阿呆虎！」

どこか得意げな表情を浮かべるティグルドの頭に平手が打たれた。スパーン！と軽快な音が鳴り響くと共にティグルドの青い頭が固い地面に衝突する。

鈍い音と共に動きが止まるが、この程度でダメージを受けるような魔族ではない。

それをよく知っているブラッドはため息を吐いた。

「お前等本当にどうしようもない問題児だわ」

「褒めて貰えるなんて嬉しい」

「褒めてない。一切合財褒めてない」

紛れもないブラッドの本心であった。

しかしティグルドは全く気にせず無表情のまま目だけで歓喜を表現すると「もういいよ」と声をかけた。

壮絶な悪寒が走る。警鐘を鳴らす身体に従いブラッドは左に身体を捻り出す。

だがそれは間に合わなかった。

青い光が外套を切り裂き、内側に切り込む。ブラッドの右腕から黒い飛沫が飛んだ。

赤い目が大きく見開かれる。

ブラッドは驚きに満ちた表情で下手人を振り返った。

「不意打ち成功、ですね」

感極まったような男の震え声が洞窟に響き渡った。

一体いつの間に目覚めたのか、恍惚の笑みを浮かべるレアロードの姿がそこにあった。

その手には黒い血を滴らせる氷の剣が握られている。長剣と言うには少し短く、短剣（ショートソード）程だろうか。どちらかといえば大柄なレアロードの背丈には不釣り合いの剣だ。

それはブラッドの血によってドロドロと溶かされ始めているがレアロードは大して気にしていないようだった。

「全く、ティグルド？ 声をかけるのが遅いです。私も王様と話がしたかった」

「……遅くない。起きるのが遅いレオのが悪い」

そう呟くティグルドの声は震えていた。獣のような瞳孔は開ききっており、口元は三日月を形作っている。そしてその身体は痙攣するかのように震えていた。

待ちきれない。

全身でそう主張する青い魔族に、レアロードは出来の悪い弟を見るような目を向けた。

「アレは狸寝入りです。あと殺気を少し納めなさい。ボルフレイムですら狸寝入りを耐えたのに我が儘な」

「オレですらうってなんだオレですらうって！」

怒鳴り声と共にブラッドの足元が赤く輝いた。

滴る黒い血を呆然とした表情で抑えていたブラッドであったが、流石に足元の変化には気付いたようだった。

赤く輝く足元、その中でも一際明るい六つの点を見つけその口元が引き攣った。

魔族にとつて六芒星は力の源である。

ではその六芒星を使って魔法を放てばどうなるか。それをブラッドは良く知っていた。

「……おまえら、本当に馬鹿だろ!? この至近距離、自分もろとも爆発四散するつもりか!?」

「これぐらいしないとダメージにはならないっしょ王様には！」

「そして死んでも化けて再度戦闘すれば問題ない」

「畜生こいつら馬鹿だった!!」

きっぱりと断言したボルフレ임・ティグルドに思わず絶叫するブラッド。

しかし時間は無情だった。

カウントダウンのように六つの点が強烈な光を放つ。

そして魔力が六芒星を形作つたその瞬間、マグマのような灼熱が渦となって爆発し

た。

(あいつら絶対殴る)

ブラッドは強く決意した。

『はくしゅん!!』

「……今すごい悪寒が。王様が本気で怒ったかもしれませんね」

「悪寒いこーる王様のせいなのはジオンじゃ常識だしな。うん？ 待てよ兄弟、という  
ことは」

「本気の王様と戦えるかも……？」

ティグルドの呟きに三人は犬歯がむき出しになるほど口元を釣り上げた。

レアロードの瞬間移動呪文によって空に飛び立った三魔族であるが、天まで上る赤熱の渦を見つめてやりすぎたという考えはない。

寧ろ彼らの主がここからどう来るのか楽しみにしている有様であった。

「それにしても六芒星効果はすげえな。ただのメラゾーマが五指爆炎弾（フィンガー・フレア・ボムズ）以上の火力か」

「……準備は手間だけど効果絶大。どうだすごいだろう」

「でも呪怨王様なら無傷で突破してくださるでしょうよ。さて火力上げましょうか」

真空呪文で新鮮な空気を送り込み、渦の勢いを上げながらレアロードは笑みを浮かべた。

ボルフレイムによる六芒星によって強化されたメラゾーマは彼らのいた森を跡形もなく爆砕し、その周囲も燃やし尽くさん勢いで渦巻いている。

普通の魔族ではどう考えても死んでいる火力だが、レアロードに手を抜く気は一切ないようだ。

しかし変化のない業火の渦に、術者であるはずのボルフレイムは首を傾げた。

あまりにも炎が燃え広がっていないような気がしたのだ。

「……？　いくらなんでも変わらなさすぎじゃないか、兄弟」

「うん？　きちんと新鮮な風を送って火力上げてますよ」

「いやそうじゃなくて、こう、変な違和感がな？」

言いよどむボルフレイムにレアロードは怪訝そうな表情を浮かべた。

しかしティグルドは違ったようだ。

「もう待たない。突っ込む」

怒ったような表情を浮かべ、ティグルドが渦に向かって飛び出した。その両手にはしっかりと氷の魔法力が蓄えられている。

まるで自殺志願者のようであるがボルフレイムとレアロードはそれを止めない。寧

ろ遅れてなるものか、と焦りすら浮かべ小柄な魔族の跡を追った。

ティグルドの最大氷系呪文、マヒヤドが二発分発動する。

両手から放たれる暴雪の嵐。魔界のマグマの一部すら凍結可能なそれが燃え盛る炎に対し、何の効果も齎さなかった。

その違和感が決定打となりレアロードは気づいた。

自分たちが既に敗北していることに。

「あちゃあ……王様、本気でご機嫌斜めでした？」

「今更気づいたかレアロード」

一瞬のことであった。

燃え盛る炎がまるで幻のように消え去ると同時に、黒い血に染まった握り拳がレアロードの前に出現していた。

鼻先からめりこむような一撃に、獅子に似た姿をした魔族は一瞬で意識を失った。

力の抜けたその身体を受け止めブラッドは再度ため息を吐く。

まさか帰り道ごと構わず襲われるとは、彼にとつても想定外だったのだ。

ダメージに関しては全く問題ない。あの程度のエネルギーならブラッド本体には届かないからだ。

呪怨王の名は伊達ではない。



あの規模の炎なら未だ右腕から流れる瘴気が全て食らい尽くせるといふのもある。

炎を食らい尽くす寸前に幻惑呪文で幻覚を見せ、隙を突いて三人を昏倒させたのだつた。

ブラッドは敢えて垂れ流しの瘴気を縄のようにしならせると、三人の首根を引っ掴み持ち上げた。

「起きろ自殺志願者共」

額に青筋を浮かべ、自由な左腕で三人の顔にそれぞれ往復ピンタを食らわせるブラッド。

流星の呪怨王も我慢の限界を超えていたらしい。

腫物のように膨らむほど叩き続けると、漸く三人は目を覚ましたようだった。

「やっど起きたなこの馬鹿ども。では釈明を聞いてやろう。遺言でも可だぞ」

「遺言は困ります。化けようが着いていくと決めていますので」

「ふんっ」

目を吊り上げ断言するレアロードに手ごろな石を投げつけ黙らせると、ブラッドは真つ直ぐ三人を睨みつけた。

その背後には大地を侵食する黒い靄が揺れており、獲物を前にした蛇が如く三人を捉えていた。

明らかに怒りに燃えている呪怨王の姿に三人の魔族は震えあがった。

「王様が怒ってる……物凄く怒ってるぞ……!」

「呪力出てる。きつと本気だ」

「良いですね、本気の王様と戦ってみたかったですよ。もう殺されてもいい」

「反省していいなお前ら!!」

『はい!』

震えは武者震いだったようだ。

ブラッドは額に手を当てると、眉間に寄った皺を解した。たった十数分の出来事だというのに精神が非常に疲労していたらしい。

別れを告げたばかりであったがアバンとヒュンケルとの旅に戻りたい。癒しがほしい。

ブラッドは切実にそう願った。

『はつくしゆん!!』

「……。先生、風邪なら移さないで下さいよ」

「うーん、悪寒はないんですが……ヒュンケルこそ風邪では？」

秋は季節の変わり目、寒

くなってきましたから用心しませんとねー」

「俺は風邪なんか引きませんよ、そんな柔じゃないです」

「油断大敵ですよ？ まっ、折角ですし次の町で冬の用意を始めましょうか」

「……話を聞いて下さい」

### 閑話休題。

まるで反省した様子を見せない三人にブラッドは思わず頭を抱えた。

「馬鹿は死んでも治らないとはこのことか」

「王様酷いです。俺たち、死んだぐらいじゃ治りません」

「化けて出ようと止まる気はないです」

「尚悪いわ馬鹿者！」

堂々と胸を張ったティグルドの頭に拳骨が下ろされる。

ついだとばかりにブラッドは他二人の正座の上にも拳骨を置くと、手ごろな樹に向かつてため息を吐いた。

「どうしてこう、ウチの領地にいる魔族は能力持ちだと性格がアレなんだ……？」

「その筆頭は王様じゃないですかやだー」

そう小さく呟いたボルフレイムにブラッドは黒い靄を睨つけた。断じて腹が立ったわけではない。断じて。

ごつごつとした体形に似合わぬ絹を裂いたような悲鳴が上がり、それを間近に見ることになったティグルドとレアロードは顔色を青くした。

戦友の蛇に締め付けられた蛙のような哀れな姿に、ティグルドは小柄な身体を震わせた。

「王様、王様も大概変人なのは周知の事実だけど八つ当たりよくないです」

「死にたいようだなティグルド」

「処罰は嫌だけど王様と戦って死ぬるなら化けて出れるし歓迎」

ダメだこの戦闘狂。

ブラッドは呆れ果てたようにため息を吐くと、ボルフレイムから靄を離した。精魂果てたのか燃え尽きたように崩れ落ちる彼を横目で見た後、離れた靄は拳の形を取り、ティグルドの頭上に落とされた。

図らずも拳骨を食らい目を白黒させるティグルドにブラッドは言った。

「……扉はあとで作り返す。とりあえず、お前らは命を捨てて来たことを反省するよう  
に」

「流石呪怨王様、懐が黒魔晶のように深い！　ところでなんで地上に来てるんですか？」

「そういえば説明がまだだったな」

レアロードの今更と言えば今更な質問に、ブラッドは三人にどうして地上にいるのか

説明してないことを思い出した。

「レアロード、親衛隊長からは聞いてないのか？」

「特には。元々隊長殿は呪怨王様以外とは会話されない方ですし、『地上に行った』としか聞いていません」

獅子の魔族の言葉を聞いてブラッドは確信した。

丸投げしたから丸投げされた、と。

……弟の怒りが深すぎる。

先日の会話した時感じた以上の怒りの感情を感じ取り、ブラッドは内心頭を抱えながら三人に経緯を説明した。

「——つまりは王様は冥竜王様のため、ひいては魔界のために地上に飛び出したのですか。流石です！」

感心したように頷くレアロードにブラッドはそつと目を逸らした。

嘘は言っていないが地上に来たのは単なる現実逃避である。しかし呪怨王としての面子を保つためにも黙っておこう、と決意する。

こほん、と一つ咳払いしブラッドは続けた。

「冥竜王が天界にいるというだけで俺の精神衛生上宜しくないからな。それにジオン大陸は魔界すべての呪い・怨念の行き着くところだ。」

数千年降り積もったモノだけでなく冥竜王を慕う者たちの想念がこのまま増えれば、いずれは受け皿が壊れる」

「皆神々大つ嫌いですもんね。俺は戦えればそれでいいんですけど」

「ボルに同意。憎むなんて疲れる。戦闘力の向上に努めた方が余程有意義」

そういつて「ねー」とのんきに話し合う赤と青の魔族。

余りに毒気のないその行動に、ブラッドは苦笑を浮かべ靄を緩め、三人を地面に下ろした。

「お前達ほど怨み積もりがない奴は本当に稀だからなあ。ま、そういう訳で俺は天界に乗り込む訳だが文句はあるか？」

「勿論ございます」

「ほう？　言ってみろレアロード」

「呪怨王様は瘴気の塊。天界のような澄み渡った世界では御身にどのような影響があるのかわからない為、地上で呪術を行うことを進言します」

「そう言えば王様が魔界の外に出るの初めて。爆発しない？」

「ついでに竜の騎士はどうするんですか？　上に行くにもここでやるにも邪魔だと思っ  
んですけど」

怒涛の勢いで紡がれる言葉、特にボルフレイムの問いにブラッドは苦虫を噛み潰した

ような表情を浮かべた。問題はそこなのだ。

どうにかする算段はある。それこそ殺す方法から生かしてとどめる方法まで様々だ。冥竜王に関する恨み辛みもあるが、泉で感じた不快感が胸の奥で燻っており個人的にもブラッドはあの竜の騎士が嫌いだ。

殺意と嫉妬、羨望といった複雑な感情が絡み合ったその不快感はどこまでもあの騎士を殺したがる。

だが彼にも矜持はある。アバンとの約束を破ることはなるべくしたくない。

頭痛のように鳴り響くそれを黙殺してブラッドは三人を真っ直ぐ見つめた。

「まずはレアロード。天界には俺が乗り込みたいんだ」

「危険です。奴らは不思議な力を使うと聞いております」

「知っている。それでヴェルザーのように封印されるかもしれないとお前は危惧しているのだろうか？」

獅子の魔族はこくりと頷いた。

「だが俺は天界に行かなきゃならないと思っている。……神々は俺たちの苦しみを、怒りを、嘆きを、哀しみを封じ込めた。

積もりに積もったその呪いも怨みも、魔族の言葉を、俺が届けなくてどうする」  
限界も近いことだしな、とブラッドは内心で呟く。

レアロードはまだ納得していない様子であったが、主の様子にため息をついて頷いた。

「呪怨王様の御心のままに。いざとなれば我らを使い捨て下さいませ」

「これから存分に扱き使つてやるから安心しろ。まあいざとなればティグルドの言うように天界で爆発してやるさ」

「王様……」

「そして肝心の竜の騎士についてだが、考えがある」

アバンを真似してチツチツチ、と指を振ると、ブラッドはにやりと笑った。

「邪魔者を排除するには力だけではないんだよ脳筋ども」

「えー……脳筋代表の王様が言えることですかあ？」

「ボル本音漏れてる。同意だけど」

「二人ともやめなさい。王様、何か考えがあるので？」

軽口を叩く二人を窘めたレアロードの言葉に頷くと、ブラッドは遠くの樹上を指差した。

そこには葉に紛れるようにして作られたキメラの巣があり、幼いキメラが重なり合うように寝ていた。

それを見て不思議そうに首を傾げる三人であったが、ブラッドは構わず続けた。



「地上で学んだことを見せてやろう」

「王様……遊んでただけじゃなかったんですね」

「よしまずお前達から実験してやる。誰がいい？」

その言葉に濃厚な怒りを感じ、三人の魔族は一足飛びに後退した。

まるで脱兎の勢いで方々に散る三人にため息を吐くと、ブラッドは黒い靄を伸ばして捕獲するのだった。

## 目指すは空の頂です

——親衛隊長との約束の日まで後一日。

つまり三魔族襲来から五日のことである。

ラインリバー大陸、南東部。

通称魔の森と呼ばれる深い森の中にブラッドたちは居た。

何故か三人の魔族はズタズタのボロボロの状態であったが。

そんなボロボロ雑巾のように倒れていた三人に、ブラッドはゆっくりと声をかけた。

「……落ち着いたか馬鹿者ども」

「……若干物足りないけどストレス発散はできましたねえ」

とところどころ焼け焦げた状態で最初に起き上がったのはボルフレイムであった。

狼頭の魔族はどこか憑き物が取れたような、すつきりとした表情を浮かべ回復呪文（ホイミ）を使う。

その緑色の光につられたのか残りの二人もゆっくりと起き上がった。

「うー……頭殴るとは王様ひどい。折角の地上戦の記憶、薄れそう……」

「大丈夫ですよ、忘れてもまた思いつけば良いのですから。それにしても、随分と久しぶ

りにすつきりした気がしますねえ」

あれだけ暴ればさうだろうな、とブラッドは思った。

この三人、捕まえたはいいが落ち着くはずもなく、度々魔の森でのサバイバル戦を行い始めたのだ。

獣人の血が流れる故か初めてであるはずの森林を使ったヒットアンドアウェイは手強く、また新鮮な戦闘状況というものが燃えたらしい。

ブラッドの命令をこなす傍発生した戦闘は三魔族内を含めて既に二桁に登る。

腕を飛ばしたり足を飛ばしたりなど日常茶飯事である。ブラッドは真面目に送り返そうか悩んでいたが自重した。うるさすぎるのだ。

アバンとの約束を守り魔の森ごと焼却しなかっただけともいう。

順次傷を癒し、心なしか表情を和らげた三人の魔族。

その姿を確認しブラッドは大きなため息をついた。

「……お前達、期限過ぎたら道連れな」

「へ？ 王様がなんか不穏なこと言った！」

「どーせ親衛隊長怒らせた。王様あるある。でも道連れとか断る」

「ティグルド」

「……王様と一緒にならなんでもいいレオと俺は違うのー」

獅子頭の魔族の瞳孔が開かれた眼差しにティグルドは目をそらした。

今にも爪を伸ばし襲い掛かりそうなレアロードを取り押さえつつ、ボルフレイムはどう、と声をかける。

頭痛が起きたような錯覚を覚え、頭を抑えるブラッド。しかし気を取り直し睨みつけるように三人に目を向けると、これからの予定について口にした。

「お前達、例の花はちゃんと残ってるだろうな」

「勿論でございます。王様からの預かりものを破壊するなどこの私が許しません！」

「だから獅子の兄弟、おーちーっけーってへぶお!!」

体格の差も拘束もなんのその。そう言わんばかりにレアロードは自分より大柄なボルフレイムを投げ捨て、ブラッドに跪いた。

そして差し出される手には6輪の花が乗せられている。

通常運転である。

頭から地面に突っ込んだ狼頭の魔族の青年を横目に、ティグルドはブラッドに尋ねた。

「こんな唯の草花、何につかうんです？」

「まあ見ていろ。まずは喰らって、こうだ」

ブラッドは影から瘴気と呼び出すと、レアロードの手に触れないよう細心の注意を

払ってその花だけ受け取った。

するとどうであろうか。

瘴気に触れた花は一瞬で溶け落ち、触手のように伸ばされた瘴気の先端から伸びるようにその花そっくりの、しかし禍々しい黒い花が現れる。

それはブラッドの持つ瘴気の特徴だ。

触れたものは何でも溶かし、吸収し、瘴気を基として再構成できる。勿論彼の意味一つで溶かさないようにすることもできるが、基本的に大雑把な呪怨王はうっかり溶かすことが多い。

今までアバン達と交流しながらも、絶対に素手で触らなかつた最大の理由である。

見るも無残に禍々しい黒に変色し、再構成された花を見てティグルドは首をかしげた。

「用途不明。呪われたのはわかりましたが」

「これはな、埋めれば立ちどころに瘴気を発生させる呪花だ。一つでは弱いし無差別だがこれと同じものがあと五つ作ればどうなると思う？」

まだレアロードの手に残る五つの白い花を見て、ブラッドは楽しげに笑った。

意図を察したのか、ティグルドはやる気満々で目を輝かせる。その横で何とか頭を救出し土を払っていたボルフレ임も感心したように頷いた。

「六芒星魔法陣つすね」

「その通り。六つの花、六つの呪い、六つの起点。魔族の本領発揮と洒落込むぞ。

——お前達、舞台は整えてやる。思う存分竜の騎士と戦ってこい」

その瞬間。

ボルフレイム、ティグルド、レアロードの目の色が変わった。

餌を目の前にぶら下げられた猛獣は、瞳孔を極限まで開いて主人の命令を待つ。

ブラッドはそんな三魔族の目の前に黒い花を突きつけ告げた。

「まずはこの花を六ヶ所に埋めろ。これを媒介にしてあの場を俺達の領域にする」

ラインリバー大陸から飛翔呪文を使ってギルドメイン大陸へと向かう。

時間は昼。ちょうど太陽が斜に射し始めた頃だ。

「それにしても王様、よくこんな眠たそうな匂いの花を知ってましたねえ」

ボルフレイムは手に持たされた二輪の花のうち、一輪をじっくり見つめて言った。

すんすんと香りを確かめる姿は狼でなくまるで犬のようだ、とブラッドは内心思いつ

つ頷く。

そんな主の様子にボルフレイムは呆れたような視線を向けた。

「……オレに対してすげえ失礼なこと思ってるですな王様」

「まあな」

「肯定しやがった流石王様ですわ。んー、この匂いマジ眠くなるわあ。持ち帰れたらよく眠れそう」

「嗅ぎ慣れていないものは即座に眠ってしまいうそうだ。嗅ぎ過ぎては本番前に役立たずになるぞ」

「そりゃ勘弁」

ボルフレイムと軽口を交わしながらアバンとのやり取りを思い出しブラッドは少しだけ表情を和らげた。

竜の騎士という最大級の餌を与えられた彼らは未だかつてなく上機嫌だ。

まともに会話する三魔族という珍しいものをみたブラッドは、隣を飛翔するティグルド・レアロードを横目で見る。

主人の視線に気づいた二人はそれぞれ楽しげな笑みを形作った。

「王様太っ腹ー。昔にマンドラゴラ育てようとして痲癩起こした時とは大違いー」

「そうですねえ。どうせ枯れるからとマンドラゴラ屋から購入拒否された時は大暴れでしたよねえ」

「お前達常識は捨ててるくせになぜそんな昔の記憶は捨てないんだ!! あとアレは瘴気

に耐えられなかったマンドラゴラが悪いだけで俺は悪くない！」

六百年以上前の苦しい思い出を指摘され、ブラッドは不機嫌そうに唇を引き結んだ。

この三魔族、妙なところで記憶力がいいのである。

ちなみにマンドラゴラ事件のその後は親衛隊長による強制送還である。ジオン大陸ではよくあることだった。

「そういえば王様、天界にどうやって乗り込むんですか？」

ふと思いつ出したようにボルフレームが尋ねた。

そういえば、とティグルドも言葉を続ける。

「天界には結界が張られていてだれも入ることができないって聞きました。合流呪文も不可。だから俺も知りたい」

「あん？ ああ言つてなかったか。あそこの結界は無視する」

「無視できるもんなんすか!？」

主人の言葉に驚きの声を上げる二人。

それはそうだろう。ブラッドとて最初は泉を通して少しずつ天界に向かう穴を開ける予定だったが、状況が変わったためだ。

先日の騒ぎで竜の騎士が泉を警戒している可能性はほぼ確実と言っているだろう。

そうなれば悠長な呪術を使っていれば三魔族はブラッドを守るため防戦必至になる



のは明白だ。

それではいくら舞台を整えようが竜の騎士には絶対に勝てない。神の作った戦闘兵器はそれほどまでに完成されているのだ。

そのためブラッドは出来れば取りたくなかった最終手段を取ることにしたのだ。

「ヴェルザーのそこへ直接飛ぶ。それなら結界は無視して後は帰るだけだ」

「合流呪文不可なのに来るのです？」

「出来る。俺とヴェルザーの間なら確実に出来る呪文がある」

その呪文、名を呪力移動呪文マガルーラという。

魔力を使わない、呪怨王だけが持つ呪力を使ったりリルーラだ。

呪怨王ブラッドと冥竜王ヴェルザーは共に深い関係にある。

ある意味ブラッドはヴェルザーに育てられ、ヴェルザーはブラッドを長年監視していたという関係ではあるが、二人の付き合いは長い。

それこそ魔界に落とされて魔族の不満が積み上がった頃からずっとこの付き合いだ。

幾度となく殺し合い、お互いの再生も見合ってきた仲だ。弟を除けば一番近い存在と言ってもいい。

だからこそ助けに行くのだ。

それでも呪力移動呪文（マガルーラ）をブラッドがその手段を使いたくない理由は

たった一つだ。

(……天界つてだけならともかく、嚴重に管理されてるだろうヴェルザーのところに直接乗り込むのは流石にやめときたかったんだがなあ)

ブラッドの身体を作るのは瘴気と怨念である。

外見こそ魔族の姿をしているが、呪いと怨念をまとめ上げているからこそその呪怨王なのである。

清浄な世界というのはそれだけで身に危険を及ぼすのに、危険物として封印されているヴェルザーのところへ直接乗り込めばどうなるかは明らかだ。

それでも約束は守らなければならない。

それは遠い日に、ブラッドがブラッドであるために『彼』と誓った大切なことだから。

「王様？」

「……ん、ちと考え事してた。どうした、レアロード」

「いえ。笑みが浮かんでおられたので、気になりました」

「それはそうだ。これからあのうっかり竜を奪還して魔界で祝杯をあげるのだ。楽しみで仕方ないのさ」

「左様でございますか。……そういえば、ボルフレイムが言うには任務前に成功話をすればそれは失敗の兆しだそうです」

「ほーお?」

「ちよっ!? ナチュラルに責任押し付けんのやめようぜ獅子の兄弟!」

「俺それ知ってる。死亡ふらぐってやつ。ボルが言ってた」

「虎の兄弟!?!」

そんな賑やかな会話を続けながら彼らは飛翔を続ける。

やがて海を越え、大地が近づいてきた。ギルドメイン大陸最南端、アルキード王国へは間も無くだ。

あらかじめ二輪ずつ持たせた花を見やり、ブラッドは彼らに告げた。

「さあお前達、仕事の時間だ!」

『待ってました!』

三魔族の声が唱和する。今は頼もしい彼らの声に満足げに頷き、ブラッドは続けた。

「六芒星を描け! 彼の地を一時的に我らの大地と化し、今こそ天界に囚われた我らの盟友を取り返す!

ボルフレイム!」

「アイアイサーつとね!」

赤い狼が先陣を切る。

「ティグルド!」

「了解。殲滅開始」

青い虎がその後につき。

「レアロード！」

「ええ、問題ございませんとも」

金の鬘の獅子が殿を務める。

「行くぞお前達……魔界に安寧を取り戻す！」

呪怨王は物凄い速さで迫り来る竜の騎士を見据え、真つ赤な瞳をぎらりと光らせた。

ブラッドは天界が嫌いだ。憎いし、名の通り恨み辛み全てを背負っている分それとても根深い。

だからあの竜の騎士も大嫌いだ。

竜騎将 balan は森の闇の中一人佇んでいた。

そこから少し離れたところにはアルキードの国軍が駐屯地を作っている。

アルキード王国の国王に異常事態を報告したはいいが、何も起こらずすでに五日が経過している。

見張りにと付けられた騎士達はすでに警戒を解いており、逆に balan への不信感すら

募らせていた。

バルンはそのこと自体は気にしていない。

それは当然だ。

元々バルンはアルキード王国にとって得体の知れぬ騎士であり部外者。

凄腕の騎士ということで王に気に入られ、王女ソアラと懇意にしていることが既に厚遇なのだ。また部外者の身ゆえ本来なら軍部にまで口出す権利はないからだ。

付けられた騎士達もバルンの言を重用した国王陛下によって命じられたもの。

信頼関係などそこには微塵も存在しなかった。

王女ソアラとの出会いで多少丸くなったとはいえバルンは竜の騎士である。

彼にとっては国軍といえど普通の人間の集い。守るべき対象である。

頼りにする気もまた存在しなかった。

それ故彼らの間には確かな溝が存在していた。

「……来たか」

遙か遠くから近づいてくる気配を察知し、バルンは駐屯地から離れ歩き出した。

それを咎める兵士がいたが、バルンは軽く手を振り無視して歩き出す。

己の見た痕跡から察するに、それなりの力量を持つ魔族がやって来ている。

そう考える以上守るべき彼らについてこさせるわけにはいかなかった。

「飛翔呪文（トベルーラ）」

空へと飛び立ち一気に加速する。あつという間に米粒ほどの大きさになってしまった駐屯地から目を離し、バランは海へと目をやった。

近づいている。だがはつきりと感じ取れるのは禍々しい気配だけで、正確な人数はわからない。

まるでバランを誘うように感じる堂々とした禍々しきという矛盾した感想を抱えながら、竜の騎士バランは気配の方へと飛翔した。

森を超え、峠を越したどり着く。

そこは、アルキード王国に伝わる聖なる泉——竜の騎士に伝わる奇跡の泉であった。

「よう、待ちくたびれたぜ」

泉のほとりに佇む誰かがいた。

赤い髪に赤い瞳、縦長に伸びた長い耳は種族の証。

そして白い肌をした魔族の青年——即ち、呪怨王ブラッドはニヤリと口元を釣り上げて笑った。

「……古い魔族の血を継ぐものか……!!」

——かつて、人と魔族の違いは少なかつた。

現在存命している魔族の大半は青い肌に青い血が流れているが古き魔族は違う。

人間のような肌には赤い血を流し、今の魔族に輪をかけて強大な力を持て余していた。バランスの額に宿る竜の紋章がそう語りかける。

歴代の竜の騎士の戦闘経験・あるいは記憶の欠けらを受け継ぐ竜の騎士たる象徴は、目の前の魔族が想定以上に全く油断ならないことを伝えていた。

バランスの戦慄を読み取り、ブラッドは小さく笑った。

「ああこの身体はその頃の魔族を基本（ベース）に作っているからな。そう見えるのも無理はない」

「基本（ベース）……だと？ お前は一体何者だ！」

「教えるかよ、神の道具ごときに。ああでもお前の頭にあるヤツなら知ってるかも、なッ！！」

ブラッドの声に従い、影という影から瘴気の槍がバランスに向けて放たれる！

バランスは一目見て直感した。

これは触れるだけで致命的だ、と。

「瞬間移動呪文（ルーラ）！」

「そうくると思ったぞ、若造が」

バランスを貫通しようとしていた瘴気の槍が交差し、網目を作る。

その刹那の後、網目は瘴気の網と化し操られたかのように上空へと跳ねあげられる。

それはまるで投網のようでまるで違う。

さながら意思を持って動く怪物（モンスター）のようだ。

今度は振り払えない——そう直感したバランスは背にある剣を抜き、網を切り払った。

「……オリハルコンか」

白金の輝きを見て、ブラッドは忌々しげに呟いた。

それは神の金属とも言われるこの世で最高の鉱物だ。

魔界には存在せず、地上にのみ少量あると噂されていたが……目の前の剣はそれとは格が違う。

「真魔剛竜剣、それは純天界製のオリハルコンだな？　地上のものにしては神の加護が

強すぎる」

「真魔剛竜剣を見てその感想か、余裕だな」

「それはそうだ。俺はお前などに構っている暇はない——邪魔だよ神の玩具」

その瞬間。二人のいる場所を中心に、赤、青、黄色の魔法力が三角を形作るかのよう  
に吹き上がった。

上出来だ、とブラッドは笑みを形作ると、一つ指を鳴らした。

「俺は貴様がとても気に食わない。時間があれば自ら殺してやるところだが、その時間  
もない。」



ウチの自慢の戦闘狂共と暫く遊んでな」

「何——!?!」

「六芒星魔法陣、発動つてな。呪われた眠りの花により人間共は悪夢に誘われ——そしてこの地はこれより呪われた大地と化す」

森の静寂が続く中、バランは気づいた。

己を囲むように何かが近づいてきている。

それは巧妙に隠されてはいたが、濃厚な魔の気配であった。

「初めまして、竜の騎士殿」

「魔族……獣人の血統を継ぐものか」

獅子の鬣を持つ男は、魔族特有の青い肌を見せびらかすように頷いた。レアロードだ。

「貴様のうわさは予々伺っておりますよ。冥竜王様を倒し、魔界の安寧を邪魔する神々の玩具にはつくづく反吐が出ます」

「御託はいい。まだ二人いるだろう、出てこい」

バランが目撃した光の柱は三色。残り二色を行った魔族がいることは明白であった。

そんなバランの様子を見て茂みから青い魔族と赤い魔族が現れる。ティグルドとボルフレイムだ。

「不意打ち不可。なるほど手強い」

「流石に竜の騎士つてな。遊び要素がない分つまんなさそうだけど、燃えりやなんでもいいか」

バランを三角形の中心にするように狼・虎・獅子の魔族が囲う。

餌を目の前にした猛獣の形相に、それでも竜の騎士は動揺一つ見せずブラッドを睨みつけた。

「この濃厚な瘴気……暗黒闘気とも違う魔の気配、貴様たち何者だ！」

「ボルフレイム、ティグルド、レアロード。存分にやれ。遊びは長い方が好きだろう?」  
「なんだと!?!」

主人からの許可が下りたその瞬間、弾かれたように三人は動き出した。

バランは三人の動きを目で追い判断を下す——戦力としては魔王ハドラーと同程度かその下。最優先すべきはあの古い魔族。

ならば手早く倒すのみ。

手にした真魔剛竜剣を握りしめ三方向から襲いかかる魔族達との位置を計算。

一閃で終わるにはどうすればいいか、竜の紋章とバランの頭脳が導き出す。

そして刹那の計算ののち、真魔剛竜剣は振るわれた。

「…………ツ!?!」

だがそれは、 balan 本人が予測するよりも遥かに弱々しい勢いで、だった。当然その斬撃は軽々と回避される。

何が起こっているのか理解していない竜の騎士を見て、三魔族はニンマリと笑みを浮かべた。

「あつれえまだ奴さん気づいてないんだ？」

「王様が堂々と六芒星魔法陣宣言してたのにな」

「私の中にも魔族の血が三分の一流れている……そもそも悪影響は竜の血により最小限に留められるはずだが、一体……」

「簡単な答えですよ。貴方は我らの王の庇護下にない者。だからこのジオン大陸を再現した結界の中では自由に動くことはできない」

レアロードの言葉に balan は驚愕に顔を歪めた。

ジオン大陸の名は balan も知っている。悪名高い『歩く大災害』が封印されている魔界最大の禁忌の地。

暗黒とマグマしかない魔界の中でも一際特異な呪われた大陸。

天界からのお告げでは絶対に近寄るなど言われた場所だ。

「さて、その顔では知っていたようですが改めてお教えしましょうか。ジオン大陸は呪われた大地。我らのように適合した魔族しか生きられませんし、戦えませぬ」

「正直王様が本気で嫌ってる奴が動けるだけで驚き。ジオンの瘴気は王様の気分にもよるから、お前みたいな天界寄りの奴には猛毒なのだけど。まあ俺たちにとっては好都合」

手の甲から爪を伸ばしたボルフレイムが最後に告げる。

「んじゃま、能力ガタ落ちした状態で悪いけどさ。王様のためにも俺たちのためにも遊んでくれや」

「任せたぞ」

ブラッドは戦闘を始める彼らに背を向け、改めて泉へと向き直った。

夜の暗闇のおかげか、水に宿る神の加護が薄らと光を帯びているのが彼の目には見えた。そしてそれが繋がる先も。

「悪影響は全てあの竜の騎士に向けた。もう俺が地上に影響を与えることはない」

三色の線で紡がれた六芒星の輝きは確かにジオン大陸と同じ環境を再現しているが、それは竜の騎士と三魔族に対してだけだ。

特に地上の生命に影響を与えることはないよう調整済みだ。人間ならば悪夢は見るがその程度で済む。

アバンとの約束もあるがそれ以上に、ヒトの守護者である竜の騎士の動きを制限する

には、地上の生命は生かした方が都合がいいからだ。

「さて……随分長いこと待たせたが何、俺たちにとつては瞬きの間のことだ。許せよヴェルザー」

背後で爆音が鳴り響く。彼らも存分に楽しんでるようだ。

ブラッドは一つ深呼吸をして、全身を覆っていた防具を解除した。今から敵の本拠地  
に乗り込むのに『拘束具』は必要ないからだ。

ブラッドの行動に気づいたバランが顔を向ける。その紋章が輝きを帯びているのを見、レアロードが首を落とそうと爪を薙ぐ。

回避を選択したバランであつたが反撃とばかりに紋章から熱閃が放たれた。

無防備なレアロードをカバ―するかのように氷の盾が出現するが、それごと貫通した熱閃から庇うようにボルフレイムがレアロードにタツクルする。

少しずつ竜の騎士の動きが良くなつてきている。

ブラッドはこれ以上三魔族の邪魔をしないよう、呪文を口にした。

「呪力移動呪文（マガルーラ）」

瘴気を構成する怨念、呪いの力からエネルギーを取り出し発動する。

夜の闇に溶けるようにブラッドの姿は泉から消え去った。

## 積年の恨みは深いのです

魔族の中でも貧弱な分類にしては、自分はよく生きた方だ。

黒い岩肌の天井を眺め、かつて少年であった魔族の青年は思った。

ヴェルザーと出会って早百年。彼は今、床に伏せていた。

最近現れ始めた青い肌の魔族たちに比べ、古い魔族と言われる白い肌は血の気が失せ、顔色は土気色に差し掛かっていた。

青年に外傷めいた傷はどこにもない。

しかし確かに彼は床に伏せ、命の灯火は消えようとしていた。

それは端的に言えば病であった。

「……馬鹿め。この瘴気の中で過ごせば、いずれそうなると分かっていたはずだ」

簡素な寝床を横から覗くように冥竜は鼻を鳴らした。

百年が経った後も変わらずこの竜は溜まりに溜まった瘴気を出さないため、この地にとどまっていた。

青年とは異なりその巨体には一つの陰りも見えない。

出会った頃そのままの姿に青年は安堵の息を吐いた。

その姿を霞んだ視界を少しでも鮮明にするように青年は目を細めた。

【……でも僕はここで過ごせて良かったと思います。僕は魔族にしては貧弱な方だから、外だったらもつと早く死んでいたでしょう】

【さもありなん。お前ほど弱い魔族は俺様の長い竜生でも初めて見たわ】  
いつか戦い方を教えた日のことを思い出してヴェルザーは嘆いた。

青年には魔法の才能はなく、かといつて暗黒闘気の使い方を教えてもそれを使う肉体が貧弱に過ぎた。

暇さえあれば常に襲いかかってくる瘴気を自力で撃退できた回数も両手にも満たない。

ヴェルザーの庇護下になければ次の日にでも死んでいただろう。

出会った日のことを思い出したのか、青年は小さく笑みを浮かべた。

【あの日、僕はもう何も考えず、ただ神様に文句を言いたくてここに来たんです。懐かしいなあ】

【……あの日から百年か。今でも謎だ。お前みたいな弱小魔族が結界を通過して来たことも、ここに居続けることも】

【あの日どうやって来たのか、正直僕も覚えてないですよ】  
きつとこの瘴気に呼ばれたんだろうなあ。

長い結界生活の中での経験か、青年は確信めいたものを持ってそう呟いた。

ヴェルザーと共に外に出る選択肢は幾度となくあった。でも、外に出る気は起きなかつたのだ。

まるで何かに引き止められるように。

青年の直感じみた不確かな物言いに、流石のヴェルザーも長い首を傾げた。

その視界の隅に瘴気が湧き出る。適当に魔法力を飛ばし消しとばすも瘴気はしぶとく揺らめいた。

そんな見慣れた光景に苦笑を浮かべる青年。だが直後に咳き込み、口元から赤い血が溢れた。

【あー……限界みたいです。中身、ボロボロだ】

【……声を出すな。死にかけの雑魚魔族の声など聞きたくもない】

【あはは。冥竜様、もう聞けなくなるんだから聞いてくださいよ。結構、頑張つて出してるんですよ？】

そう言つてゴホゴホとむせこむ青年。今となつては珍しい赤い血が撒き散らされる。

そんな青年の血の匂いに釣られたのか、周りの影から更に靄が立ち上がるのが見えた。

それを見たヴェルザーは舌打ちを一つすると、指先に魔法力を溜め始める。

青年は霞んだ視界にそれを入れ、申し訳なきように呟いた。



【結局何もできませんでした。それなのにあなたを一人にしちゃうのは、申し訳ないです】

【突然何を言うか、百年程度いただけの若造が】

【でも僕はあなたといれて、楽しかった。自惚れじゃなければ、あなたも】

【黙れと言っている】

青年が見る限り冥竜ヴェルザーはずっと一人だった。

時折結界を出て領地に戻ることはあつても、しかし配下を連れて戻ってくることはない。

彼がいつからここにいるのかは知らなかったが、彼の領民のいる地はこの結界の近くだ。マグマの海を挟んで隣の大陸。それが冥竜ヴェルザーの領地だ。

いくら冥竜がここを領域として定めていても、帰るべき場所は別にある。

そして帰ろうと思えばいつでも帰れたはずなのにここに居続ける理由を、青年はなんとなく感じていた。

【冥竜なんて呼ばれてるのに優しいですよ、貴方は】

【……いずれ全てが俺様のものになる世界を、瘴気などという汚物に汚染させる気がないだけだ！】

全く竜らしい、けれどどこか強欲な人間のような物言いに、この竜らしいと青年は

笑った。

ヴェルザーはそれだけ言い切ると青年を一度睨みつけ、靄への迎撃に移る。

響き渡る爆発音や振動に咳き込み、青年は寢床を朱に染めながらぼんやりと映るその勇姿を見つめた。

「冥竜ヴェルザー、ありがとう。もし僕に生まれ変わる機会があるなら、今度は――」  
その背後。

血の撒かれた岩陰から、様子を伺うように黒い靄が顔を出して居た。

靄は血に同化するように進んでいき、ゆつくりと青年へと腕を伸ばして、そして。

『――何故来たこの愚か者が』

「開口一番、ひつでえなあ冥竜王」

昔と変わらない罵倒に、ブラッドは苦笑を浮かべた。

呪力移動呪文で冥竜王ヴェルザーの元へ直接向かったブラッドを待つて居たのは白い世界であった。

雲でできたようなふわふわとした白い大地。青い空を背景に広がるそれはまさに天上の景色といえる。

その中に建てられた白い牢を思わせる一室。そこから景色を見回しブラッドは一つ頷いた。

冥竜王ヴェルザーの魂の元へ直接転移する呪文、呪力移動呪文は無事に成功したようだ。

冥竜王ヴェルザーはかつて瘴気を封印していた折にその魂まで瘴気に浸っていた。

彼だからこそ溶かされずに済んでいたが、それでもその魂にはブラッドの一部とも言える瘴気がこびりついている。

呪力移動呪文はその瘴気を出入り口にして移動するのだ。

次元も結界も関係ない。そこに瘴気があればどこでも行ける。逆にいえば瘴気があるところに彼は存在できる。呪力移動呪文はそういう呪文だ。

そしてそれは、純粋な魔族でなく特異な存在である呪怨王ブラッドだからこそできるのだ。

「……んでどこどこ？ 天界なのはわかるけど、空気綺麗すぎて俺死ぬかも」

『死ぬ。天界の連中が言うには戒めの塔とか言うらしい。それと気持ち悪い故、さっさと出ぬか』

ちなみに今のブラッドは石像になっているヴェルザーの腹から突き出るように出現している。

本人としても嫌だったのかさつきと這い出て、服の埃を払うかのように叩いた。赤い目が警戒するように周りを見回した。

今のところ、何か近づいてくるような気配はないようだった。

「んじやま、改めて久しぶりだなヴェルザー」

『帰れ黒へドロ』

ど直球な罵倒であった。

石像であるはずのヴェルザーの額に青筋が浮かび上がったようにすら見える怒りようである。

勿論錯覚であるが、内心では間違いなくそうなっているのだろう。

取り付く島もない冥竜王の辛辣な言葉に、ブラッドはバツが悪そうに後頭部に手を当てた。

「……酷くないか？ 一応お前の部下に助けを求められて来たんだけど」

『死神（キル）には呪わせろとだけ伝えたはずだ。直接助けに来いとは誰も言っていないぞ歩く危険物。天界ごと爆破して死滅しろ。お前だけ滅びるのも可』

「ひどすぎる!?! さては機嫌最悪だなおめー!?!」

遠慮なく浴びせられる罵倒の言葉にブラッドは額に青筋を浮かべる。しかし冥竜王の口は止まらない。

『当たり前だ！ 転生を待つ無防備な瞬間を封印された上に、それが敗北であると認定されて石化まで被ったのだぞ！』

あとお前ももう少し呪いの認定を甘くしろ！ ただでさえ天界の封印が硬い上にお前の呪いまで加わって流石の俺様も動けぬのだ！』

「いやお前……童の騎士に負けてるし封印まで食らって敗者じゃないって言いたいのか……？」

『この俺は冥竜王だぞ。不死の魂を持つ俺様に敗北はない!!』

ブラッドはとりあえず冥竜王の腹を蹴った。

石特有の硬い感触と反動が帰って来たが、むしろくしゃしたのだ。蹴らざるを得なかった。

「とりあえず言いたいことは山ほどあるけど帰るぞうっかり竜」

『誰がうっかりドラゴンか!』

「追い詰められて黒の核晶に魔法力ぶっこんで自分の大陸ごと吹っ飛ばした奴がうっかりじゃないとでも!？」

『……うっかりではない。力加減を少し間違えたただけだ馬鹿め』

それを人、うっかりという。

先ほどまでの勢いを落とした冥竜王にため息をついてブラッドは帰還の準備に入る

べく動き出した。

その赤い背を見てヴェルザーはつぶやいた。

『……どうしてここに来た。お前は俺様とバーンの決着が着くまで静観するはずだったろう』

「急にどうしたよしおらしい。気持ち悪いぞ」

『茶化すな悪食。答えろ』

「そんなの、いうまでもないだろう」

そう言ってブラッドは困ったような笑みを浮かべた。

冥竜王の言葉に遠い日のことが思い出される。

それはかつていたとある魔族の最期の日。

今まで漠然と動き、意思という意味を持たなかった彼が初めて明確な意識を得た日のことだ。

「お前のことは頼まれちゃってるんだから、仕方ない」

天界を封じる結界に小さな穴を開け終え、かつて託された思いを呟く。

『……余計なことを』

「諦めろ。頼み事もそうだがお前は遠い昔俺を生かしてくれた。滅ぼすこともできたのに育てる道を選んでくれた。

なら、助けられない選択肢は始めからないんだ」

真摯な思いを湛えた赤い目が灰色に染まった竜の黄色い目と重なった。

冥竜王は押し黙ったままであった。

そんな古い知己に言葉を重ねるべくブラッドは口を開いたが——その視線はすぐに険しいものに変わった。

ブラッドは己に向けて放たれた光の砲弾をステップで回避すると、それが飛んで来た方向を睨みつけた。

「人の話中に割り込むなよ。マナー違反だぜ?」

「邪悪なるものを感じ。冥竜王の封印に未だ異常は見られず。しかし天界の守護結界に穴を発見。浄化を開始する」

白い衣をまとった男が機械的な口調で告げる。

一見人間のようだがその背には人間にはない翼が生えていた。

その姿を見てブラッドは天界の精霊か、とあたりをつける。

男の周囲には九人の精霊たちがそれぞれ弓矢と槍を構えており、戦闘要員であることは見て取れる。

包囲完了と言いたげな彼らの様子を目にし、ブラッドは小さくため息をついた。

「大歓迎だな。か弱い精霊にしちゃあ——立派な装備してるじゃないか」

『ああ、アレには全て呪文封じのまじないが掛けられている。まあ俺様が暴れたら追加されたものだがな』

「なるほど。やっぱり一度くたばれヴェルザー！」

心なしか得意げに見える冥竜王を罵倒しつつ、ブラッドは全力で回避に走った。

本来呪文封じは実力差のある相手には通じないが、天界の精霊たちが使うそれは違う。

原理不明の不思議な力で実力差を無視して封印をしてくるのだ。

そのため本来なら魂だけの無防備な状態であろうと、強大な力で対抗できる冥竜王ヴェルザーも封印されてしまっているのだ。

「流石に俺まで封印される訳にはいかないしな」

そんなことになれば弟が死ぬ。多忙すぎて。

過労死する魔族という歴史上初の偉業を迎えそうな弟のことを考えつつブラッドは包囲網をちらりと見た。

槍持ち五人の弓持ち五人。

そして槍持ちの精霊の中に一人だけ剣を携えている者がいる。

最初に口を挟んだ精霊だ。

(あいつが隊長格だな。増援されたら少しは面倒か)



襲いかかる槍持ちの精霊の影と交差するように動くと、ブラッドは冥竜王の背に飛んだ。

文句は無視しそこからジャンプして一回転。柱の陰に着地する。

弓矢の直撃を食らった冥竜王は怒りの咆哮を上げていたが、石になっただけなので何も問題はなかった。

「まあ全部消してしまえばどうでもいいな」

間髪入れずに放たれる矢の嵐を駆け抜けながら、ブラッドは一つ指を鳴らした。

その進行方向に待ち構えている槍持ちの精霊四人はその隙を逃さず槍を突く。

しかしそれがブラッドに突き刺さることはなかった。

「精霊喰いは初めてだが、問題ないだろ」

彼らの影から飛び出した瘴気が、唸りを上げて四人を飲み込んだのだ。

突然の事態に彼らは断末魔すら残さず天界から消え去った。

ブラッドは舌舐めずりをすると、小さくご馳走さま、と呟いた。

「ひっ!？」

その様子を見て、弓を構えていた一人の精霊が悲鳴をあげる。

その精霊を庇うように隊長格の精霊は前に立ち、呪文を放った。

「邪悪なる意思よ、退け……マホカトール!」

部屋全体を包み込むほどの大きな五芒星の魔法陣が発動する。影に仕込んだ瘴気が浄化されたのを感じとり、ブラッドは眉間に皺を寄せた。

隊長格の精霊は続けて檄を飛ばした。

「陣形を組め。ミナカトールの準備を進めよ！」

「む」

『ほう。お前に対して的確な対応だな』

破邪呪文はブラッド最大の天敵である。

しかしブラッドは五芒星を描くように散る五人の弓兵を見やると、何もせずに首筋に手を当てた。

「それ痛いんだよなあ……まあでも、無意味なことか」

そのまま首をひと撫でし横薙ぎに払う。

掻き切られた首筋から跳ね上がるように黒い血が噴出し、一気に霧状になって広がる。

生物として致命傷のそれを気にせずブラッドは指揮を振るうように腕を上げた。

その異様な姿に精霊たちは動揺の声を漏らす。

「狼狽えるな！ 破邪の結界の中ではいかなる邪悪も無力！ 神を信じ封ずるのだ！」

「(高説)苦勞さん」

ブラッドの指先が隊長格の精霊を示す。

その動きに呼応するように黒い霧がマホカトールの聖なる結界と接触する。

ーだが結界は一瞬の拮抗のち粉碎、否、溶解されてしまった。

それとほぼ同時に術者であった隊長格の精霊は断末魔の絶叫を上げ、その姿は溶け落ちた。

あまりに唐突に起きた出来事に、弓兵の精霊の一人が悲鳴のような声で呻いた。

「馬鹿な……貴様は一体なんなのだ。まともな魔族じゃない、否、魔族ですらない化け物か……！」

「何ってそりやお前。その通りの化け物に決まってるだろ」

揶揄うような軽い声音を最後に、その精霊の意識は途絶えた。

仲間が次々と消えていく様を見つづけ、最初に悲鳴を上げた精霊は声もなくただ震えていた。

ブラッドが噴出した黒い血はまるで獲物を求める獣のように揺らめき、精霊に近づく。

すっかり怯えきったその精霊を見つけ、ブラッドは苦笑を浮かべた。

「大体だなあ、俺が生まれた最大の原因ってお前から天界の浅慮なんだぞ」

勇氣を出して弓矢を射った精霊が放った矢ごと黒い霧に飲み込まれた。

「まず理不尽に恵みを奪われた魔族達の恐怖や憎悪、怒りや哀しみ。そういう負の感情が積もりに積もって瘴気が生まれた」

破邪呪文で抵抗しようとした一人が溶かされた。

「その瘴気はよりにもよって魔法力を無尽蔵に蓄える性質を持つ黒魔晶に取り憑いてさあ大変。蓄える性質を飢えと解釈して、生き物という生き物に襲いかかりまくること数百年。冥竜によって一時的に封印される程の暴れぶり」

誇りを捨て、逃げようとした一人が溶かされた。

「たまたま封印結界に迷い込んだ死にかけ貧弱魔族と同化してやつと明確な意識と理性が発生したわけ。」

それが今の俺な訳だが、今の状況は大体のお前らの自業自得。おーけー?」

それこそが呪怨王ブラッドの正体。

黒魔晶を核に持つ、魔族たちの負の感情から生まれた怨念の化身だ。

話を聞いて更に怯えきつた最後の精霊を飲み込み、ブラッドは口を拭う。そして改めてヴェルザーに向き直った。

「説明しても食べたら意味なかったな」

『当たり前だろうこの悪食悪童』

「確かにお前よりは年下だけど俺を悪童呼ばわりするのはお前ぐらいだわー……」

同化した貧弱魔族が若かったため見た目は若いが、この呪怨王。実年齢は万を超えていたりする。

もつとも冥竜王は更に歳を重ねているので悪童呼ばわりは残当である。

自傷した首を癒すブラッドを見て、冥竜王は盛大にため息をついた。

『アイツが同化して何がどうしてこんな性格になった』

「そんなの俺にだって分からん。分からんが俺は今の俺でいいと思うぞ」

ブラッドは本気でそう思った。今のブラッドには弟がいて、守るべき民がいて、古い知己がいるのだから、かつての雑多な存在であった時など比較対象にもならない。

そういえば、とブラッドはここに来たもう一つの目的を思い出し口を開いた。

「お前もバーンも居なくなっただせいで魔界が未だかつてなく不穏なのは分かっているか？」

『分かっているわ愚か者。その口ぶりではお前が直接ここに来たのは集めた瘴気が限度を越えようとしてるな？』

流石に最後の知恵ある竜は長年の腐れ縁の内情に詳しかった。

「ああ。いくら俺が力として使おうが、封印に封印を重ねようが、このままじゃ百年もしない間にジオン大陸は破綻する。」

そうすれば今まで集めに集めた瘴気がどうなるか、この俺にすら予想が出来ん」

瘴気はブラッドの手足であり生まれ出た故郷だ。普通の生物には百害あつて一利なしの毒物であるそれは、ブラッドなら制御し管理することもできる。

だが増え続けるそれを制御しきれるかは話が別だ。

ただでさえ過酷な魔界の環境。その中にさらに猛毒を追加されれば今でさえ少ない魔族が絶滅してしまう。

それだけではなく、かつて暗黒闘気から生まれたものがあるように、そしてブラッドが生まれたように、新しい化け物が生まれなくても限らないのだ。

何もブラッドがジオン大陸に瘴気を集めているのは自分の手足とし、民を守るためだけではない。

自分以上の化け物が生まれないうために管理すべく集めているのだ。

だがそれも限界に近いのが現状だ。

「新しい封印具が出来るにも時間がかかる。折角俺が外に出て来たんだから、責任は取らせないと」

『……俺様は分かっているぞ。お前。絶対。来るまでに遊んで来ただろう』

冥竜王の冷めた視線に明後日を向く呪怨王。

腐れ縁は伊達ではなかつた。

ブラッドはそんな視線から逃げるように懐に手を突っ込み、六つの黒い石を取り出した。

それを部屋の隅六ヶ所に埋め込み、外へつながる窓から白い世界へ飛び立つ。

「じゃ、そういう訳でお前先に帰すから。多少乱暴だが、まあ許せ」

『待て。どこに飛ばすつもりだ。誠に遺憾ながら俺様の領地はもうないぞ』

「ジオンのどつかでいいだろ……あ、そうだ」

ブラッドはいいことを思いついたとばかりにニヤリと口元を釣り上げた。

「転移先は黒晶山脈な。何しろ俺が保険で渡しといた危険物を使うくらい好きなんだから、問題ないよなあ?」

『ちよつと待て愚か者があ!!!』

本気で焦ったような冥竜王の声が響く。

補足すると黒晶山脈とはジオン大陸に存在する黒魔晶の産地である。

当然そこも瘴気に塗れており、ブラッドがその気になれば黒の核晶に変化させることもできる。

つまりは危険地帯と言われるジオン大陸屈指の超危険地帯である。

『待て、落ち着け。如何に不死身の魂を持つ俺様といえど周りを爆弾に囲まれるのは背筋が凍る』

「ヴェルザー……俺は常々お前に言いたいことがあったんだ」

ブラッドは一拍置き、満面の笑みを浮かべた。

「瘴気時代に散々吹っ飛ばされた怨み、受け取れくたばれクソ冥竜！」

恩はあれどそれはそれ、これはこれ。

積年の恨みは忘れない。

呪怨王、長年の夢を果たした瞬間かつ紛れも無い本音であった。

黒い石から放たれた魔法力が部屋ごとヴェルザーを包み込む。

文句を叫ぶ冥竜王の声を背景に、黒い光は全てを包み込むと収束し小さな音を立てて消え去った。

跡には上部を削り取られた白い塔が残るのみだ。

ブラッドは汗を拭う動作をし、呟いた。

「よし面倒ごと一つ終了。あとは憎つくき神々に会うだけだな」

頂上部分がかつそりと消えた塔を見て独り言ちる。

今ので追放呪文で異常があつたことを天界も嫌でも察知するだろう。

だがブラッドにとって精霊は脅威でない。むしろその騒ぎに乗じて神々の居場所も掴めれば一石二鳥、願つたり叶つたりだ。

さあ神々の場所を突き止めるかとブラッドが動き出したその時、白い世界の青い空の



彼方に虹が瞬いた。

「んー?」

よくよく目を凝らせば、それは白い竜であった。

移動のために羽ばたく翼から虹は煌めき、まるで飛行機雲のようにその竜の道程を彩っていた。

ブラッドはその竜を知っていた。

「アレは……聖母竜マザードラゴンか……?」

かの竜は竜族の中で唯一魔界に落とされなかつた知恵ある竜だ。

竜の神に造られたと言われる、竜の騎士たちの母。そしてかの竜は神々に与する唯一の竜であると言われている。

ブラッドも噂でしか知らない存在であったが、天界で竜といえばそれしかない。

冥竜王とは真逆の真白い鱗のその竜を見つめ、ブラッドは口元を吊り上げた。

「アイツなら神々の居場所知ってるな。丁度良い」

魔法力の光がブラッドを包み込んだ。瞬間移動呪文の前兆だ。

それとは別の方向から魔法力の光がブラッドに近づいてくる。恐らくは精霊たちの増援だろう。

しかし彼等がたどり着いたその時はブラッドの姿は空の彼方へと消えていた。

## 本音をぶつけさせてください

聖母竜は深いため息をつきながら天界を飛翔していた。その脳裏にはつい先ほどのことが思い浮かんでいた。

【……放置せよ、と仰るのですか？】

【その通りだ、聖母竜よ】

自身を作った竜の神の言葉に、聖母竜は目を瞬かせた。

【神よ、何故……私がこうして貴方様達に謁見する無礼を怒っていらつしやるのですしやうか？】

【それは違う、優しき竜の女性（ひと）。我々は怒っているわけではないのだ】

人間を作った人間の神が疲れを顔に滲ませそう言った。

かつて世界をつくったばかりの時代と変わらないはずの姿の神々は、皆一様に表情に疲れを滲ませていた。

そんな神々の異様な様子に聖母竜は心配そうに目を揺らした。

【……我々はね、少し疲れてしまったのだよ。創世から変わらないこの世界の状態に】

神を代表して答えたのは魔族の神であった。

人間、魔族、竜……この三種族は神々によつて作られてから、世界の覇権を得るべく血で血を洗う戦争ばかり起こしていた。

それを疎ましく思つた神々は肅清する存在が必要と考え、竜の騎士を生み出し調停役としたのだ。

だがその真意は決して血で血を洗う肅清のためだけではない。

争いを収めることで三つの種族が手を取り合い、平和的に世界を発展させていくことが望みだった。

今では知る者は三柱の神々と、聖母竜を含む知恵ある竜だけの古い話だ。

「あまりにも変わらない世界に嘆いた涙も枯れ果てようとしている。何もする気が起きない……、否、できる気がしないとさえいひのかな」

「更に言うなら長い歴史の中で我らの力も着実に衰えている。もはや、貴女の子に力で打ち勝つことができないほどに」

その言葉は聖母竜にとつて衝撃であった。

彼女は眠ることこそ多かったが、創世より神に仕えて来たのだ。

神の力の偉大さ、強大さは誰よりも深く知っている。勿論我が子の力も。

聖母竜の衝撃を察したのか、人間の神は苦笑を浮かべた。

「我々には最早どうすることもできない。それにそこには貴女の子もいるのだろうか？」

万一などないさ」

【ですが、神よ……先の冥竜王ヴェルザーといい、魔界の勢力は着実に我が子の力に迫っています。万一がないなど……】

【それでも我々には祈ることしかできないのだ、マザードラゴン】  
血を吐くような細かい声であった。

三つの目を苦渋に歪ませた魔族の神は続けて言った。

【それに、魔界を閉じることにした今、我々には他に力を割く余裕はない】  
【え？】

今度こそ驚きで聖母竜の身体は動きを止めた。その言葉に続けて竜の神も聖母竜に告げる。

【既に知恵ある竜はヴェルザーを残せば貴女以外に無く、魔族もまたその数を減らしている今、かつての争いは起きないと我々は判断した】

【最後の力で竜族と魔族を消し去り、か弱い人間達に地上を任せれば今度こそ平和な世界が続くはずだ】

人間の神は祈るように手を組み、どこへとも知れぬ未来へ視線を向けた。  
かつて全てを作った神々はもう限界だったのだ。

争いの続く世界を見守り続けることが、ひたすらに苦しい。

姿形の違う神々であったが、その想いは共通していた。

【我々は己の分身となる種族を作り、世界の発展を目指した。だというのにどの種族も覇権を目指し争うばかり】

【反省を促すために魔界に落としてなお魔族と竜族は争いを続ける始末。

争いをなくすために貴女と竜の騎士を作り出したのに、それも逆効果になりつつある】

【三つの種族がこのまま在れば、いずれは世界そのものを破壊してしまうだろう。それをさせないためには、一つのみを残しあとは消しさらなければならぬ】

疲れ果てた神の言葉に聖母竜は反論した。

それではあまりにも魔族と竜族が不憫ではないのか。神々のように、違う種族が手を取り合い生きていく道はないのか、と。

三種族の特徴を併せ持つ子を持つ母ゆえに、聖母竜はそれを聞かなくては気が済まなかった。

白竜の切実な思いを込めた質問に、神々はそれぞれこそ諦観の籠った視線で答えた。

【……我々として本意ではない。だが、何をしようが、時を置いて待とうが、皆、争いをやめなかつた】

【魔族と竜族を消し去れば、強者がいなくなれば世界は平和に保たれる。思えば力によ

る平和こそ間違っていたのだ」

【聖母竜よ。貴女と子供達には随分長い間負担をかけた。だが、もうそれも止めよう。聞けば今の竜の騎士は歴代よりも人に近いそうではないか。これを機に、あの子にも戦とは関係のない生を与えるのも良いだろう】

そう言つて神々は聖母竜に帰り道を示した。

もう話すことはないだろう。

そんな神々の様子を憔悴しきつた表情で聖母竜は見つめ続けた。

考え直して欲しい。神が作ったものを否定するのはあまりにも悲しすぎる。

聖母竜は神々にそう訴え続けたが、神々が彼女に向けて口を開くことはもうなかった。

天界のさらに高みにある三つの神々が住まう領域。神の世界とも言われるそこから聖母竜が飛び立ったのは、到着した日から数日後。つまりはつい先ほどのことであつた。

（世界が平和になるのは良いことです。けれど何でしょう、この胸につかえるものは……）

白い翼が空を切る中、聖母竜は胸に走る痛み、心を痛めていた。

神の使いでもある彼女は神の決定には逆らえない。

それでも説得を粘ったのは、どうしてもそれが正しいことなのか分からなかったからだ。

本当に魔族と竜族を消してしまっているのか。

確かに彼らは強者であるが、その全てを一括りに考えてしまっても良いのか。

本当に、強者だけを消すことで世界は平和になるのか？

脳裏に浮かんだ疑念に聖母竜は首を振った。

(いいえ、決定してしまったことはもう仕方がないのです。仕方が、ないので……)

自分にそう言い聞かせるように聖母竜は黄金の瞳をぎゅつと閉ざした。

もう考えたくない。

自らを悩ます疑問に蓋をして、神の使いは頭を切り替えて我が子の元へ行くことを決意する。

疑念から逃げるためだけではない。ただ純粋に子を思う母の気持ちがあるにすぎないからだ。

その翼には自然と力がこもっていた。

聖なる御使いとしてあの邪悪な気配と戦う我が子が心配でならない。

聖母竜の能力として竜の騎士が生きることが分かっていることが分かっていても、マザーは子ども  
ことが心配で堪らなかった。

だから、彼女自身については油断していたのだ。

地上へ向かう門へ向かっていたそんな無防備な身体を、黒い槍が貫いた。

「……………ツツ!?」

広い天界に聖母竜の絶叫が響き渡る。

その声に反応し黒い槍が脈動するかのように蠢いた。

「……………流石に精霊とは格が違うな、聖母竜マザードラゴン。瘴気の槍で身体を貫いたの  
に溶けないどころか絶命もしないか」

聖母竜の腹部を貫通した黒い槍から赤い髪の魔族の青年が出現する。

冥竜王ヴェルザーを解放したばかりの呪怨王ブラッドだ。

ブラッドは感心したように槍を引き抜くと、苦痛に歪む聖母竜の顔を見て微笑んだ。

隠すことのない邪悪な気配に聖母竜は目を見開いた。

「貴方は……………泉に触れた邪悪な気配と同じ……………!?!」

「ふうん? 泉から見えてたのか。流石に神の使い、聖母竜マザードラゴン。そういう  
気配には敏感みたいだな」

ブラッドは影から呼び出した瘴気を使い大きな手を形作ると、聖母竜の長い首を掴み



上げた。

聖母竜は接触部から侵食してくる瘴気の苦痛に呻き声をあげる。

「苦しいかい？ 俺の持つ瘴気は神々と関わりが深いほど呪詛も深くなる。お前ほどの存在になれば魂を焼かれる苦痛だろうよ」

「貴方……何者……っ！」

「呪怨王ブラッド。お前達天界への恨みを晴らす者だよ」

微笑んだまま答える呪怨王だが、その目は全く笑っていないかった。

常とはまるで違う、凍てついたように冷たい赤い目が聖母竜の黄金と交差する。聖母竜の首を握る力を強められ、鱗にヒビが入ったような音が響いた。

「こちとら魔界に押し込められて数千年……もう数万年か、血で血を洗う闘争を繰り返させられたんだ。いい加減にお前達天界の浅慮は頭に来る。」

俺みたいな理外の存在がこれ以上生まれる前に神々に会わせろ」

「理外の存在……っ。まさか、貴方は死者の念から生まれた？ だからこんな雑多な邪念が混ざり合っているのですね……!?!」

「大正解も大正解。この俺は自分で言うのも変だがそう言う存在の割に大変まともな部類だ。分かったら穏便な内にさっさと神に会わせろ」

「いいえ会わせません！ 神に仕える者として、邪悪なものを会わせるわけには参りま

せん……！」

当然といえば当然のことだが断る聖母竜。

決して譲らないと全身で主張する竜の様子に、ブラッドは一つため息をついた。

鱗の折れる音が響き渡る。

それでも変わらない聖母竜の様子を見て呪怨王は悲しそうに呟いた。

「……俺だつて好きで邪悪に生まれたわけじゃないんだけどな」

もはや対話は望めない。そう判断したブラッドは飛翔呪文で飛び上がり徐ろに聖母竜の頭を掴んだ。

首を侵す瘴気とは別に手から聖母竜の身体へ瘴気が侵食し、聖母竜の視界が明滅する。

白目を繰り返す神の使いの様子を気にもとめず、ブラッドは侵食を続ける。神の居場所を知るために聖母竜の記憶を奪うつもりなのだ。

「教えないなら無理やり頂く。信じ難い激痛だろうが恨むなよ……！」  
その言葉が合図であつた。

頭を襲う筆舌に尽くし難い激痛に、聖母竜は絶叫を上げるしかなかった。

苦痛に揺らぐ竜の姿を見て、ブラッドの赤い目が爛々と煌めいた。

「見渡す限り竜の騎士の生涯ばかり。以外と子煩悩なんだなお母さん？」

「……!! ……、……!!」

「逃げようとしても無駄だ。此処まで侵食しちまえばヴェルザー同様、俺はお前がどこにいたって追いかけられる。絶対逃がさない。俺は執念深いんだ」

ギリ、と瘴氣の手に力が籠った。呪怨王ブラッドは聖母竜のを真つ向から睨みつけ、言った。

「舐めるなよ神の使い」

底冷えるような声音であつた。

「お前達が魔界なんぞに魔族と竜族を押し込めたせいでどれだけ彼らが苦しんだ？ 太陽のない、恵みがない、安全がない世界がどれだけ精神を歪めたと思ってる？」

現状を打破しようと動いたものは皆竜の騎士に殺された。魔族にだって弱い奴らは沢山いるのに、神々は何もしなかつた。

憎まないはずがない。恨まないはずがない。呪わないはずがない。だから俺は此処に来たんだ。

この無念を伝えるために！」

血を吐くような表情で語られたそれは呪怨王ブラッドの紛れもない本音だった。煮詰められて沈殿した天界への怨念の化身としての本性が顔を覗かせ始めているのだ。

身体を侵す瘴氣を通じその殺意を直接的に受け取った聖母竜は、呪怨王の在り方に悲

しみの念を抱いた。

存在としては間違いないく邪悪で、今まさに自身を殺して神に仇なそうとしているのにおかしな話ではあるが、聖母竜には彼の姿が泣いている子どもにしか見えなかった。

自由の効かなくなりつつある身体を動かし、赤い魔族の頭を扱うように撫でる。

上手く身体が動かず手を乗せるような形になってしまったが、瘴気を通じて聖母竜の意図が見えていた呪怨王は驚愕に目を見開いた。

「……どうしてお前が悲しむんだ？　俺はお前にとっても酷いことをしている。神の居場所がわかれば、お前の主人にもこれから酷いことをするんだぞ。

分からない。俺にはお前の行動が理解できない」

（私も、どうしてあなたにこうしてしまったのかはわかりません）

最早声も出せないほど衰弱した聖母竜は内心で呟いた。

神の使いとして、竜の騎士の母として、自分を犠牲にしても彼をここで食い止める意思は確かにあるのに、それとは別のところで心が動いたのだろうか。

頭に乗せていた手はずでに力なく垂れ下がり、もう痛覚すらない。そんな状態にしたのは彼なのに、聖母竜は不思議と恨みを抱かなかつた。

不意に先の疑念が浮かび上がる。

蓋をしたはずのそれを思い浮かべ、聖母竜は納得した。

(……邪悪な存在ですが、彼が魔族達を想っているのは十分わかりました。だからなのでしようね……)

段々と意識が闇に閉ざされていく中で聖母竜は我が子のことを考えた。

願わくば、神が決断を下しても我が子が幸せであるようにと。

神の使いとしてではなく母としての思考を最後に聖母竜の意識は闇に包まれた。

力を失った聖母竜の身体を投げ捨てブラッドは小さく息をついた。

どうしても彼女の最後の思考が理解できなかったのだ。

天界に来てからというもの清浄な空気のダメージ以上に、内を暴れまわる瘴気のせいで精神力が削れている。それに加えて聖母竜の言動。

胃のあたりがじくりと痛んだような気さえしていた。

(……今考えるのはやめとこう。下手に気を抜けば暴走しかねんしな)

影に戻らず未だに聖母竜を狙う瘴気を押さえつけたため息をつく。元が天界への恨みつらみの分、それが発散できる対象が目の前にいれば当然のことだった。

内で暴れまわる本能とも言える欲求を理性で押さえつけ、記憶の読み取りを続ける。

相変わらず竜の騎士の生涯ばかりが映された記憶に辟易としながらも、ブラッドは一番新しい記憶を読み取りついに見つけた。

「……魔界を閉じる?」

それは聖母竜と神々の先のやりとりであった。

不穏な言葉から始まるその記憶を念入りに読み取っていく。理性は見ないほうがいいと警鐘を鳴らしていたが、それでも見なければならぬとブラッドは感じていた。

そして彼は見た。

神々の苦悩。竜の騎士の真の意味。世界への嘆き。

その全てが鮮明に脳裏に叩き込まれ、ブラッドは目を見開いたまま頭に手を当てた。

「ふざけるな……」

静かな怒気と共に瘴気が溢れ出る。

彼自身の怒りの感情にその身を作る怨念が呼応しているのだ。

「ふざけるな、ふざけるなあつ!!」

怒りと共に本能を押しさえつけていた理性が蒸発していく。

否、ブラッドはもう押しさえつける気はなかった。

ひたすらに身勝手な神々への怒りが爆発し続ける。

何が疲れたのだらう。何が仕方ないのだらう。全てを「そう」創ったのは彼らなのに、  
どうしてそんなことを言うのだらう。

今まで我慢に我慢を重ねて来た怨念達がそう限界を訴える。

ブラッドはもう止めなかった。

呪怨王として内に秘めた想いを抱え、神々の住まう天上を睨みつける。もう我慢の限界だった。

大魔王が、冥竜王が神々を憎み嫌う真の理由をようやく実感として理解した呪怨王は移動呪文のために魔法力を身に纏う。

その彼を囲うように武装した精霊達が現れた。

「見つけたぞ侵入者！」

「ああ、聖母竜！　なんと酷いことを……」

「邪魔だ」

騒ぎ立てる精霊達に目もくれず呪怨王は瘴気をけしかけた。

悲鳴と断末魔が背後から響き渡るがそれは彼に届かない。

再び瞬間移動呪文を発動しようと魔法力が身体を包み込む。天を睨みつける赤い目のその先に、何があるのか気づいた精霊の一人が呪怨王の身体に取り付いた。

「神々のところに行くつもりだろうがさせないよ！」

先ほどの精霊とは違い身を守る防具でもつけて来たのか、その精霊は皮膚に火傷のよ  
うな傷を負うばかりで瞬時に溶かされる様子はない。

ブラッドは鬱陶しげに髪の一部を赤い瘴気に変化させるとその精霊を引き離した。

その時にわずかにできた隙があつたのだろう。

いつのまにか増えていた五人の精霊達が五芒星を組み、その呪文を発動していた。

『邪悪なる全てを封じる力よ、今こそ輝きとならん。神の加護を此処に！ 大破邪呪文（ミナカトル）！』

五人を起点とした光の柱が立ち上がる。

地上では遙か昔に失われた大破邪呪文が、邪悪の化身である呪怨王を拘束すべく輝きを強めた。

呪文の発動と同時に身を焼くような激痛がブラッドに走る。

けれどブラッドはもうそれに反応する気は無かった。

ひたすらに目の前の精霊達が邪魔であつた。

「……どうもこいつも人を怒らせるのが上手なやつだなあ天界の奴って」

心臓の位置をノックするように叩いてブラッドはそれを取り出した。

胸の周りが赤い瘴気に変化し崩れ落ちるかのように穴が空き、そこから取り出されたのは紫紺に脈打つ丸い珠であつた。

その珠からは絶え間なく黒い靄が噴出しており、それは時に無数の人影を作つては消えていく。

どれもこれも無念、恐怖、憎悪に満ちたおぞましい表情を浮かべており、その全てが



精霊達を光の無い目で見つめていた。

そんな悍ましいものに精霊達が警戒しないわけもなく、一斉に呪怨王から距離を取る。

そんな精霊達の様子を見てブラッドは鼻で笑った。

「お前達、黒の核晶って知ってるか？」

放たれた言葉に精霊達は凍りついた。

その忌まわしい名前は冥竜王が竜の騎士に使用した超爆弾。

一つの大陸を消滅させてなお有り余る破壊力を宿す、禁忌の代物。

神々にさえその危険性を知らしめた最悪の呪物。

ミナカトールを張っていた精霊達でさえその顔を恐怖に歪め逃げ出す中、呪怨王ブラッドは手にした珠を握りしめた。

空を見上げ、天界の中のさらに高次元に住む神々の姿を幻視し睨みつける。

「……住処である天界をこれで荒らせば魔界を閉ざすなんて馬鹿な真似に力を入れるなんてできないだろう。

もちろん俺もただではすまないが、何。身体はまた再生すればいいだけの話だ。何の問題もない」

今ブラッドが握りしめているそれは彼の身体を形作る核といっても良いものであつ

た。

その分瘴気は凝縮されており通常は破壊のみをもたらす黒の核晶の特徴に加え、爆発が起こった後は放たれた瘴気が怨念となり暴れまわるのだ。

か弱い精霊達では到底処理できないそれは神々が直接動くしかない。

ブラッドはそれを起動すべく魔法力を込め始める。

そんな彼の脳裏に響く声があった。

『ー理の外に在る君よ、君はなぜそうまでする?』

ブラッドの中の古い魔族の記憶が呼びかける。これは魔族の神の声であると。

次いで年老いた老人のような声が響きわたった。

『それは貴方の心臓そのものだろう。確かにそれを使われては我々は魔界を閉じることの後回しにするしかない』

『なぜそうまでして魔界のために動く? 怨念から生まれたものよ、お前の行動原理は理解できない』

『……ようやく声が届いたと思えばそれが第一声か、神々』

爆発のために輝きを増して行く黒の核晶を握りしめ、ブラッドは天を見上げた。

そこは雲ひとつない青い空であったがブラッドの目には確かに人間の神、魔族の神、竜の神の姿が映し出されていた。

既に魔法力は込め終わり爆発まで幾ばくの猶予もない。

そんな中でブラッドは睨みつけるように天を見つめ、神々に語りかけた。

「俺のことはいい。どうせ滅びることのない存在だ。心臓の一つ二つ失った程度で消えるなら、とうの昔に消し去られていたんだからな」

『理の外に在る君よ。今の心臓を壊せば今の君は消えるはずだろうか？ それは恐ろしくないのか？』

「全てを創った神が問いばかりだな。俺みたいな化け物が今更死を恐れるかよ」

『……』

ブラッドの言葉に折れることのない意思を感じたのか、神々は沈黙する。

困惑しているのだろう。声こそないが繋がる念話から戸惑いの感情を感じ取り、ブラッドは小さく息をついた。

今ならどうしても問いたかったことが問えそうだと、思ったのだ。

「なあ……人間の神、竜族の神、そして魔族の神よ。お前達は魔界の惨状を見て何も思わなかったのか？ 魔族と竜族にも救いを与えるべきと思わなかったのか？」

『……我々は魔族と竜族を魔界に落とすことは後悔していない。それこそが地上の、我らの創った最も美しい世界を平和に保つ方法だと思っただから』

「そうか。それがお前達の答えか。残念だ」

心底失望したような呪怨王の声音を最後に。  
黒の核晶は起動を果たし、天界は黒い閃光に包まれた。

## 第三勢力はお疲れのようです

大魔王、天魔の塔。

それは大魔王バーンが主城とする白亜の塔だ。

今は死の大地というカモフラージュに隠されたその中で、ミストバーンは暗黒に閉ざされた顔を天へ向けた。

『……大魔王様。どうやら奴は黒の核晶を使った模様です』

「報告ご苦労。こちらに影響がないということは魔界……否、天界で爆発させたのだから。誘爆するまでもなかったか」

ブラッドが大魔王と久しぶりに通信したあの時、大魔王はミストバーンを通じて自身の魔法力を彼に紛れ込ませていたのだ。

数千年を生きる大魔王は当然ブラッドの正体を知っている。

彼を構成する中に黒の核晶があることも知っており、そのために呪怨王には早く魔界に戻って欲しかったのだ。

「まあ、奴の性質上死んでいないだろう。危険物を処理する手間が省けて何よりだ」

それにしても相変わらずの危険物ぶりだな、と大魔王バーンはワインを片手に目を細

めた。

魔界における勢力の中で最も穏健派なのは呪怨王だ。だが同時に天界への想いが最も拗れているのも呪怨王だ。

彼を構成するのは天界を憎む全ての想念のためこと天界に関係することについては沸点が非常に低いのだ。

呪いと怨念の化身ゆえにそれを律するため呪怨王は努めて明るく振舞っているがふとした拍子に惨事を起こす。

歩く大災害と言われるのも尤もである。

「思い返せば千年前は手痛い目にあつたな。黒の核晶が表に出たのもその頃か」

『……恐れながら大魔王様。そのお話は……』

「ふふ、お前にとつては苦い思い出であつたかミストバーン」

沈黙で答える魔影の姿に微笑し、大魔王は千年前の出来事を思い出した。

それはかつて呪怨王の名を持つ前のブラッドに勧誘を掛けた時のことだ。

冥竜王との決着のため少しでも力ある存在を探し求めていた大魔王は、悪名高い歩く大災害を配下にしようと考えた。

精鋭も精鋭の魔族六名とミストバーンを連れ交渉に出向いたその時、ブラッドはといえば親を亡くした魔族の子供を拾い集めていた。

悪名高い噂とは似ても似つかぬ穏やかなその魔族の様子に大魔王は正直に言つて少々落胆していた。

けれど実力主義である彼はそれ以上にブラッドを引き入れるメリットを考えこつた。

余の元に来れば彼等の庇護を約束しよう。無論、計画を果たした後でもそれは変わらない、と。

その言葉に今とは少しだけ違う姿をしたブラッドは揺れに揺れた。当然である。

当時の彼は弱小魔族の保護をしていたものの彼らを養い続けられるものがない。

更にいえば彼を構成する怨念達が大魔王バーンに敬意を払い従属を良しとする声も大きかったのだ。

そんな悩みに悩む歩く大災害の姿に配下の一人がこう呟いた。

「……この魔界において弱者を守るとはまた奇特な奴だな。まるで天界や地上の人間のようだ」

その配下は同僚に向けてこつそりと呟いたつもりだったのだろう。

世間話のつもりで天界という言葉を出したその時、彼の影から黒い槍が飛び出し心臓と頭部を貫いていた。

それを認識すると同時に残り五人の部下とミストバーンはそれぞれ敵対者の排除と主人の守護に回ったが、配下の方は同様に影から飛び出す黒い槍に殺され尽くす有様。怒りを買ったことは明白なその様子に大魔王は口髭を一撫でした。

結果から言えばこの交渉は大魔王の長い生涯の中でも珍しい大失敗に終わった。

配下の軽口に怒り心頭であったブラッドと交戦し互いの実力を確かめるまではよかつたものの、このままでは決着がつかないと業を煮やしたブラッドはその心臓であった黒の核晶を遠慮なく爆破したのだ。

既存の呪文を超える破壊力にその後には襲いかかる怨念達の群れ。ミストバーンと大魔王でなければ確実に死んでいただろう、大陸の一つが吹き飛んだ大事件。

それが黒の核晶が伝説の超爆弾と呼ばれるようになった経緯だ。

主人の手を煩わせてしまったというミストバーンにとって苦い記憶でもある。

『奴が不死身でなければすぐにでも始末いたしますのに……!』

「構わぬ。結局のところ奴は余にもヴェルザーにも付かなかつた。そのお陰で今の勢力バランスが保たれていると考えればアレは必要なことだった」

『……流石は大魔王様です』

寛大な主人の言葉にミストバーンは恭しく跪いた。

その敬意を当然のものとして受け止めながら大魔王バーンは内心で呟いた。



（そう、奴は勢力バランスを崩すことを望まない。だがそれは決して天界に対し萎縮しているわけではなく、むしろその逆。

対立などして牙を削ぎ合うことを良しとしないだけ）

大魔王、冥竜王、呪怨王の神々を憎む想いは同じだ。

だから彼らは互いの高い能力を買ってそれぞれのやり方でことを進めている。

呪怨王ブラッドが大魔王バーンに信頼を置いているのは怨念の化身としてその憎しみの深さを直接知っているから。

そして大魔王バーンが呪怨王ブラッドに一目置くのは己と同じか、それ以上の天界への狂おしい感情を秘めていることを理解しているから。

故に彼らは互いを警戒はしても決して邪魔はしない。

薄氷の上を歩くようなものではあったが、そこには確かに互いに対しての信頼があった。

不意に玉座を飾る水晶の一つが淡い光を帯びる。通信呪文が届いた合図だ。

水晶群の中でも一際大きな鏡のようなそれに文字が浮かびでたのを認めると、侍従でもあるミストバーンはその送り主を主人に奏上した。

『大魔王様。呪怨王からの通信が届いております』

「ほう、筆不精なやつにしては珍しい。読み上げよ」

『では失礼致します。……前略、大魔王バーンへ。俺は疲れた。暫く寝るから起こすな。それとゲートは勝手に借り、と……大魔王様に向かつて何たる無礼かあの狂気があ  
!!』

礼儀も何もない呪怨王の通信に魔影は煮え滾るような怒りを爆発させた。

次に会った時は絶対殺す。そんな意気込みさえ伝わる怒りようだ。

対して大魔王はそんな右腕の様子を見て小さく微笑んでさえた。

「奴らしい。良い、貸しにしておけ。そうさな……黒の核晶でも要求しておこう。丁度もう一つ欲しかったところだ」

『直ちに通信を送ります!』

「それにしても寝る、と言っていたか。流石に心臓爆破のダメージは大きいらしい」

千年前もそうであったことを思い出し大魔王はワインに口を付けた。

なにはともあれ不確定要素の一つが沈黙したのは良いことだ。

来たる地上爆破計画の日まで寝続けていることを願う大魔王は血のように赤いワインを飲み干した。

宵闇の空に曇天が覆いかぶさる。

いつしか降り始めていた雨の中、レアロードは感嘆のため息をついた。

「化け物ですね、貴方」

主人と同族の二人が見れば珍しい素直な賞賛だった。

茶色の瞳孔が竜の騎士バランを捉える。戦闘が始まった時とあまり変わらない騎士らしい出で立ちだ。

怪我らしい怪我もないその姿はジオン大陸きつての戦闘狂と呼ばれた彼らをして異常なものであった。

レアロードは彼の足元に転がるボルフレイムとティグルドを見やる。

ボルフレイムは右半身が消し飛ばされており、ティグルドは表面の怪我こそ少ないが闘気によるダメージで内部器官が甚大なダメージを受けていた。

両者とも普通ならとつくに死んでいるはずの致命傷。

それでも息が残っているのは彼らがジオン大陸の魔族だからだ。

かくいうレアロードも金の鬣は見る影もなく血で染まりきっており、左腕は遠く離れた場所に転がっていた。

そんな彼を竜の騎士バランは冷静な眼差しで見据えていた。

「お前達は並みの魔族よりは強かった。だが私は竜の騎士だ」

「左様で。ジオン大陸の瘴気に対応する速さといい、神に創られた戦闘兵器という肩書

きは伊達ではございませぬね」

おかげで十分楽しめました、と微笑みさえ浮かべる獅子頭の魔族。

もはや勝負はあつた。そう判断したバランは尋ねた。

「お前達の主人はどこに行つた？」

「お話しするわけがないでしょう。私はこの中では一番の忠義者と自負しておりますので」

「その二人の首を刎ねても？」

血に伏すボルフレイムとティグルドの姿を指差すバラン。

そんな竜の騎士にレアロードは首を縦に振つた。

「話になりません。寧ろ二人に関しては首を刎ねてもらつた方が助かります」

「……お前たちは仲間ではないのか？」

「ええ、仲間ですよ。けれど燃え尽きることを望む馬鹿と、果てのない向上を目指す阿呆。呪怨王様とは比較対象にすらなりません」

「ひ……どいぜ兄弟……否定、しないけど……」

「否定要素、皆無……」

虫の息で文句を呟く二人を無視し、レアロードは残つた右腕の爪を伸ばした。

「そして私は忠義に狂つた愚か者です。もちろん戦うのは大好きですよ？ 呪怨王様の

ために戦い続けることこそ私の存在意義なのですから」

全く引く様子を見せないレアロードの様子に balan はため息をついた。

真魔剛竜剣を握る手に力がこもる。

「……良いだろう。かかってくるがいい」

「では、遠慮なく……」

『それ以上の戦闘行為は不許可だレアロード』

突如虚空から響いた命令にレアロードの動きが止まる。

balan は真魔剛竜剣を手に警戒を強めた。

それはブラッドの声だ。

レアロードは雨と血に濡れた前髪を鬱陶しげに払いながら何処とも知れぬ主人に深々と首を垂れた。

「おかえりなさいませ呪怨王様。命令とあらば昂ぶるこの戦闘欲も抑えてみせませう」

『目的は終了した。帰還準備に入れ』

「はっ」

「何処だ……お前は何処にいる、赤い髪の魔族！」

balan の怒声が周囲に響き渡る。

その声に反応したのか、空に黒い穴が空く。だがそこから現れたのは赤い髪をした魔族の青年の姿ではなく、赤と黒のヘドロが入り混じったような人型の物体だった。

だがそれは紛れもなく呪怨王ブラッドその人であった。

赤い瘴気の部分が少しずつ魔族の姿を復元していく。その異常な様子に balan は思わず後ずさった。

「……なんだ？ 俺の本来の姿を見て怖気付いたか、竜の騎士」

「ああお劳しや呪怨王様!! そのお姿、まさか爆発させてしまったのですかー!」

「心配するなレアロード、たかだか心臓の一つを使っただけだ。それよりボルフレイムとティグルドの回収を優先しろ、俺の目の前で死なせる気か?」

「直ちに!」

自分も左腕を吹き飛ばされていることを忘れ急ぎ足で二人を回収するレアロード。

その間 balan は動かなかった。

否、動けなかった。

まるで全身を大蛇に締め付けられたような圧迫感が竜の騎士を襲っていたのだ。

(なぜ……なぜ身体が言うことを聞かない……!?)

「不思議そうだな。仮初めとはいえ今この地は俺の領域だぞ? 離れて知覚していない

状況ならともかく、目の前の不屈き者の動きを許すほどの俺も寛大ではない」

頭だけ元の青年の姿を復元し終えたブラッドはバランスの額をゆっくりと見据えた。

「紋章を意識するな。視線一つ動かせばこの地の人間全部呪い殺すぞ」

「……………」

その言葉に脳裏にソアラの姿が浮かび上がる balan。

彼女が死ぬーそんな悪夢のような光景は想像することすら balan にとっては猛毒であった。

少しだけ輝きを帯びていた竜の紋章はその光を収め、竜の騎士は完全に動きを止めた。

その様子を確認し呪怨王は三人の魔族に向き直る。

「行くぞ、お前たち。城に帰るまで死ぬ気で持たせろよ。俺にはもうその傷を手当てしてやる魔法力はないんだ」

「かしこまりました。……………そういえば、竜の騎士はいかがいたしましたでしょうか？」

呪怨王によって動きを封じられた竜の騎士に牙を向けるレアロード。今なら容易く殺せるだろう。

そう言いたげに血気に逸る配下の姿にようやく魔族の青年の姿に戻ったブラッドは小さく息をついた。

「もう放置でいい……………母に感謝しとけよ竜の騎士」

「……………」

聖母竜の記憶を読み取ったせいかな、はたまたあの時の劳いの手の温もりのせいなのか。

あれほど激情を抱いていたはずの竜の騎士に対して、ブラッドはもう何もする気が起きなかった。

その直後取り繕った体の内側から何かが崩れ落ちる音が聞こえ始める。

心臓である黒の核晶を失ったことと黒の核晶の爆発を至近距離で受けたダメージが今の体の崩壊という形で現れ始めたのだ。

しかしそれは表情に出さずにブラッドは小さくため息をついた。

魔族の姿を保てなくなるのは色々と面倒なのだ。

疲れ切った表情を浮かべ、ブラッドは竜の騎士に背を向けた。

「兎にも角にも俺は疲れた。帰って寝る」

「お望みのままに……と言いたいところですが親衛隊長殿が寝させてくださいますかねえ？ 魔界についた瞬間極大閃呪文（ベギラゴン）が飛んで来ても驚きませんよ」

「……………」

あの弟ならやりかねない。

そこはかたなく感じる嫌な予感を抱えながらもブラッドは瞬間移動呪文を使った。



四人の魔族の姿が消え去り六芒星結界も消滅する。それと同時に感じていた圧力全てが消え去り、バランは真魔剛竜剣を杖代わりに膝をついた。

その身体からは大量の冷や汗が流れていた。

「恐ろしい敵だった……気まぐれでこちらを見逃したのは不幸中の幸いか。あれがジオン大陸の脅威……！」

竜の紋章が輝きバランに語りかける。ここで追撃をかけるのは危険すぎると。

だが同時に粛清者としての竜の騎士の本能が邪悪を見過ごすことを良しとしない。

バランは彼らの扱う瘴気の脅威と追撃するリスクを天秤に掛ける。

（悔しいが……今の私ではあの魔族には勝てない、か）

かつて冥竜王ヴェルザーを討伐した時のように天界の援護がなければあの魔族の討伐は厳しいと竜の紋章は判断した。

歴代の見解にバランも同意し構えたままであった真魔剛竜剣を鞘に収める。

バランは荒れていた息を整え今頃悪夢から目覚めているだろう人間たちのいるアルキード王国へ目をやった。

今は守れたものがある。それでいいのだ。

竜の騎士は思考を切り替えるとすっかり荒れ果ててしまった泉周辺に小さく頭をさげ、愛する人の元へ戻るべく歩み始めた。

乾きが疼く。

瞬間移動呪文で死の大陸へ移動しながらブラッドは眩暈にも似た飢えを感じていた。心臓である黒の核晶を爆発させたせいで姿を保つのが辛くなっているのだ。

気を抜けば崩れてしまいそうな身体に不快感を感じながらも呪怨王は片手間に通信呪文を飛ばした。

現在の自分では帰還ゲートを開くこともできないため、どうしても大魔王の世話になる必要があったのだ。

「……まーた何か言われるんだろうなあ」

「ご安心ください、何があろうと私がお守りします」

「腕とその馬鹿どもが治ってからはざけよ」

唯一自由な右肩に狼頭と虎頭の魔族を乗せていたレアロードはその言葉にバツが悪そうな表情を浮かべた。

竜の騎士に手酷くやられた彼らは揃って満身創痍だ。

レアロードはまだマシであるが、ボルフレイムとティグルドが回復するまでの時間は相当長いだろう。

その分襲撃を気にしなくて良いのは気が楽であったが、やはり自分の民が傷ついていて、というのにはブラッドにとって面白いことではなかった。

(……今回は見逃したが次はないぞあの戦闘兵器。万一大魔王の計画が失敗した時は天界共々消し去る)

内心魔界のマグマのように煮えたぎった怒りを抱えながら、大魔王の魔法力の気配を頼りにブラッドたちは荒廃した大地、死の大陸へとたどり着く。

飛翔呪文を終え死の大地の荒廃した地面に足をつける。

その瞬間ブラッドの片足がドロリと形を崩したのを見てレアロードは顔色を変えた。

「王様!!」

「騒ぐな。まだ大丈夫だ」

「あつれあれー? ブラッドサマったらまあた痲癩起こしちゃったのカナー?」

不毛の大地に似つかわしくない軽快な声音が響いた。

レアロードはボルフレームとティグルドを投げ捨てると、右腕の爪を伸ばし辺りを警戒する。

投げ捨てられた二人を受け止めつつブラッドはレアロードを止めた。

「よう久しぶりだな、死神(キル)。痲癩を起こしたとは失礼なやつだ、否定しないけど」  
「ウフフ……変なところで正直者の貴方も相変わらずですねえ。ここにいてってことは

お帰りでしょう？」

岩山の陰から現れたのは道化姿の死神であった。

傍らに一つ目ピエロの相棒を連れたキルバーンは微笑みの仮面そのままに楽しげな様子であった。

その肩に乗り上げた一つ目ピエロのピロロは一つしかない目を瞬かせ言った。

「冥竜王様の件もやってくれたんでしよう？　流石に大恩ある育ての親には弱いねブラッドサマー！」

「うるさいのはこの口か。この口だな道化？」

「いひやいいひやいとーけーるー！」

素手でピロロの小さな口を縦に横に伸ばすブラッド。

その様子を羨ましそうに見つめるレアロードを横目に、鬱憤を晴らし終わったブラッドは改めてキルバーンを見据えた。

「大魔王には既に伝えたがヴェルザーにも言っとけ。寝るから絶対起こすなっつて」

「ええー？　冥竜王様は今貴方の領地じゃないですか、直接なり部下に伝言なりさせれば……っつて、そう言えば、地雷原にいたのでしたっけ」

「地雷原言うな。お前は連絡出来るだろう」

竜の騎士との戦いで冥竜王の目ぼしい配下は殆ど全滅しているため彼に連絡を取れ

る存在は今となっては極少数だ。

現在は大魔王の下にいるキルバーンだが元はと言えば冥竜王の配下である彼はその数少ない存在の一人だった。冥竜王の現在地を知っているのが良い証拠である。

「……む」

左腕が形を崩したのを感じブラッドは意識を引き締めた。いよいよダメージと疲労感が限界を突破しそうなのである。

それを見たピロロは慌てて顔色を変えた。

「わわわ、タイヘンタイヘン！ 食べられちゃう！」

「誰が食うかお前みたいなの腹壊しそうなモン。いいから早くゲートまで連れてけ腹黒道化」

「……わーお酷い言われよう。でもバーン様からも言われてるし、ちゃんと案内しますよっと」

そう言つて瞬間移動呪文を使うキルバーン。

一瞬の空間の歪みの後、ブラッドたちは懐かしい暗黒とマグマの大地に立っていた。

「バーン様の大五宮廷のゲートですよ。じゃあ確かに送りましたからね」

「バイバーイ！」

そう言つて死神と小さな道化は姿を消した。恐らく大魔宮に戻ったのだろう。

主人への無礼な態度にレアロードの額に青筋が浮かび上がっていたがブラッドは気にするな、とだけ声をかけた。

あの道化は人をおちよくるのが何より大好きなのだ。

それよりもジオン大陸へ戻ることが優先だ。そう考えブラッドは瞬間移動呪文を使いジオン大陸中央、首都ユオンにある居城へ移動する。

大陸を守る結界も術者であるブラッドなら関係なく通過できるため一行はあつざりと懐かしのジオン大陸へと戻ることになった。

自身の私室に飛んだブラッドは小さく息をついた。今の瞬間移動呪文で身体に残る魔法力を使い切ったためだ。

兎にも角にも助けが必要だ。重傷の三魔族を癒すために必要な手配をすべく満身創痕の身体を動かそうとした瞬間、それはやって来た。

飛び込んで来たそれは黒い物体だ。

物体は私室のドアを蹴破り、その勢いそのままにブラッドの鳩尾に一発叩き込むと、この世全ての怨嗟が詰まったような低い声が部屋に響いた。

「くーそーあーにーきーいいい……………」

（あつやつべ俺死んだ）

満身創痕の身体を襲った痛恨の一撃に、不死身のはずの呪怨王ブラッドは死を覚悟し

た。

なぜなら物体ことジオン親衛隊長クリスタが憤怒の表情……否、最早悪鬼羅刹のような形相でそこにいたのだからそれは当然だ。

一応兄であるはずのブラッドに遠慮容赦なく追撃を叩き込むクリスタ。その様子はまさに修羅であった。

弟は切れていた。

二人掛かりで処理していたはずの日々の修羅場を突如として丸投げされ兄は逃亡。しかも不在は知らせるなどという無茶ぶりに加え頭の痛い戦闘狂の相手もさせられた上に逃亡した兄は放蕩の旅。怒るのも当然であった。

どこからどう考えてもブラッドの自業自得である。

一応レアロードが止めに入ろうと奮闘しているが片手を失う重傷を負っていた彼は呆気なく闘気で吹き飛ばされていた。

ブラッドは消し炭になりかけた獅子の魔族を見やったがその身体はピクピクと痙攣を残すのみだった。一応生きているあたりクリスタも手加減はしたらしい。

余波でボルフレイムとティグルドも巻き込まれていたが辛うじて息はあるようだった。

「……はっ!? 俺は一体何を……ってどうしたんです王よ!? 心臓が一つない上に馬鹿

どもまで満身創痕の瀕死ではありませんか！ 一体誰が……」

「お約束をありがとうなクリスタ……あと取り繕ってるけど素が出てるぞお前……」

「あつ」

瀕死寸前の兄に声のことを指摘されクリスタは黒いローブの下で焦ったような声をあげた。

その声はどこまでもブラッドのものと非常に似通っていた。それがクリスタが普段声を隠す理由でもある。普通に紛らわしいし、彼らの関係を知らない魔族に尋ねられるのも面倒なのだ。

重傷の自分と三馬鹿の様子に加え失態に慌てふためく親衛隊長の様子に微笑を零し、ブラッドはようやく帰って来たことを実感した。

「ただいま、クリスタ。丸投げにして悪かったな」

『……よくも帰りやがったなクソ兄貴。もっと早く帰ってこいつつのバーカ！』

「……クリスタうっさいよー？ 城中に響き渡る勢いでマジうるさいよー？ 夜中にちよー迷惑」

「あ、ブラッド帰ってるおかえりー。死にかけの三馬鹿は回収しとくよー」

蹴破られたドアから親衛隊員の二人がひよっこり顔をだす。その顔を見てブラッドは驚きに目を見開いた。その二人は親衛隊員の中でも滅多に顔を出さない深部に勤め



る者達だったからだ。

今まさに走馬灯を眺めているだろう三魔族を回収するとその二人はそのまま姿を消した。

その喧騒を嗅ぎつけてか俄かに廊下が騒ぎ始めたのを感じブラッドは冷や汗を流した。

「ちよつと待て。今この辺りに何人固まつてる……?」

『……お忘れですか王。親衛隊全員に招集をかけたと言いましたよね』

「待て。待つて本当にちよつと待てということは説教コース確定じゃないか!? 俺今心臓一個ないんだけど休みなし!」

『当たり前だろう大馬鹿放蕩王!! 寝るなら反省してから寝ろ!! どうせ死なないだろうー!』

「そうだけど酷い!」

身体はすでに休息を訴えていたがそうは問屋が卸さない。そう言いたげな親衛隊長の様子に呪怨王は諦めのため息をついた。

魔界の第三勢力は皆疲れている。それは王の不在中ジオン大陸を支えきつた親衛隊員たちの様子を見れば一目瞭然だった。

続々と集まる親衛隊員たちに囲まれそれぞれから言葉を受け取る。

最後に親衛隊長の長い説教が始まったその時、ブラッドはふと未来のことを考えた。それは自分の再生が終わってからのことだ。

(今回のダメージからの再生は大体十年前後だろうから……もしかしたらまだ、間に合うかもしれないな)

ブラッドはいつか見た太陽と海を思い出す。

大魔王は慎重派だ。十年という魔族にとつては短い時間で起きることができればまだ地上はあるかもしれない。

もしかしたらいつか海で見た美しい夜明けを、次は皆で見ることができるかもしれないという期待が淡く浮かび上がり、ブラッドは口元に小さな笑みを浮かべた。

「なあクリスタ」

『何です、説教はまだ続けますよ』

「次に俺が起きたら、いつか皆で太陽を見に行こう。できるなら海から昇るものをさ。きつと綺麗だぞ」

『……全く。説教中に反省なしとはいいい度胸です。じゃあ早く起きてくださいよっ』

どこまでも呆れたような声音の弟の言葉に頷くブラッド。

限界近くまで溜め込んでいた瘴気も天界にぶつけて来た今、彼自身が急いで処理すべき事柄はほとんどなく安心して眠れそうだった。

だんだんと遠くなる弟の説教の声を子守唄がわりに、ブラッドはゆつくりと意識を闇に沈めていった。

かくして冥竜王の騒動を発端に始まった第三勢力の旅行譚は終わりを告げた。

瘴気の中で微睡む呪怨王は近い未来のことに思いを馳せ、再生の眠りについた。だが彼は知らない。未来に生まれる進化する魔神のことを。

彼は後悔するだろう。あの時竜の騎士を見逃したことを。けれど未来は変わらない。

小さな勇者が大魔王を下し地上に平和を取り戻す先まで目覚めることのない呪怨王は、今はただ安らかな眠りに身を任せるのだった。

……to be continued?